

鳥類

① 千葉県の鳥類

千葉県は、東から南は太平洋に、西は東京湾、北は利根川に接しており、水辺の環境は豊かである。したがって、水辺に生息する種は多様で、個体数も多い。また、温和な気候であり、冬鳥も多い。房総丘陵では、森林性の種が繁殖する。千葉県では、千葉県産の鳥類が目録として1972年に316種、1976年に332種が公表されている（千葉県,1972; 1976）。千葉県の自然誌シリーズで多くの千葉県内の生物が紹介された。鳥類に関しては、千葉県史料研究財団（2000;

2002）に掲載されており、まとめられリスト化された（千葉県史料研究財団,2003）。さらに動物写真集がこの千葉県の自然誌シリーズで発行された（千葉県史料研究財団,2005）。これらの報告を総括的にまとめると、400種以上が千葉県で確認されたことになる。千葉県の鳥類相に関しては、「千葉県レッドデータブック（動物編）」（以降、2000年版）（千葉県環境部自然保護課,2000）を参照していただきたい。

② 選定基準について

種の選定のための評価基準とカテゴリーは2000年版で用いた選定方法を基準とした。また、千葉県レッドリスト（動物編）2006年版（以降、2006年版）作成の際、閲覧できなかった情報を改訂のために収集した。主として文献と観察記録から情報を収集した。1)2006年以降新たに発行された文献および2006年版で閲覧できなかった文献、2)観察記録から情報を収集した。

1) 文献

今回の改訂では、2000年版および2006年版で参照した文献を引き続き参考にした。また、評価にあたり、定量的に個体数の減少や分布域の減少をデータや文献から得るため、地域の出現種リストやカウント結果などの記録が掲載されている文献を引用した。江戸後期から明治時代以降を時間軸とし、個体数や分布の減少を定量的におさえることを目的とし文献を閲覧した。三沢博志が中心となり2006年版で閲覧できなかった文献を確認し情報を集約した。

しかし、減少率や個体数などを具体的に表している文献は、極めて少なかったため、千葉市の保護上重要な野生生物をとり扱った千葉市レッドリスト（千葉市2004）なども参照した。なお、2006年版では、最も個体数が減少していると考えられたシギ科およびチドリ科の種も千葉市（2004）などを参考に選定した。

2) 観察記録

野鳥観察をする自然愛好家などの観察記録は、

文献として公表されないことも多い。観察記録の中でも、個体数が大きく減少していると一般的に考えられている種の記録を協力者から提供していただき、本文中で私信として用いた。提供していただいた記録の中には、2000-2006年版で、観察記録を参考にできなかった情報も多かった。内房、外房、利根川河口などでも箕輪義隆、高木武、佐藤達夫が、現地調査により観察記録を収集した。

なお、本文中の種ごとの渡りの区分は便宜的に留鳥、夏鳥、冬鳥、旅鳥のカテゴリーに大別した。出現頻度を普通、稀、極稀に分けた。個体数は多い、多くない、少なくない、少ないの4つに分けた。個体数に関して明らかな増減がある種については、その動向を記した。観察記録等のデータを付記した。

3) 分布図

分布図は文献や観察記録から作成した。分布図の情報も検討の対象にした。ただし、本書では基本的にタカ目、フクロウ目など違法捕獲による攪乱が考えられる猛禽類に関しては分布図の掲載を避けた。さらにシロチドリ、コアジサシ、ヤイロチョウなど繁殖地が限定される地上営巣の種に関しても、写真撮影による攪乱が起こる可能性を考慮し、分布図の掲載を避けた。

大きく前述の1)と2)、3)により、カテゴリーなどを再検討し、繁殖や越冬が新たに確認された種の記録を参考に検討した。作業に当たっては、分科会の高木 武、箕輪義隆、三沢博志、嶋田哲郎、

佐藤達夫の見解を桑原和之がとりまとめた。千葉市（2004）などを参考に2006年に大きく改訂された。2011年の改訂では3種を解除した。アオサギ、セグロセキレイなどは各地で増加しているため解除した。クロガモは九十九里浜の調査が進み、文献なども公表され砂浜海上に多くが生息していることが確認されたので解除した。千葉県南部にウグイス、エナガ、ヤマガラ、メジロの4種も多く生息していることが確認されたため解除した。以下でカテゴリー別に2006年の改訂の経緯とともに述べる。

X：消息不明・絶滅生物

過去に繁殖記録があるが、1970年以降の繁殖記録がない種に関しては、変更はしなかった。なお、千葉県内でコウノトリ、クロトキは2004年と2005年に記録されたが、定期的な記録ではないので2006年版に引き続き消息不明種・絶滅生物とした。千葉県内で個体数が少ないが繁殖期に確認されているヤイロチョウは2006年に選定した。20年間繁殖記録のない、クイナとヨタカ2種の繁殖個体群に関しては近年繁殖記録がないため消息不明として改訂した。

A：最重要保護生物

国際的に稀少である種。極東・アジア地域もしくは日本に固有で、生息数の減少が著しい種。千葉県レッドリスト（動物編）2000年版で重要保護生物として選定したサシバ、チュウヒ、シロチドリ、セイタカシギ、ツバメチドリ、コアジサシ、アオバズク、コサメビタキなどの減少が、著しかったため、最重要保護生物として2006年に改訂した。千葉県内で個体数が少ないが繁殖期に確認されているクロツグミを2006年に選定した。さらに、九十九里平野などで記録が多かったが、現在減少が著しいチュウジシギも2006年に選定した。イソシギ、トラツグミ、キビタキに関しては繁殖個体群に関して保護が必要であるため最重要保護生物に改訂した。コミミズク、アカコッコは越冬期の記録が減少著しいため最重要保護生物に改訂した。

B：重要保護生物

国内で生息数が少ないか、著しく減少した種。千葉県レッドリスト（動物編）2000年版で要保護生物として選定したホオジロガモ、バン、キセキレイは、各地で減少したため、2006年に

重要保護生物とした。東京湾岸などで減少が著しいハマシギ、キリアイ、ツルシギ、タカブシギは、2006年に選定した。国内で生息数が少ないビロードキンクロ、著しく減少したウズラシギ、アカアシシギ、シラコバトを重要保護生物として改訂した。

C：要保護生物

千葉県内で生息数が少ないか、著しく減少した種。千葉県レッドリスト（動物編）2000年版では一般保護生物として選定したビロードキンクロやヒメアマツバメは、個体数が多くないので、2006年に要保護生物とした。2006年の改訂では、県内の一部の地域にしか生息しないか著しく減少した種、個体数が多いが東京湾、九十九里海岸などで著しく減少した種であるスズガモ、ムナグロ、ミユビシギ、アオアシシギ、クサシギ、チュウシャクシギ、オオジュリンなどを要保護生物とした。イワヒバリやハギマシコは、越冬地で減少が著しいため、2006年に選定した。渡りの時期に記録されるシギ・チドリ類の観察個体数が東京湾などで著しく減少したため、要保護生物として2006年に選定した。チュウシャクシギも要保護生物として2011年に改訂した。2006年まで重要保護生物としていたツミは、都市部でも繁殖が記録され増加したため要保護生物に改訂した。

D：一般保護生物

2006年まで要保護生物としていたメジロを一般保護生物とした。都市部などで増加の傾向がみられたことが大きな理由である。個体数の変遷の記録は、得られなかったが分布が拡大し、繁殖地も増加したカワウとアオサギは一般保護生物として2006年に改訂した。2006年以降も個体数が増加したアオサギは、本改訂では一般保護生物から解除した。

2006年まで要保護生物としていたチョウゲンボウは、都市部でも繁殖が記録されるようになったため一般保護生物とした。トビは、都市部でも記録されるようになったため一般保護生物とした。トウネンは九十九里浜の調査が進み、砂浜に多くが生息していることが確認されたので一般保護生物に改訂した。

③ 引用文献

- 我孫子市経済環境部環境保全課（1995）我孫子市／自然環境鳥類調査報告書. 168pp. 我孫子市, 我孫子.
- 我孫子野鳥を守る会（1994）手賀沼の鳥 20年の観察記録. 165pp. 我孫子野鳥を守る会, 我孫子.
- 青木正志（1994）梅ヶ瀬溪谷・大福山周辺の鳥類 1982－1992年（梅ヶ瀬溪谷・大福山周辺鳥類目録）. 「市原市自然環境実態調査報告書」, pp.77-81.
- 青木正志・桑原和之（1994）房総丘陵の鳥類相. 「市原市梅ヶ瀬溪谷・大福山および君津市清和県民の森の鳥類相. 自然公園自然環境調査報告書」, pp.87-96.
- 青木正志・和仁道大・原田茂（1992）舟田池周辺・青葉の森・千城台野鳥観察園の鳥類調査. 「平成3年度標本資料収集動物植物標本目録」, pp.77-111.
- 青森県（2010）青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－. pp.200. 青森県環境生活部自然保護課, 青森.
- 浅川裕之・桑原和之（1999）身近な里山で野鳥観察. Birder 13（6）: 36-42.
- 安曇惣四郎（1937）宮城県宮城郡高砂村に於けるオオセッカの繁殖状況の観察. 鳥獣彙報 2（11）: 59-65.
- Austin, O.L. and Kuroda, N.（1953）The birds of Japan : Their status and distribution. Bull. Miss. Comp. Zool. Harvard 109（4）: 279-613. London.
- オーストン, アラン（1898）アマツバメ（*Cypselus pacificus*）に付ひて. 動雑 10（111）: 26.
- 東 淳樹・武内和彦・恒川篤史（1998）谷津環境におけるサシバの行動と生息条件. 第12回環境情報科学論文集, pp.239-244.
- 綾 富美子・桑原和之（2000）ホトトギス. Birder 14（7）: 35.
- Bent, A.C.（1940）Life histories of North American cuckoos, goatsuckers, hummingbirds, and their allies. U.S. Nat. Mus. Bull. 176.
- Birkhead, T.M.（1985）Coloniality and social behaviour in the Atlantic Alcidae（*Nettleship, D.N. & Birkhead, T.M. ed.*）, pp.355-382.
- Brazil, M.（1991）The birds of Japan. 466pp. Christopher Helm, London.
- Campbell, A.（1900）Nests and Eggs of Australian Birds. Vol. 1. pp.530-531 Published by the author, Melbourne.
- Cheng, T.-H.（1988）A Synopsis of the Avifauna of China. Science Press, Beijing.
- 千葉県（1972）千葉県鳥類目録基礎資料 No. 1. 27pp. 千葉県林務課, 千葉.
- 千葉県（1975）千葉県鳥類目録 昭和50年度. 134pp. 千葉県環境部自然保護課, 千葉.
- 千葉県（1976）千葉県における鳥類の生息状況調査報告書. 129pp. 千葉県環境部自然保護課, 千葉.
- 千葉県（2004a）鳥類. 「平成15年度三番瀬自然環境総合解析「三番瀬の現状」報告書 VII」, pp.15-19. 千葉県, 千葉.
- 千葉県（2004b）平成15年度三番瀬自然環境総合解析「三番瀬の現状」報告書（概要版）. 72pp. 千葉県, 千葉.
- 千葉県（2007）平成18年度サギ類生息状況調査報告書. 82pp. 千葉県, 千葉.
- 千葉県環境部自然保護課（1984）利根川河川敷における野生鳥類生息状況調査報告書. 44 pp. 千葉県環境部自然保護課, 千葉.
- 千葉県環境部自然保護課（1986）千葉県鳥類生息分布図作成調査報告書. 千葉県環境部自然保護課, 92pp. 千葉.
- 千葉県環境部自然保護課（1988）オオセッカ生息調査報告書. 千葉県環境部自然保護課, 千葉.
- 千葉県環境部自然保護課（1990）ヤマドリ生息状況調査報告書. 22pp. 千葉県環境部自然保護課, 千葉.
- 千葉県環境部自然保護課（1994）千葉県野生鳥類生息分布図作成調査報告書. 73pp. 千葉県環境部自然保護課, 千葉.
- 千葉県環境部自然保護課（2000）千葉県の保護上重要な野生生物－千葉県レッドデータブック 動物編. 438pp. 千葉県環境部自然保護課, 千葉.
- 千葉県環境生活部自然保護課（2006）千葉県

- の保護上重要な野生生物ー千葉県レッドデータブックー 動物編<2006年改訂版>. 36pp. 千葉県環境生活部自然保護課, 千葉.
- 千葉県教育委員会 (1999) 千葉県立中央博物館山の分館 (仮称) 環境調査報告書. 千葉県教育委員会, 千葉.
- 千葉県教育委員会 (2000) 平成9年度千葉県立中央博物館山の分館 (仮称) 環境調査報告書. 134pp. 千葉県教育委員会, 千葉.
- 千葉県史料研究財団 (2000) 千葉県の自然誌 本編7 千葉県の動物2 海の動物. 812pp. 千葉県, 千葉.
- 千葉県史料研究財団 (2002) 千葉県の自然誌 本編6 千葉県の動物1 陸と淡水の動物. 988pp. 千葉県, 千葉.
- 千葉県史料研究財団 (2003) 千葉県の自然誌 資料 千葉県産動物総目録. 378pp. 千葉県, 千葉.
- 千葉県史料研究財団 (2005) 千葉県の自然誌 別編3 千葉県動物写真集. 464pp. 千葉県, 千葉.
- 千葉市環境局環境保全部環境保全推進課 (2004) 千葉市の保護上重要な野生生物ー千葉市レッドリストー. (編) 財団法人自然環境研究センター. 105pp. 千葉市環境局環境保全部環境保全推進課, 千葉.
- 銚子野鳥同好会 (1990) 銚子の野鳥. 84pp. 銚子野鳥同好会, 銚子.
- Collar, N.J., Crosby, M.J. & Stattersfield, A.J. (1994) Birds to Watch 2: The World List of Threatened Birds. pp.87. BirdLife International, Cambridge.
- Cramp, S. & Simmons, K.E.L. (eds.) (1983) The birds of the Western Palearctic. vol. III. 913pp. Oxford.
- Delany, S. & Scott, D. (2006) Waterbird population estimates - Fourth edition. pp.239. Wetland International, Wageningen, Netherlands.
- Dement'ev, G.P. & Gladkov, N.A. (ed.) (1954) Birds of the Soviet Union, vol.5 (translated from Russian in 1968). 879pp. Israel Program for Scientific Translations, Jerusalem.
- Donald, C.H. (1953) Bird migration across the Himalayas. J. Bombay Nat. Hist. Soc., 51: 269-271.
- 遠藤孝一 (1989) オオタカ保護の現状と問題点. Strix 8: 233-247.
- 遠藤孝一・平野敏明・植田睦之 (1991) 日本におけるツミ *Accipiter gularis* の繁殖状況. Strix 10: 171-179.
- Flint, V.E., Boehme, R.L., Kostin, Y.V. & Kuznetsov, A.A. (1987) A field guide to birds of the USSR. 353pp. Princeton University Press, New Jersey.
- 藤巻裕蔵 (1994) 北海道東部におけるオオジシギの生息状況. Strix 13: 53-63.
- 藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之 (1997a) シギ・チドリ全国カウント報告書 1996秋. 130pp. 日本湿地ネットワーク. シギ・チドリ委員会, 豊橋.
- 藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之 (1997b) シギ・チドリ全国カウント報告書 1997春. 271pp. 日本湿地ネットワーク. シギ・チドリ委員会, 豊橋.
- 藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之 (1998a) シギ・チドリ全国カウント報告書 1997秋. 265pp. 日本湿地ネットワーク. シギ・チドリ委員会, 豊橋.
- 藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之 (1998b) シギ・チドリ全国カウント報告書 1998春. 271pp. 日本湿地ネットワーク. シギ・チドリ委員会, 豊橋.
- 藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之 (1999) シギ・チドリ全国カウント報告書 1998秋. 265pp. 日本湿地ネットワーク. シギ・チドリ委員会, 豊橋.
- 福田道雄 (1985) 都心に生きるカワウ. 動物と自然 15 (2) : 11-15.
- 布留川 毅 (2008) 平成20年度収蔵資料展示解説書「海辺の鳥たちー豊かな房総の海に舞うー」. 21pp. 千葉県立中央博物館分館海の博物館, 勝浦.
- 布留川 毅 (2009) 海の生きもの観察ノート⑧ 海の鳥を観察しよう. 36pp. 千葉県立中央博物館分館海の博物館, 勝浦.
- 布留川 毅・桑原和之 (1991) 夷隅川河口周辺の鳥類相. 「水郷筑波国定公園・県立大利根自然公園・県立九十九里自然公園・自然公園自然環境調査報告書」, pp.127-145.
- 岐阜県健康福祉部自然環境森林課 (2001) 岐阜県のワシタカ類. 28pp. 岐阜県健康福祉部自然環境森林課, 岐阜.
- 呉 弘植・蔡 熙永 (1999) 韓国の済州島で

- 観察されたオシドリの大群越冬. 日鳥学誌 48: 161-163.
- 行徳野鳥観察舎友の会 (2005) 2005年9月千葉県サギ塘調査報告書. 34pp. 行徳野鳥観察舎友の会, 市川.
- 羽田健三・寺西けさい (1968) オオヨシキリの生活史に関する研究. II Polygyny and Territory. 日本生態学会誌 18: 204-212.
- 原田 茂 (1998) 四街道市鹿渡小名木調整池周辺の鳥類. 我孫子市鳥博報 6: 27-36.
- 原田 茂 (2002) 四街道市鹿渡小名木調整池周辺の鳥類. 我孫子市鳥博報 10: 33-36.
- 原田 茂・桑原和之・鈴木 明・小倉正一 (1995) 千葉県四街道市鳥類目録. 我孫子市鳥博報 4: 5-42.
- Harris, M.P. & Birkhead, T.M. (1985) Breeding ecology the Atlantic Alcidae. (Nettleship, D.N. & Birkhead, T.M. ed.) , pp.155-204.
- 長谷川良信 (1966) 鶺鴒の森龍沢山大巖寺. 105pp. 大巖寺文化苑, 千葉.
- 橋本洋一・桑原和之 (1992) 印旛沼におけるサギ科Ardeidae 8種の生息場所. 我孫子市鳥博報 1: 9-22.
- 蓮尾純子 (1979) 新浜水鳥保護区の変遷と環境の改善計画. 千葉県新浜水鳥保護区生物調査報告Ⅳ (千葉県・新浜研究会編), pp.154-172. 新浜研究会, 船橋.
- 蓮尾純子 (1982) 野鳥観察日記. pp.104-108. 筑摩書房, 東京.
- 蓮尾純子 (1990) 水鳥が戻ってきた. 207pp. NTT出版, 東京.
- 蓮尾純子・亀谷辰朗・原島政己 (1980) 新浜保護区の鳥類. 「千葉県新浜水鳥保護区 (行徳近郊緑地特別保全地区) 生物調査報告Ⅴ」, 昭和54年度: 130-170.
- 早川雅晴・寺山守 (1993) ツバメ*Hirundo rustica*のフンからみた羽アリの動態. Strix 12: 209-213.
- 林 武雄 (1989) 帰らぬつばさーほろびゆくコウノトリの挽歌. 166pp. ぎょうせい, 東京.
- Hayman, P., Marchant, J. & Prater, T. (1986) Shorebirds. 412pp. Christopher Helm, London.
- 樋口広芳・森岡弘之・山岸 哲 (編) (1996) 日本動物大百科第4巻鳥類 I. 182pp. 平凡社, 東京.
- 樋口広芳・森岡弘之・山岸 哲 (編) (1997) 日本動物大百科第4巻鳥類 II. 180 pp. 平凡社, 東京.
- 平野賢次 (2010) 石川野鳥年鑑2009. 105pp. 日本野鳥の会石川, 金沢.
- 平野敏明・君島昌夫 (1997) 宇都宮市の住宅地付近におけるツミ *Accipiter gularis* の繁殖状況と食物. Strix 11: 119-129.
- Hiraoka, T. (1996) Utilization of artificial floating objects as nest platforms by Little grebes and Eurasian coots in Lake Teganuma, Central Japan. J. Yamashina Inst. Ornithol. 28:108-112.
- 平田鹿郎 (1955) 千葉県で剩り記録のない鳥類. 千葉県生物学会会報 5: 9.
- del Hoyo, J., Elliott, A. & Sargatal, J. eds. (1992) Handbook of the birds of the world.Vol.1. 696 pp. Lynx edicions, Barcelona.
- del Hoyo, J., Elliott, A. & Sargatal, J. eds. (1996) Handbook of the birds of the world.Vol.3.Hoazin to Auks. 821 pp. Linx editions, Barcelona.
- del Hoyo, J., Elliott, A. & Christie, D.A. eds. (2006) Handbook of the birds of the world.Vol.11.Old world Flycatchers to old world Warblers. 798 pp. Linx editions, Barcelona.
- 茨城県 (1993) ワシタカ類生息分布調査報告書. 30pp. 茨城県農林水産部林政課, 水戸.
- 市原市自然ガイドブック刊行委員会 (1995) 自然探訪いちばら. 127pp. 市原市環境部環境保全課, 市原.
- Iijima, I. (1891) Notes on a collection of birds from Tsushima. Jour. Coll. Sci. Imp.Univ.Japan 5: 105-128.
- 飯田知彦 (1991) オオジシギ*Gallinago hardwickii*の繁殖行動と生息環境. Strix 10: 31-50.
- Ikawa, M. & Ikawa, H. (2009) Lesser white-fronted goose *Anser erythropus* at Sarobetsu in northern Hokkaido, Japan: a preliminary report on numbers in autumn. Ornithol. Sci. 8: 131-138.
- Ingram, C. (1908) Ornithological notes from Japan. Ibis (ser.9) 2: 129-169.
- 石田朗・松沢友紀・亀田佳代子・成末雅恵 (2000) 日本におけるカワウの増加と被害. Strix

- 18: 1-28.
- 石黒夏美・桑原和之・桐原政志 (2000) 千葉市花見川河口および都川河口の鳥類相. 「東京湾の鳥類」(桑原和之・箕輪義隆・石黒夏美・嶋田哲郎編), pp.380-410.
- 石黒夏美・桑原和之・箕輪義隆 (2000) 東京湾海上の鳥類相 (1997-1998年). 「東京湾の鳥類」(桑原和之・箕輪義隆・石黒夏美・嶋田哲郎編), pp.313-355.
- 石川 勉 (1977) 谷津干潟の鳥. 野鳥 42 (10): 528-533.
- 石川 勉 (1979) 干潟の鳥類. 動物と自然 9: 20-24.
- 石川 勉 (1982) 谷津干潟におけるダイゼンの羽色変化について (1981年). Strix 1: 24-29.
- 石川 勉 (1983) オオソリハシシギの性差について. 野鳥 48 (5): 36-37.
- 石川 勉 (1984) オオソリハシシギ. 野生生物 14 (4): 14-15.
- 石川 勉 (1985) コミミズクの鳴き声について. Strix 4: 67-69.
- 石川 勉 (1986) コミミズクのねぐらの出入り時間. Strix 5: 86-88.
- 石川 勉 (1991) 葦原に宿るコミミズクの冬越し. アニマ No.220: 70-74.
- 石川 勉 (1993) 東京湾の渡り鳥. 246pp. 晶文社, 東京.
- 石川 勉 (2007) 闇夜を舞う忍者コミミズク. 「フクロウ」(志水謙祐・神戸宇孝・櫛引サカ工編), pp.38-43.
- 石川 勉・桑原和之 (1983) 谷津干潟におけるチドリ類の個体数の変化. Strix 2: 19-32.
- 石川 勉・桑原和之 (1984) 谷津干潟の鳥類とその保護. Strix 3: 90-98.
- 石川 勉・桑原和之 (1984b) 谷津干潟のシギ類の観察. 私たちの自然 25 (6): 10-15.
- 石沢慈鳥・千羽晋示 (1967) 日本産タカ類12種の食性. 山階鳥研報 5: 13-33.
- 岩浅有紀・笹渕紘平 (2009) トキの野生復帰の現状. 私たちの自然 50 (7): 5-7.
- 岩瀬 徹・桑原和之 (1989) 東京湾の自然の宝庫. 小櫃川河口. 自然保護 328: 18-19.
- 神保健次・神保 忍・山崎良子 (1986) 厚木市におけるヤマセミの生態調査ー採餌と営巣場所についてー. 神奈川自然誌資料 7: 15-18.
- 香川敏明 (1989) 同所性オオヨシキリとコヨシキリの種間関係. 日本鳥学会誌 37: 129-144.
- 柿沢亮三 (1988) 手賀沼の鳥類相とくに水禽の渡来生息状況. 「手賀沼1990年代の課題ー鳥と人との共存ー」, pp.29-43. 財団法人山階鳥類研究所, 我孫子.
- 鎌ヶ谷市郷土資料館 (1999) 鎌ヶ谷市郷土資料館調査報告書Ⅶ 鎌ヶ谷の野鳥. 72pp. 鎌ヶ谷市郷土資料館, 鎌ヶ谷.
- 金子敏之 (2010) 船橋市の野鳥. 156pp. 自費出版, 船橋.
- 環境庁 (1981) 日本産鳥類の繁殖分布. 554pp. 大蔵省印刷局, 東京.
- 環境庁自然保護局 (1996) 平成6年度鳥獣関係統計. 339pp.
- 環境庁自然保護局 (1997) 平成7年度鳥獣関係統計. 330pp.
- 環境庁自然環境局 (2010) 第41回ガンカモ類の生息調査報告書 (平成21年度). 218pp. 緑生研究所, 調布.
- 環境庁自然保護局野生生物課 (編) (1996) 猛禽類保護の進め方 (特にイヌワシ、クマタカ、オオタカについて). 105pp. (財) 日本鳥類保護連盟, 東京.
- 環境庁自然保護局・日本野鳥の会 (1994) 第4回自然環境保全基礎調査動植物分布調査報告書 (鳥類の集団繁殖地及び集団ねぐら). pp.89-101. 環境庁自然保護局, 東京.
- 環境省自然環境局生物多様性センター (2010) 自然環境保全基礎調査動物分布調査日本の動物分布図集. 1069 pp. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.
- 唐沢孝一 (1976) コアジサシのコロニーとシロチドリ繁殖について. 千葉生物誌 25: 99-109.
- 唐沢孝一 (1996) 成田山新勝寺周辺のツバメの高密度繁殖. Urban birds 13 (2): 64-88.
- Kawakami, K. & Higuchi, H. (2003) Population trend estimation of three threatened bird species in Japanese rural forests: the Japanese Night Heron *Gorsachius goisagi*, Goshawk *Accipiter gentilis* and Grey-faced Buzzard *Butastur indicus*. Journal of the Yamashina Institute for Ornithology 35: 19-29.
- 河村宣樹 (1975) 山口県八代におけるナベヅル

の研究 ねぐらの分布と利用. 山階鳥研報 7: 112-123.

橘川次郎 (1962) 千葉県鳥類目録. 千葉県動物誌基礎資料 1: 68-80.

桐原政志・桑原和之 (1998) 千葉市美浜区幕張埋立地鳥類目録. 我孫子市鳥博報 6: 1-24.

桐原政志・桑原和之 (2000) 幕張埋立地鳥類目録. 「東京湾の鳥類」(桑原和之・箕輪義隆・石黒夏美・嶋田哲郎編), pp.264-310.

北川捷康 (1967) 新浜附近の鳥類. ふたまた No.2, pp.50-90. 静岡県立二俣高等学校.

清棲幸保 (1952) 日本鳥類大図鑑Ⅲ. 241pp. 講談社, 東京.

木幡冬樹・桑原和之 (1995) いすみ環境と文化のさと周辺の鳥類. 平成6年度千葉県自然環境保全学術調査報告書: 35-56. 千葉県環境部自然保護課, 千葉.

越川重治 (1992) 千葉県へのイワツバメの侵入についてⅡ. 千葉生物誌 43 (3): 28-33.

越川重治 (2003) 梅ヶ瀬渓谷自然環境保全地域(市原市) 3. 鳥類. 「平成14年度千葉県自然環境調査報告書」, pp.103-111.

越川重治 (2005) Ⅱ高塚山自然環境保全地域(安房郡千倉町) 4鳥類. 「平成16年度千葉県自然環境調査報告書」, pp.124-130.

越川重治 (2007) 千葉県におけるムクドリが集団ねぐらの調査記録とその変遷. 千葉生物誌 57: 55-68.

越川重治 (2010) 元清澄山自然環境保全地域(君津市) 3鳥類. 「平成21年度千葉県自然環境調査報告書」, pp.31-38.

黒田長禮 (1908) 羽田鴨場の記. 64pp. 齋藤活版所, 東京.

黒田長禮 (1918) 鶺鴒千鳥類圖説. 485 pp. 裳華房書店, 東京.

黒田長禮 (1934) 鳥類原色大図鑑. 修教社書院, 東京.

黒田長禮 (1939) 雁と鴨. 120pp. 修教社書院, 東京.

黒田長禮 (1970) 新版 鳥類原色大図鑑Ⅲ. 156pp. 講談社, 東京.

桑原和之 (1985) 干潟のチドリ・ダイゼン(すばらしき動物5). 80pp. いちい書房, 東京.

桑原和之 (1988) 石川県金沢市におけるイカルチドリの越冬記録. Bull. JBBA 3: 35-38.

桑原和之 (1990a) 習志野茜浜の鳥類相と個体数変動. 千葉中博研報(自然) 1: 29-36.

桑原和之 (1990b) 千葉市青葉町に現れたコイ

カル. 日本の生物 4 (3): 78-79.

桑原和之 (1991a) 水郷筑波国定公園・利根川周辺の鳥類. 「自然公園自然環境調査報告書」, pp.23-16. 千葉県環境部自然保護課, 千葉.

桑原和之 (1991b) 千葉県谷津干潟におけるチドリ科メダイチドリ *Charadrius mongolus* の食性. 千葉中博研報(自然) 1 (2): 29-31.

桑原和之 (1996a) 鳥類相の変遷. 「都市につくる自然」(沼田眞・中村俊彦監修), pp.425-465.

桑原和之 (1996b) 谷津干潟におけるダイゼン *Pluvialis squatarola* の採食行動. 我孫子市鳥博報 5: 125-140.

桑原和之 (1997a) コシアカツバメ. 生態園今のみどころ 72. 2pp. 千葉県立中央博物館, 千葉.

桑原和之 (1997b) 千葉市の鳥類 2. 海岸部におけるカモ・カモメ類の個体数変動と分布. 「湾岸都市の生態系と自然保護」(沼田 眞編), pp. 467-481.

桑原和之 (2000) ヘラシギ・カラフトアオアシシギ・シロハラチュウシャクシギ・エスキモーコシャクシギ・マミジロゲリ・ヤマチドリ. 「レッドデータアニマルズ第1巻」(小原秀雄・浦本昌紀・太田英利・松井正文編), pp.194-196.

桑原和之 (2000) ロシアからの渡り鳥ー極東で繁殖するシギ・チドリ類ー. 「千葉県立中央博物館平成12年度特別展解説書」, pp.89-92. 千葉県立中央博物館, 千葉.

桑原和之 (2005) オグロシギ. 千葉県立中央博物館友の会ニュース 55: 1.

桑原和之 (2006a) 干潟の鳥類相ー多様な東京湾の水鳥類ー. 地球環境 11: 227-233.

桑原和之 (2006b) 身近な海辺の野鳥たち. 私たちの自然 47 (517): 12-13.

桑原和之 (2006c) 冬海辺の野鳥たち. 私たちの自然 47 (522): 10-11.

桑原和之 (2007a) ミヤコドリ *Haematopus ostralegus*. 生きもののつながり雑学コーナー. 私たちの自然 48 (526): 11.

桑原和之 (2007b) 春海辺の野鳥たちー増えているオオバン・減っているバンー. 私たちの自然 48 (527): 12-13.

桑原和之 (2008a) ジュニアのぺえじ冬の海辺砂浜の野鳥たち(冬). 私たちの自然 49 (543): 12-13.

- 桑原和之 (2008b) ジュニアのぺえじ春の海辺
砂浜の野鳥たち. 私たちの自然 49(535):
12-13.
- 桑原和之 (2009) 水田に飛来するシギ・チドリ
類. 私たちの自然 50 (549) : 8-10.
- 桑原和之 (2010a) シギ・チドリ類. 「野生
動物保護の事典」(野生生物保護学会編),
pp.497-502. 朝倉書店, 東京.
- 桑原和之 (2010b) カイツブリ. 生きものの
つながり雑学コーナー. 私たちの自然 51
(558) : 18.
- 桑原和之 (2010c) 野鳥の撮影をする前に. 生
命のにぎわい調査団生命のにぎわい通信
11: 1.
- 桑原和之 (2010d) ダイゼン. 生きもののつな
がり雑学コーナー. 私たちの自然 51(569):
18.
- 桑原和之 (2010e) タゲリ. 私たちの自然 51
(553) : 14-15.
- 桑原和之 (2010f) トウネン. 私たちの自然
51 (560) : 12-13.
- 桑原和之・石川勉 (1984) 谷津干潟のチドリ類
の観察. 私たちの自然 25 (10) : 8-13.
- 桑原和之・石川勉 (1991) 谷津干潟におけるチュ
ウシャクシギ *Numenius phaeopus* の塹で
の個体変動数. Bull.JBBA : 657-660.
- 桑原和之・箕輪義隆 (2000) 減少した夏鳥, ヨ
タカ. Birder 14 (7) : 36-37.
- 桑原和之・中川富男 (1995) 石川県高松海岸に
おけるミヤコドリの標識記録. Bull.JBBA
10: 88-98.
- 桑原和之・中川富男 (1998) 水鳥の自然保
護. 「自然保護ハンドブック」(沼田 眞編),
pp.618-41. 朝倉書店, 東京.
- 桑原和之・鈴木恒治 (2002) タマシギ・ツバメ
チドリ. 「千葉県の自然誌. 県史シリーズ本編
6」(千葉県史料研究財団編), pp.789-791.
- 桑原和之・高木 武 (2000) 利根川河口に飛
来するカモメ類. 「千葉県立中央博物館平成
12年度特別2展解説書」, pp.93-98.
- 桑原和之・田久保晴孝 (1997) 鳥類相. 「東京
湾の生物誌」(沼田 眞・風呂田利夫編),
pp.299-322.
- 桑原和之・鶴見みや古 (2000) 減っていくジシ
ギ類. Birder 14 (5) : 32-37.
- 桑原和之・和仁道大 (1994) カンムリカイツ
ブリ. 千葉中央博物館だより 19-20 合併号:
18-19.
- 桑原和之・箕輪義隆・石毛久美子 (1999) 三番瀬・
春の鳥類相. 遺伝 53 (10) : 85-90.
- 桑原和之・箕輪義隆・田久保晴孝 (1999) 三番瀬・
冬の鳥類相. Birder 13 (11) : 44-54.
- 桑原和之・箕輪義隆・米持千里 (2005) 甚兵衛
広沼サンカノゴイやチュウヒが生息する貴重
な水辺. Birder 19 (3) : 70-72.
- 桑原和之・田村 満・東 陽一 (1993) 南房総
国定公園の鳥類 1. 富津岬の鳥相. 「自然公園
自然環境調査報告書」, pp.73-82.
- 桑原和之・石川 勉・和仁道大・井尻謹絵 (1999)
習志野市谷津干潟とその周辺の鳥類相. 「千
葉県動物誌」, pp.995-1013. 文一総合出
版, 東京.
- 桑原和之・久保田克彦・石川 勉・田悟和巳
(1984) 谷津干潟におけるチュウシャクシ
ギの塹について. Strix 3: 66-72.
- 桑原和之・箕輪義隆・石黒夏美・嶋田哲郎 (編・著)
(2000) 多摩川河口域における水鳥相の解
析ー特に東京湾の干潟環境との対応につい
てー. とうきゅう環境浄化財団研究報告研究助
成・学術研究 28 (198) : 1-557.
- 桑原和之・箕輪義隆・石黒夏美・田久保晴孝
(2000) 2-3. 千葉県船橋中央埠頭・三番瀬
鳥類目録. 「東京湾の鳥類」, pp.150-207.
たけしま出版, 流山.
- 桑原和之・箕輪義隆・澤口晶子・嶋田哲郎 (2000)
ロシアから渡ってくるシギ・チドリ類ー千
葉県における重要渡来地ー. 「千葉県立中央
博物館平成12年度特別展解説書」, pp.78-
86.
- 桑原和之・箕輪義隆・田村 満・白田仁志 (2000)
東京湾のアジサシ類. Birder 14 (6) : 26-
33
- 桑原和之・奴賀俊光・箕輪義隆・高木 武 (2008)
飯岡海岸の鳥類相. 我孫子市鳥博報 16:
1-23.
- 桑原和之・茂田良光・野口一誠・富谷健三 (2004)
千葉県におけるアカコッコ *Turdus
celanops* の記録. Bull.JBBA. 17 (2) :
43-48.
- 桑原和之・鈴木弘行・石黒夏美・田久保晴孝
(2001) 江戸川区葛西の鳥類 1999年. 我
孫子市鳥博報 9: 1-10.
- 桑原和之・箕輪義隆・早川雅晴・木幡冬樹・嶋田
哲郎 (1997) 湾岸都市千葉市の鳥類 3-コ
アジサシの生態. 特にその繁殖ステージにつ
いて. 「千葉市野生動植物の生息状況及び生

- 態系調査報告」, pp.483-504. 信山社サイテック, 東京.
- 桑原和之・三沢博志・箕輪義隆・高木 武・田久保晴孝 (2004) 千葉県三番瀬鳥類目録. 我孫子市鳥博報 12: 241-266.
- 桑原和之・田中利彦・田久保晴孝・箕輪義隆・嶋田哲郎 (1994) 千葉県船橋市船橋中央埠頭の鳥類相と個体数変動. 我孫子鳥博報 3: 37-70.
- 桑原和之・原田 茂・木幡冬樹・鈴木 明・青木正志・落合加代子 (1994) 千葉県立中央博物館周辺鳥類目録. 千葉県立中央博物館研究報告 特別号 1: 215-234.
- 桑原和之・和仁道夫・落合加代子・原田 茂・綾富美子・石黒夏美 (1997) 湾岸都市千葉市の鳥類 I. 内陸部の鳥類. 「湾岸都市の生態系と自然保護」, pp.425-465. 信山社サイテック, 東京.
- 桑原和之・三沢博志・箕輪義隆・野口一誠・繁倉崇・奴賀俊光・高木 武 (2006) 銚子市鳥類目録. 我孫子市鳥博報 14: 71-147.
- 桑原和之・木幡冬樹・和仁道夫・原田 茂・落合加代子・鈴木 明・仁科研一・小倉正一 (1999) 千葉市内陸部と四街道市の鳥類目録. 「千葉県動物誌」, pp.941-969. 文一総合出版, 東京.
- 前橋営林局 (編) (1998) オオタカの営巣地における森林施業. 142pp. (社) 日本林業技術協会, 東京.
- Madge, S. & Burn, H. (1989) Wildfowl. 298 pp. Christopher Helm, London.
- 松田道生 (1971) 減少する東京のカワセミ. 野鳥 36 (6) : 300-305.
- 松田道生 (1975) 千葉の鳥類. 「千葉県の生物」. (日本生物教育学会第30回大会実行委員会編) pp.123-135. 千葉.
- Meine, C. D. & Archibald, G. W. eds. (1996) The Cranes: Status survey and conservation action plan. 294 pp. IUCN, Gland, Switzerland
- 南房総動植物調査団 (1990) 南房総地域自然環境保全基礎調査報告書. 413pp. 千葉県環境部自然保護課, 千葉.
- 箕輪義隆 (2007) 海鳥識別ハンドブック. 80 pp. 文一総合出版, 東京.
- 箕輪義隆・桑原和之 (2000) ロシアにもいたトキやコウノトリ. 「千葉県立中央博物館平成12年度特別展解説書」, pp.99-100.
- 箕輪義隆・桑原和之・田村 満 (1996) 小櫃川河口の鳥類. 小櫃川河口鳥類目録 (1974-1986). 我孫子市鳥博報 5: 85-113.
- 箕輪義隆・桑原和之・嶋田哲郎 (1999) 東京湾海上の鳥類相. Strix 17: 31-41.
- 箕輪義隆・桑原和之・田村 満 (1999) 小櫃川河口鳥類目録 (1974 ~ 1994年). 「千葉県動物誌」, pp.970-994. 文一総合出版, 東京.
- 箕輪義隆・田村 満・桑原和之 (2000) 木更津市小櫃川河口鳥類目録. 「東京湾の鳥類」(桑原和之・箕輪義隆・石黒夏美・嶋田哲郎編), pp.96-149.
- 箕輪義隆・桑原和之・清田義昭・早川雅晴 (2000) みんなで守ろう 千葉市の鳥・コアジサシ. 8pp. 千葉市環境局環境保全部環境保全推進課, 千葉.
- 箕輪義隆・桑原和之・浅川裕之・奴賀俊光・小田島高之 (2007) 印旛沼のチュウヒとハイイロチュウヒの生息状況. Bull.JBBA 19: 75-76.
- 箕輪義隆・嶋田哲郎・桑原和之・金田彦太郎・杉坂学・鈴木康之 (1991) 多摩川河口鳥類目録. 神奈川自然誌資料 (12) : 1-5.
- 箕輪義隆・桑原和之・三沢博志・鈴木 明・奴賀俊光・小林大光・米持千里・田中忠義 (2007) 印旛沼の鳥類. Bull.JBBA 19: 74-75.
- 箕輪義隆・桑原和之・三沢博志・鈴木 明・奴賀俊光・米持千里・小林大光・田中忠義 (2005) 印旛沼鳥類目録. 我孫子市鳥博報 13: 1-48.
- 三沢博志・桑原和之・箕輪義隆 (2003) 千葉県船橋市鳥類目録. 我孫子市鳥博報 11: 103-138.
- 三沢博志・桑原和之・小川和子・奴賀俊光・綾富美子・泉 宏子・箕輪義隆・本間征・高島斎二 (2005) 一宮川河口干潟およびその周辺の鳥類目録. 我孫子市鳥博報 13: 77-136.
- 三島冬嗣 (1957a) 雁鴨類数種の記録. 鳥獣集報 16 (1) : 113-116.
- 三島冬嗣 (1957b) 鷺鷹類4種の記録. 鳥獣集報 16 (1) : 106-108.
- 三島冬嗣 (1957c) シラコバトの観察. 鳥獣集報 16 (1) : 118-119.
- 宮 彰男・三戸貞夫・蛭名純一・関下 斉 (2005) 仏沼干拓地で繁殖期に観察されたシマクイナについて. 日鳥学誌 54 (2) : 104-107.

- 宮林泰彦(編)(1994)ガン類渡来地目録第1版.
315 pp. 雁を保護する会, 若柳.
- Miyabayashi, Y. & Mundkur, T. (1999)
Atlas of key sites for Anatidae in the
East Asian Flyway. 148pp. Wetlands
International - Japan, Tokyo and
Wetlands International - Asia Pacific,
Kuala Lumpur.
- 舩山徳太郎(1939)宮城県産鳥類新追加(2).
附 鷗の1新亜種. 植物及動物 7: 1219-
1227.
- 舩山徳太郎(1947)オオセッカの新分布地, そ
の他. 鳥 12 (56): 4-5.
- 舩山徳太郎(1949)オオセッカに就いて. 鳥
12 (58): 115-143.
- 百瀬邦和(1986)ツルの記録 1985年5月~
1986年4月. サロルンカムイ: 22.
- 百瀬邦和・桑原和之(1988)小櫃川河口の鳥類
1 小櫃川河口鳥類目録(1974~1986).
千葉生物誌 37: 80-96.
- 母袋卓也(1973)セッカの雄の行動と一夫多妻
制. 山階鳥研報 7: 87-103.
- 村井雅之・樋口広芳(1991)アカゲラとアリ
スイによる発泡スチロール製擬木の利用.
Strix 10: 285-290.
- 永田尚志(1997)オオセッカの現状と保全への
提言. 山階鳥研報 29: 27-42.
- Nakamura, H. (1990) Brood Parasitism by
the Cuckoo *Cuculus canorus* in Japan
and the Start of New Parasitism on
the Azure-winged Magpie *Cyanopica
cyana*. Jap. J. Ornithol. 39: 1-18.
- Nakamura, H. & Miyazawa, Y. (1997)
Movements, space use and social
organization of radio-tracked Common
Cuckoos during the breeding season
in Japan. Jap. J. Ornithol. 46: 23-54.
- 中村登流(1981)霧ヶ峰コジュリン個体数の年
変動と消滅. 鳥 30 (2/3): 57-74.
- 中村登流・中村雅彦(1995)原色日本野鳥生態
図鑑. 水鳥編. 304pp. 保育社, 大阪.
- 日本野鳥の会(1980)第2回自然環境保全基礎
調査動物分布調査報告書(鳥類)全国版: 鳥
類繁殖地図調査1978. 560pp. 日本野鳥
の会, 東京.
- 日本鳥学会(1974)日本鳥類目録第5版.
131pp. 学習研究社, 東京.
- 日本鳥学会(2000)日本鳥類目録改訂第6版.
345pp. 日本鳥学会, 帯広.
- 日本鳥学会目録編集委員会(1997)日本産鳥類
リスト. 日本鳥学会誌 46: 59-91.
- 日本鳥類保護連盟(1988)鳥630図鑑. 394
pp. 日本鳥類保護連盟, 東京.
- 日本野鳥の会神奈川支部(1998)神奈川の鳥
1991-96 — 神奈川県鳥類目録Ⅲ — . 神
奈川野鳥ライブラリー 4. 日本野鳥の会神
奈川支部. 303pp. 日本野鳥の会神奈川支
部, 横浜.
- 日本野鳥の会徳島県支部(1987)徳島県鳥類目
録. 338pp. 日本野鳥の会徳島県支部, 徳島.
- 西村昌彦(1979)カワセミとヤマセミの営巣場
所選択について. 山階鳥研報 11: 39-48.
- 新田和弘・藤巻裕蔵(1985)繁殖期における
オオジシギの日周活動の季節変化. 鳥 34:
49-55.
- 野田野鳥同好会(1991)野田市を訪れた野鳥た
ち—野田市鳥類目録—. 142pp. 野田野鳥
同好会, 野田.
- 奴賀俊光・桑原和之(2001)外房沖で. Birder
15 (8): 31-34.
- 奴賀俊光・桑原和之・箕輪義隆(2004)九十九
里平野・松尾町から蓮沼村周辺の鳥類相. 我
孫子市鳥博報 12: 135-149.
- 奴賀俊光・桑原和之・箕輪義隆(2005)砂浜
のシギ・チドリたちを観察しよう~九十九里
浜のミユビシギ~. 私たちの自然 511: 14-
15.
- 奴賀俊光・C.P. ノーマン・宮崎龍雄(1998)
天津小湊町・千葉大学海洋バイオシステム研
究センター付近の鳥類相. 千葉大学海洋バイ
オシステム研究センター年報 18: 22-29.
- 奴賀俊光・クリストファー P. ノーマン・森川由
隆(2003)天津小湊町・千葉大学海洋バイ
オシステム研究センターおよび内浦湾周辺の
鳥類. 我孫子市鳥博報 11: 25-36.
- 奴賀俊光・桑原和之・箕輪義隆・富谷健三(2006)
新川から南白亀川までの九十九里の鳥類
1998-2003年. 我孫子市鳥博報 14:
1-64.
- Nuka, T., Norman, C.P., Kuwabara, K. &
Miyazaki, T. (2005) Feeding behavior
and effect of prey availability on
Sanderling *Calidris alba* distribution on
Kujukuri Beach. Ornithological Science
4 (2): 139-146.
- 奴賀俊光・桑原和之・乃一哲久・羽賀秀

- 樹・竹田伸一(2004)千葉県周辺海域における繁殖期のカムリウミスズメ *Synthliboramphus wumizusume* の観察記録. J. Yamashina, Inst. Ornith, 36: 93-96.
- 奴賀俊光・桑原和之・高山順子・関高史・菊地則雄(2003)千葉県勝浦市・千葉県立中央博物館分館・海の博物館付近の鳥類. 我孫子市鳥博報 11: 11-24.
- 小川和子・桑原和之・綾富美子・奴賀俊光・泉宏子・箕輪義隆・本間征・横林庸介(2004)千葉県一宮川河口干潟の鳥類. 我孫子市鳥博報 12: 151-187.
- Ogawa, M. (1908) A hand-list of the birds of Japan. Annot. Zool. Japon., vi: 337-420.
- 小倉正一・青木正志・田中正彦(1991)-4 鳥類. 「千葉市加曽利貝塚遺跡周辺地域の自然環境調査報告書(1990年度)」, pp.134-143. 千葉市都市局公園緑地部緑政課, 千葉.
- 岡田泰明・高木綾子(1986)明治初期の鳥 C.A.M' Vean の報告(1877)から. 応用鳥学集報 6: 17-23.
- 小野宏治・桑原和之・鈴木明・大槻都子・伊坂達樹・堀口努(1990)印旛沼およびその周辺の鳥類. 「自然公園自然環境調査報告書 県立印旛手賀自然公園・県立笠森舞鶴自然公園」, pp.19-39.
- 小野宏治・大槻都子・堀場美紀・密武嗣・内田浩也・堀口努(1990)印旛沼鳥類目録. 「自然公園自然環境調査報告書 県立印旛手賀自然公園・県立笠森舞鶴自然公園」(千葉県自然環境調査会編), pp.30-39.
- 大畑孝二(1989)ウトナイ湖におけるオオジシギの秋の渡りについて. Strix 8: 139-144.
- 大畑孝二・桑原和之・平田豊治・竹田伸一・箕輪義隆(2000)重油流出事故と水鳥の保護活動. 「千葉県立中央博物館平成12年度特別展解説書」, pp.103-109.
- 大庭照代(1981)単純な声と複雑な意味ーアオバズクのさえずり. アニマ 98: 20-24.
- 大庭照代(1990)フクロウ学入門ー闇夜のハンターの素顔を知る. アニマ 120: 56-60.
- 大泰司紀之・中川元(1988)知床の動物. 394pp.北海道大学図書刊行会, 札幌.
- Ornithological Society Japan (1922) A hand-list of the birds of Japan. 184pp. Tokyo Imperial University, Tokyo.
- Ornithological Society Japan (1942) A hand-list of the birds of Japan (3rd. ed) . 238pp. Tokyo Imperial University, Tokyo.
- 大迫義人(2010)コウノトリの野生復帰ー野生下での知られざる行動ー. 私たちの自然 51 (5) : 3-5.
- 尾崎清明(1991)絶滅への歴史 トキ. 動物たちの地球 (6) : 82-86.
- Ripley, S.D. (1977) Rail of the world. 406pp. M.F. Feheley Publ. Ltd., Tront.
- 林野庁(1964)鳥獣関係統計1964. 55pp. 林野庁.
- 林野庁(1965)鳥獣関係統計1965. 66pp. 林野庁.
- 林野庁(1966)鳥獣関係統計1966. 58pp. 林野庁.
- Rose, M. & Scott, D. (1994) Waterbird population. IWRB Pub 129 pp102. International Waterfowl and Wetland Research Bureau, Slimbridge.
- 才木道雄(2006)千葉県清澄山系におけるサンコウチョウの営巣環境. 日鳥学誌 55: 18-23.
- 埼玉県教育委員会・財団法人日本野鳥の会(1982)天然記念物緊急調査報告 越谷のシラコバト. 111pp. 埼玉県教育委員会, 浦和.
- 齋藤吉永(1965)千葉県柏市鳥類目録. 48pp. 自費出版, 柏.
- 齋藤吉永(1968)千葉県柏市鳥類目録(Ⅱ). 15pp. 自費出版, 柏.
- 齋藤敏一(1989)利根川における鳥類の標識調査. 千葉県立大利根博物館調査研究報告 3: 48-56.
- 齋藤敏一(1998)利根川下流部の鳥類相と河口堰建設の鳥類への影響. 利根川河口堰の流域水環境に与えた影響調査報告書(日本自然保護協会報告書 第83号) : 137-156.
- 齋藤敏一(1999)利根川の鳥類. 千葉県動物誌. pp.1020-1032. 文一総合出版, 東京.
- 齋藤敏一・桑原和之(1991)ツバメチドリの繁殖とムナグロの越夏. 日本の生物 5 (2) : 38-39.
- 三番瀬再生計画検討会議事務局(2004)三番瀬周辺の鳥類記録. pp.83-86. 三番瀬再生計画検討会議事務局(編), 千葉県総合企画部政策説明室, 千葉.

- 笹川昭雄 (1993) 東京の空から消えた, トビとミサゴ. 「夏鳥たちの歌は, 今 利尻島から西表島まで 102 人の緊急レポート」 (遠藤公夫編), pp.97-99.
- 佐藤一美 (1995) 大空に飛ベコウノトリ. 166 pp. 講談社, 東京.
- 佐藤広巳・小湊郁夫 (1988) 栗駒山麓一迫川におけるシノリガモの繁殖とその生態. *Strix* 7: 159-176.
- 佐藤達夫・桑原和之 (2007) ウミスズメが保護された. *みみずく鳥獣救護ボランティア通信* 45: 2-3.
- de Schauensee, R.M. (1984) The birds of China. 602 pp. Smithsonian Institution Press, Washington, D.C.
- 茂田良光 (1989a) オオセッカの標識調査. 環境庁委託調査 昭和63年度鳥類観測ステーション報告: 81-85.
- 茂田良光 (1989b) コジュリンの性と齢の識別. 「昭和63年度千葉県立中央博物館自然誌資料調査・収集事業報告書」 (千葉県自然誌資料調査会編), pp.97-102.
- 茂田良光 (1990a) オオセッカの標識調査. 環境庁委託調査 平成元年度鳥類観測ステーション報告: 75-79.
- 茂田良光 (1990b) ヒマラヤを越えるアネハヅル. 「マナスルを越えるツルーヒマラヤ・マナスルーツル撮影隊報告書」 (村口徳行編). pp.14.
- 茂田良光 (1991) 形態と識別 2. オオセッカ. *日本の生物* 5 (3): 48-51.
- 茂田良光 (1992) コジュリンー 謎のエゾエンシス. 形態と識別 13. *Birder* 6 (6): 46-51.
- 茂田良光・桑原和之 (2001) ヒマラヤを越えるツル. 「特別展. ヒマラヤー人・文化・自然ー 千葉県立中央博物館平成11年度特別展解説書」, pp.79-80.
- 茂田良光・百瀬邦和・尾崎清明 (1978) 新浜水鳥保護区における水鳥 (特にシロチドリとコアジサシ) の繁殖状況について. 行徳近郊特別保護地区・生物調査報告 Ⅲ: 139-143.
- 茂田良光・内田博・百瀬浩 (2006) 日本産オオタカ *Accipiter gentilis fujiiyamae* の測定値と識別. *山階鳥類学雑誌* 38: 22-29.
- 嶋田哲郎 (1992) 市川市沖におけるカモ科 Anatidae 鳥類の個体数変動. *Strix* 11: 211-217.
- 嶋田哲郎 (1994) 市川市沖三番瀬の鳥類 (1990年-1992年). *千葉生物誌* 43: 22-28.
- 嶋田哲郎 (1997) 伊豆沼・内沼北東部水田地域における渡去期のマガン *Anser albifrons* の生態ーマガンの朝夕の移動と日中の活動状況ー. *日鳥学誌* 46: 7-22.
- Shimada, T. (2009) Current status and distribution of Greater white-fronted goose in Japan. *Ornithological Science* 8: 163-167.
- 嶋田哲郎・桑原和之 (1994) 千葉縣市原市養老川河口域の鳥類. 市原市自然環境実態調査報告書: 83-92.
- 嶋田哲郎・桑原和之 (1997) 市原市養老川河口域におけるホシハジロとスズガモの分布. *Strix* 15: 83-88.
- 嶋田哲郎・溝田智俊 (2008) 伊豆沼・内沼周辺地域で越冬するマガンの個体数増加にともなう採食地利用パターンの変化. *日鳥学誌* 57: 122-132.
- 嶋田哲郎・桑原和之・箕輪義隆 (1996) 三番瀬の鳥類. 「三番瀬ブックレット01」 (三番瀬フォーラム編), pp.18-25.
- 嶋田哲郎・桑原和之・箕輪義隆・石黒夏美 (2000) 日本で越冬するガンカモ類. 「千葉県立中央博物館平成12年度特別展解説書」, pp.67-77. 千葉県立中央博物館, 千葉.
- Shimada, T., Kuwabara, K., Yamakoshi, S. & Shichi, T. (2002) A case of infanticide in the Spot-billed duck under the high breeding density. *Journal of Ethology* 20: 87-88.
- 島根県立博物館 (1978) 伊達コレクション鳥類標本目録. 128pp. 島根県立博物館, 松江.
- 新浜倶楽部 (1988) 新浜の鳥ー1966年～1968年の記録ー. 257pp. 新浜倶楽部, 武蔵野.
- 新保國弘 (2000) オオタカの森. 232pp. 崙書房, 流山.
- 新保國弘・柳沢朝江 (2002) 千葉県流山市新川耕地の休耕地に渡来した鳥類 (2000年秋期). *我孫子市鳥博報* 10: 23-31.
- 新保國弘・柳沢朝江・片岡真智子・北城道夫・柄澤保彦・桑原和之 (1999) 千葉県におけるケリの初繁殖記録. *Strix* 17: 93-99.
- 白井邦彦 (1953) 関東地方に於けるコシアカツバメ. *野鳥* 18 (3): 151-153.
- 白田仁志・桑原和之・箕輪義隆・石黒夏美・杉坂

- 学 (1998) 多摩川河口鳥類目録. 我孫子市鳥博報 6 : 35-61.
- 市立市川自然博物館 (1993) 市川市鳥類目録 1986年～1991年. 47pp. 市川市立市川自然博物館, 市川.
- 袖ヶ浦市教育委員会 (1999) 袖ヶ浦市史基礎資料調査報告書 10. 95pp. 袖ヶ浦市教育委員会, 袖ヶ浦.
- Storer, R. W. (1987) The possible significance of large eyes in the Red-legged kittiwake. *Condor* 89: 192-194.
- 菅谷江南 (1952) 伸びゆく千葉市と名利龍沢山大巖寺 附:「鵜の森」物語. 60pp. 大巖寺東京事務所, 東京.
- 鈴木恒治 (1990) 利根川下流域の野鳥とその現状. *Bull.JBBA* 5: 40-43.
- 鈴木勇太郎 (1984) 写真集鷺—その愛と生の記録一. 62 pp. 誠文堂新光社, 東京.
- 鈴木勇太郎 (1988) 写真集クロサギ. 93pp. 誠文堂新光社, 東京.
- 高木 武 (1999) サシバとその生息地の現状. *Birder* 13 (6) : 32-36.
- 高木 武 (2000a) スグロカモメ. 「レッドデータアニマルズ第1巻」(小原秀雄・浦本昌紀・太田英利・松井正文編), pp.196-197.
- 高木 武 (2000b) アカアシミツユビカモメ. 「レッドデータアニマルズ第1巻」(小原秀雄・浦本昌紀・太田英利・松井正文編), pp.196-197.
- 高木 武・桑原和之 (2000) 極東で繁殖するカモメ類. *Birder* 13 (10) : 34-39.
- 高野伸二 (1962) ブルーバックスB-94原色・自然の手帳野鳥. 211pp. 講談社, 東京.
- 高野伸二 (1978) 野外ハンドブック・4野鳥. 239pp. 山と溪谷社, 東京.
- 高野伸二 (1981) 日本産鳥類図鑑. 474pp. 東海大学出版会, 東京.
- 竹田伸一・桑原和之・箕輪義隆 (2001) 海上で見られるウミスズメのなかま. *Birder* 15 (8) : 13-19.
- 谷口育英 (1973) 阿蘇高原の野鳥. *野鳥* 38(3): 159-160.
- Takatsukasa, N. (1967) The birds of Nippon. 701pp. Maruzen, Tokyo.
- Taylor, B. & van Perlo, B. (1998) *Rails*. 600pp. Pica press, Sussex.
- 寺沢孝毅・小野宏治 (1996) ウミスズメ類. 「日本動物大百科 鳥類 I」, pp.125-129. 平凡社, 東京.
- Thompson, J., Kuwabara, K. & Fujita, T. (1993) *Shorebirds in Japan*. 8. A Status Overview of Shorebirds in the East Asian-Australasian flyway. (Asian Wetland Bureau ed.) , pp 119-145.
- 時田賢一・桑原和之 (2005) タマシギ *Rostratula benghalensis* の晩秋の営巣記録. 我孫子市鳥博報 13: 143-145.
- 時田賢一・内田 優・内田 聖 (2001) 千葉県流山市における繁殖期のアカゲラ *Dendrocopos major* の記録. 我孫子市鳥博報 9: 73-75.
- 東邦大学野鳥の会 (1976) 印旛沼鳥類調査報告書. 77pp. 東邦大学野鳥の会, 船橋.
- 東邦大学野鳥の会 (1977) 印旛沼鳥類調査報告書繁殖に関して 1976年度. 54pp. 東邦大学野鳥の会, 船橋.
- 東條一史 (1991) ハイタカ属3種入門—日本産3種と北米産3種. *日本の生物* 5 (3) : 30-31.
- 東條一史 (1993) わかってきた日本の生態—富士山麓・ハイタカ観察記録. *アニマ* (246) : 58-60.
- 東京大学演習林鳥類研究会 (2009) 東京大学演習林鳥類目録. 演習林 (東京大学) 48: 103-131.
- 富谷健三 (1999) 房総丘陵の鳥. 「千葉県動物誌」, pp.1033-1051. 文一総合出版, 東京.
- 塚田二三雄 (1999) 千葉県長柄町の鳥. *千葉県動物誌*, pp.1052-1060. 文一総合出版, 東京.
- Tsushima, R. (1987) Observation records on Latham's snipe (*Gallinago hardwickii*) at Tokorozawa city, Kanto plain, central Honshu, Japan, in the breeding season. *J.Yamashina Inst. Ornith.*, 19: 139-144.
- 露崎主計 (2004) 夷隅川河口及び一宮川河口の野鳥調査. 31pp. 自費出版, 千葉.
- Turner, A. & Rose, C. (1989) *A handbook to the Swallows and Martins of the world*. 258pp. Christopher Helm, London.
- 上田恵介 (1986) セッカの発達した一夫多妻制社会. 「鳥類の繁殖戦略 (上)」(山岸哲編), pp.78-106. 東海大学出版会, 東京.
- 内田清之助 (1913) 日本鳥類図説上巻.

- 319pp. 警醒社書店, 東京.
- 内田清之介 (1938) トキ及びクマガワの棲息地とヤイロチョウ繁殖地. 天然記念物調査報告動物部第3輯: 1-19.
- 内田清之助 (1960) 天然記念物・鳥類編. 創元社, 東京.
- 植田睦之 (1992a) ツミ *Accipiter gularis* が繁殖期に捕獲する獲物数の推定. *Strix* 11: 131-136.
- 植田睦之 (1992b) ツミ *Accipiter gularis* にとって都市近郊の緑地はよい環境か? - 都市近郊と山地部の採食環境の比較 -. *Strix* 11: 137-141.
- 植田睦之 (1996) ツミの繁殖成功率の低下とその原因. *Strix* 14: 65-71.
- 植田睦之・金井 裕 (1994) 利根川下流におけるオオセッカの環境選択. 「平成5年度希少野生動物種生息状況調査報告書」, pp.19-23. 環境庁, 東京.
- 卯木達朗 (1973) 群馬の野鳥. 煥乎堂, 前橋.
- Vaurie, C. (1965) *The Birds of the Palearctic Fauna. A systematic reference. Non-Passeriformes.* 763pp. Witherby, London.
- 和仁道大 (1992) 千葉市千城台野鳥観察園の鳥相 (1988-1990). 千葉生物誌 41: 65-69.
- 和仁道大 (1998) 千葉市千城台野鳥観察園の鳥類 (1996年). 我孫子市鳥博報 6: 81-96.
- 和仁道大 (2001) 千葉市千城台野鳥観察園の鳥類 (1997年-2000年). 我孫子市鳥博報 9: 15-34.
- 和仁道大・桑原和之・箕輪義隆 (2003) 千葉県千葉市いなげの浜・検見川の浜の鳥類. 我孫子市鳥博報 11: 75-101.
- 早稲田大学生物同好会 (1973) 千葉県上総一の宮にオオセッカ. 野鳥 38 (7): 47.
- Wells, D.R. (2007) *The birds of the Thai-Malay Peninsula. vol. 2. Passerines.* 800pp. Christopher Helm, London.
- Witherby, H.F. (1913a) *Luscinola pryeris sinensis*, subsp. n. *Bull. Brit. Ornith. Club* 31: 11-13.
- Witherby, H.F. (1913b) (*Emberiza yessoensis continentalis*, subsp. n.) *Bull. Brit. Ornith. Club* 31: 74-75.
- 渡辺一義 (1959) 富士山麓でコジュリンが繁殖. 野鳥 (6): 15-19.
- 薮 健三 (1970) 内浦山の鳥類. 千林試報 2: 70-74.
- 山岸 哲 (1978) ホオジロの社会構造と繁殖番数の安定性. 山階鳥研報 10: 199-299.
- 山岸 哲・明石全弘 (1981) ホオジロのことば. アニマ 98: 12-19.
- 山本浩伸・桑原和之・堀江剛介 (2000) 1999年の石川県内におけるヘラシギの観察記録. のと海洋ふれあいセンター研究報告 6: 27-32.
- 山本浩伸・大畑孝二・桑原和之 (2001) 日本海沿岸の湖沼におけるトモエガモの個体数変動と全国一斉調査の方法の検討. *Strix* 19: 91-101.
- Yamamoto, H., Oohata, K., Kuwabara, K. & Ohkawara, K. (2003) Management and conservation strategies of Katano-kamoike, the smallest Ramsar site in Japan. *Proceedings: International Symposium of the Kanazawa University 21st-Century COE program* 1: 451-453. Kanazawa University, Kanazawa.
- 山本浩伸・大畑孝二・桑原和之・矢田新平 (2000) ロシアから渡来するカモートモエガモ. *Birder* 13 (10): 40-43.
- 山本浩伸・桑原和之・竹田伸一・平田豊治・中川富男 (1999) 河北潟におけるツバメの集団ねぐら. *Bull. JBBA* 14: 10-19.
- 山本浩伸・桑原和之・竹田伸一・平田豊治・中川富男 (2003) 河北潟における鳥類相. 我孫子市鳥博報 11: 45-74.
- 山階芳麿 (1934) 日本の野鳥と其生態第1巻. 524pp. 梓書房, 東京.
- 山階芳麿 (1936) 日本の野鳥と其生態第2巻. 1060pp. 梓書房, 東京.
- 山階芳麿 (1983) 絶滅の危機にひんするトキ. 「トキ 黄昏に消えた飛翔の詩」, pp.52-55. 教育社, 東京.
- 山階鳥類研究所標識研究室 (1997) 平成8年度鳥類標識調査報告書. 山階鳥類研究所. 我孫子.
- 山内可奈子・山崎里実・藤巻祐蔵 (1997) 農耕・住宅地域におけるアカゲラとコアカゲラの営巣条件. 日鳥学誌 46: 121-131.
- 柳澤紀夫 (1973) 増補改訂版野外観察用鳥類図鑑. 360 pp. 日本鳥類保護連盟, 東京.

X オオヨシゴイ サギ科

Ixobrychus eurhythmus (Swinhoe, 1873)

国：絶滅危惧ⅠB類 (EN)

千：X-X-X

【種の特性】 湿原、河川、湖沼等の湿地に生息する。ヨシ、ガマ類が繁茂する地域に見られる。日中は草むらの中に隠れ、夜間、魚類やカエル、エビ、バッタ等を待ち伏せて捕食する。巣などに外敵が近づくと、首を上のにぼし、周囲のヨシに擬態する。繁殖期は5-8月で一夫一妻である。草の茎等を利用し粗雑な皿形の巣を作り、5-6個産卵する。単独で営巣する。条件の良い場所では2-4つがいだいで集団営巣することもある。

【分布】 東アジアの温帯で繁殖する。冬期は南に渡る。マレー半島、フィリピン、ボルネオ等東南アジアで越冬する。国内では夏鳥。北海道、本州中部以北で繁殖する。

【県内の状況】 かつては夏鳥として千葉県内で繁殖していたが、近年の繁殖記録はない。発見年が不明である1巣5卵の記録が行徳で残されている（千葉県, 1976）。利根川流域のヨシ、ガマ類の繁茂する広大な湿地での記録が多い。利根川下流部の小見川で1927年6月20日に♂4個体♀5個体、1934年6月5日に♂2個体が確認されている（齋藤, 1998）。1928年に干潟町や行徳でも確認された（千葉県, 1976）。近年、印旛沼などで観察されている（箕輪・桑原ら, 2005）。江戸川周辺では2006年9月22日東京都江戸川区北小岩7丁目の民家で保護され、翌9月23日に環境省の足環「8A27828」が標識され放鳥された。近年、東京湾岸などでは広大な湿地が減少傾向にあり、観察記録も得られていない。

【保護対策】 広大な湿地の保全が必要である。採食地、営巣に必要なヨシ、ガマなどを中心とした生息環境の維持が望ましい。

【引用文献】 千葉県（1976）／箕輪・桑原ら（2005）／齋藤（1998）

【写真】 2006年9月22日千葉県行徳野鳥観察舎で保護されている個体／山口 誠

（桑原和之・安齊友巳）



オオヨシゴイ

X コウノトリ コウノトリ科

Ciconia boyciana Swinhoe, 1873

国：絶滅危惧ⅠA類 (CR)

千：X-X-X

【種の特性】 大型の水鳥。水田や湿地で採食する。樹上で休息することもある。営巣場所は樹上のほか、電柱や建築物を利用することもある。枝を積み上げて大きな巣を作る。3月中旬から5月に3-4卵を産卵する。約30日の抱卵で孵化する。巣立ちまでの期間は53-55日である（清棲, 1952）。

【分布】 極東地域で繁殖する。冬期は南に渡る。主に中国南東部で越冬する。少数が日本や朝鮮半島で越冬する。かつては留鳥で全国に分布・繁殖していたと考えられるが、明治以降、個体数は急激に減少した（箕輪・桑原, 2000）。兵庫県豊岡市福田では1959年、福井県小浜市栗田では1964年に営巣例があるが、これ最後に国内での繁殖記録はなくなった（佐藤, 1995; 林, 1989）。現在では稀に渡りの季節や越冬期に渡来するだけである。定期的な渡来地はない。2005年以降、兵庫県豊岡市で放鳥された個体が周辺地域に分布している（大迫, 2010）。

【県内の状況】 東京近郊では1870年頃まで普通に見られ、繁殖していた。千葉県でも過去に繁殖していたが、記録が残されていない。千葉県内では繁殖の記録がなくなった種である。1883年1月 手賀沼（橘川, 1962）、1884年2月9日 手賀沼 2羽 帝大動物学教室採集標本（ただし、現在は山階鳥類研究所に保管されているYIO-08713, 08714）などの記録がある。近年、銚子市、富津市、旭市、茂原市、長柄町、成田市などに飛来し、越冬した個体もいる（桑原・三沢ら, 2006）。千葉県内ではほとんど記録がなく、極めて稀な種である。

【保護対策】 広大な湿地の保全が必要である。採食場所である水田などの湿地環境の保全が必要である。

【引用文献】 千葉県（1976）／林（1989）／橘川（1962）／清棲（1952）／桑原・三沢ら（2006）／箕輪・桑原（2000）／大迫（2010）／佐藤（1995）

【写真】 1982年2月8日、銚子市三崎町／繁倉 崇

（桑原和之・箕輪義隆）



コウノトリ

X トキ トキ科

Nipponia nippon (Temminck, 1835)

国：野生絶滅 (EW)

千：X-X-X

【種の特性】 山間部に生息し、沼沢地や水田等の湿地で採食する（内田、1938）。底生生物や魚類を捕食する。営巣場所は山地の樹上で、木の枝等を用い粗雑な巣を造る。3月中旬－4月上旬に2－4卵を産卵する。約30日の抱卵で孵化し、巣立ちまでの期間は約60日である。

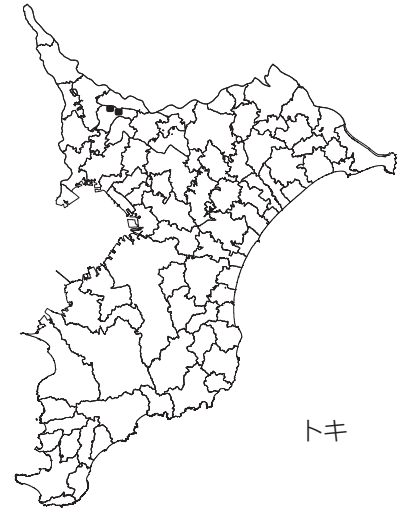
【分布】 日本だけではなく国外ではロシア南東部と朝鮮半島でも分布していた（箕輪・桑原、2000）。ただし、1980年代以降は確認されていない（尾崎、1991）。現在、中国陝西省洋県に分布する。陝西朱鷺保護飼養センターと北京動物園では飼育されている。かつては全国に分布・繁殖していた。明治中期以降までは各地に生息していた。明治初期頃の東京では、湿地や水田でたびたび見られたとされる（岡田・高木、1986）。明治以降に減少した。（内田、1938）。能登半島と佐渡島が、国内では最後まで生息していた地域である。能登半島では1970年に最後の1羽が捕獲された。佐渡島では1981年1月に5羽が、飼育繁殖のために捕獲され野外に生息する個体は絶滅した。日本産のトキは佐渡トキ保護センターで飼育されていた1羽が2003年に死亡した。2008年以降、飼育下で繁殖させた個体が佐渡島に放鳥されている（岩浅・笹淵、2009）。

【県内の状況】 千葉県内では手賀沼で見られていた（内田、1938）。以下の3例が知られる。1883年1月 千葉県（清棲、1952）、1895年2月21日 手賀沼（橘川、1962）、年月日不明 千葉県東葛飾郡手賀沼（清棲、1952）。千葉県内でも繁殖していた可能性はあるが、確実な繁殖記録はない。

【引用文献】 岩浅・笹淵（2009）／橘川（1962）／清棲（1952）／箕輪・桑原（2000）／岡田・高木（1986）／尾崎（1991）／内田（1938）／山階（1983）

【イラスト】 箕輪義隆

（桑原和之・箕輪義隆）



トキ

X クロトキ トキ科

Threskiornis melanocephalus (Latham, 1790)

国：情報不足 (DD)

千：X-X-X

【種の特性】 河川や湖沼等の湿地で採食する。同種または他のサギ類とともに繁殖する。営巣場所は水辺の樹上等で、木の枝等を用いて粗雑な巣を造る。一腹卵数は2－4卵、通常3卵を産む。卵は約23－25日で孵化し、巣立ちまでの期間は約40日である（del Hoyo et al., 1992）。

【分布】 中国北東部などで繁殖する。冬期は南に渡る。中国南部や東南アジアで越冬する。かつては夏鳥として本州に渡来した。「往時（1868年以前）は本邦の鷺山（埼玉県北足立郡野田村）の林に鷺と混棲して繁殖していた」との記述（清棲、1952）から、埼玉県では繁殖していた可能性がある。近年では稀な旅鳥または冬鳥として少数が渡来するのみである。定期的な渡来地はない。

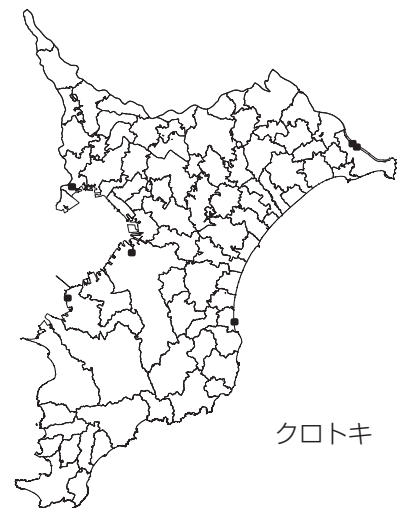
【県内の状況】 千葉県内における過去の繁殖状況は不明である。近年では、稀な旅鳥または冬鳥として海岸部に渡来するだけである。1966年1－10月新浜 1羽（4月17日のみ2羽）等の記録がある（新浜倶楽部、1988）。観察記録が少なくなった。2004年10月2日に幼鳥1羽（写真の個体）が波崎町波崎海岸で記録され、その後、11日に東庄町（千葉県史料研究財団、2005）、銚子市かもめ大橋上流1kmの水田でも観察された（桑原・三沢ら、2006）。

【保護対策】 県内ではほとんど記録がなくなった種である。国内では稀に渡来することから、河川や水田、湖沼等、湿地環境の保全が望ましい。

【引用文献】 千葉県史料研究財団（2005）／del Hoyo et al.（1992）／清棲（1952）／桑原・三沢ら（2006）／新浜倶楽部（1988）

【写真】 2004年10月16日、神栖市矢田部 利根川下流／坂東俊輝

（桑原和之・箕輪義隆）



クロトキ

X マガン カモ科

Anser albifrons (Scopoli, 1769)

国：準絶滅危惧 (NT)

千：X-X-X

【種の特性】国内には亜種 *A.a. frontalis* が渡来する。国外ではヨーロッパの一部やシベリア・北アメリカ極北部、グリーンランドで繁殖し、温帯地域へ渡り、越冬する。越冬地では広い湖沼をねぐらし、日の出と共に飛び立つ（嶋田，1997）。昼間は周辺の水田で落ちモミや草本類、また落ち大豆を採食する（嶋田・溝田，2008）。日没とともにねぐらに戻る。

【分布】局地的に渡来する冬鳥。かつては日本の各地に多数渡来した。現在では、限られた越冬地に渡来するのみである。日本海側では新潟県福島潟や石川県鴨池・島根県宍道湖周辺、太平洋側では宮城県伊豆沼・内沼、蕪栗沼周辺が、主な越冬地となっている（宮林，1994）。マガンは湿地の開発が進むにつれ、関東から北へ越冬地を移動した。近年、宮城県北部が太平洋側の南限となっている。宮城県北部には、日本全体の飛来数の80%以上にあたるおよそ140,000羽ほどが渡来し、国内に飛来する個体数は増加傾向にある（Shimada, 2009）。

【県内の状況】かつては冬鳥。東京湾で記録されていた（Ogawa, 1908）。冬鳥として千葉県内各地で越冬していた（黒田，1939）。現在では、ごく稀な冬鳥である（嶋田・桑原ら，2000）。1950年代まで、新浜等に定期的に飛来していた記録が残されているが、越冬群は見られない（新浜倶楽部，1988）。まとまった群れとして、印旛沼で1977年に28羽が最後に記録された。1980年代以降、各地で稀に飛来するのみである。

【保護対策】ガン類にとって必要な越冬条件は、安全な夜間のねぐらと昼間の採食場となる水田である。ガン類の保全には、こうした豊かな湿地を復元する必要がある。越冬地の復元が望ましい。

【引用文献】黒田（1939）／宮林（1994）／Ogawa（1908）／Shimada（2009）／嶋田・桑原ら（2000）／嶋田・溝田（2008）／新浜倶楽部（1988）

【写真】2003年10月18日、銚子市潮見町／坂東俊輝

（嶋田哲郎・桑原和之）



マガン

X カリガネ カモ科

Anser erythropus (Linnaeus, 1758)

国：準絶滅危惧 (NT)

千：X-X-X

【種の特性】マガンに似る。一回り小さい。マガンより額の白色部が大きく、突出してみえる。目の周囲の黄色いリングが目立つ。マガンの群れに混ざり活動することが多い。

【分布】ユーラシア極北部で繁殖する。冬期は南に渡る。ヨーロッパ南部・エジプト・トルキスタン・インド北西部・中国に渡り、越冬する。国内では冬鳥。個体数は少ない。全国で多くとも数十羽である（宮林，1994；Ikawa & Ikawa, 2009）。

【県内の状況】東京湾で記録されていた（Ornithological Society Japan, 1942）。千葉県内では、1930年代までの記録が残されている（黒田，1939）。

【保護対策】本種の保護には、マガンと同様、安全なねぐらと水田のある豊かな湿地の復元が不可欠である。越冬地の復元が望ましい。

【引用文献】Ikawa & Ikawa（2009）／黒田（1939）／Ornithological Society Japan（1942）／宮林（1994）

【イラスト】箕輪義隆

（嶋田哲郎・桑原和之）



カリガネ

X ヒシクイ カモ科

Anser fabalis (Latham, 1787)

国：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

千：X-X-X

【種の特性】 全長71—89cm。羽色は、全体に黒褐色である。嘴の先の橙色が目立つ。天然記念物。国内には亜種ヒシクイ *A.f.serrirostris* と亜種オオヒシクイ *A.f.middendorffii* の2亜種が渡来し越冬する。亜種ヒシクイは、水田で落ちモミや草本の地上部、根等を採食する。一方、亜種オオヒシクイは、主に沼地を採食場所とし、底中のマコモの地下茎や、ヒシの種子等を採食する。

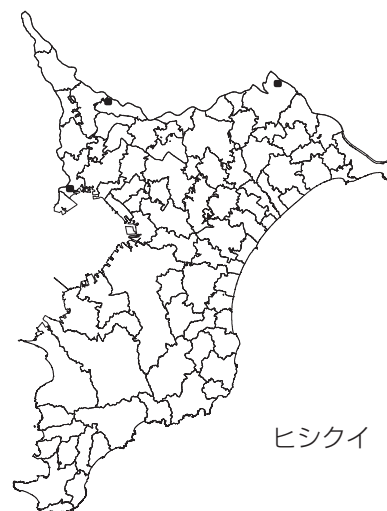
【分布】 国内では、数少ない冬鳥。越冬地及び渡りの中継地は限られている。亜種ヒシクイと亜種オオヒシクイが、それぞれ約6,000羽渡来し越冬する(宮林, 1994; Miyabayashi・Mundkur, 1999)。太平洋側に亜種ヒシクイ、日本海側にオオヒシクイが多く分布する。

【県内の状況】 かつては冬鳥(嶋田・桑原, 2000)。東京湾で記録されていた(Ogawa, 1908)。手賀沼周辺でよくみられた(黒田, 1939)。1977年に手賀沼で14羽の記録がある。1977年以降は、印旛沼や新浜等に少数が渡来した記録しかない(嶋田, 2000; 新浜倶楽部, 1988; 東邦大学野鳥の会, 1976)。千葉県内では、定期的な越冬群は見られない。

【保護対策】 本種の保護には、マガンと同様、安全なねぐらと水田のある豊かな湿地の復元が不可欠である。越冬地の復元が望ましい。

【引用文献】 黒田(1939)／宮林(1994)／Miyabayashi & Mundkur(1999)／Ogawa(1908)／嶋田(2000)／嶋田・桑原ら(2000)／新浜倶楽部(1988)／東邦大学野鳥の会(1976)

【写真】 2009年1月26日。本埜村下井(現：印西市)／小林大光
(嶋田哲郎・桑原和之)



ヒシクイ

X ハクガン カモ科

Anser caerulescens (Linnaeus, 1758)

国：情報不足 (DD)

千：X-X-X

【種の特性】 白色系と青色系(アオハクガン)が知られる。白色系は、全身白く見える。初列風切と初列雨覆だけが黒色である。日本では白色系の亜種ハクガン *A.c.caerulescens* が主に記録される。近年、オオハクガン *A.c.atlanticus* も記録された。

【分布】 国外ではシベリア東端部からアラスカ・カナダのツンドラ地帯で繁殖する。冬期は南に渡る。主に北アメリカ大陸の温暖な地域に渡り、越冬する。国内では稀な冬鳥。かつては、東京湾等、関東地方にも多数渡来していた(黒田, 1939)。かつて、各地のガン類の越冬地に、1—2羽が稀に渡来するのみであった(宮林, 1994; Miyabayashi & Mundkur, 1999)が、現在、数十羽程度にまで増加した。

【県内の状況】 東京湾で記録されていた(Ogawa, 1908)。手賀沼、松戸の記載がある(Ornithological Society Japan, 1922; 1942)。手賀沼1884年1月16日、1958年3月19日新浜の記録がある(千葉県, 1972)。千葉県内では、越冬群は絶滅した(嶋田・桑原ら, 2000)。千葉県内における近年の渡来記録は、1例のみである(桑原・田中ら, 1994; 三沢ら, 2003)。

【保護対策】 本種の保護には、マガンと同様に、安全なねぐらと水田のある豊かな湿地の復元が不可欠である。越冬地の復元が望ましい。

【引用文献】 千葉県(1972)／黒田(1939)／桑原・田中ら(1994)／三沢ら(2003)／宮林(1994)／Miyabayashi & Mundkur(1999)／Ogawa(1908)／Ornithological Society Japan(1922)／Ornithological Society Japan(1942)／嶋田・桑原ら(2000)

【イラスト】 箕輪義隆

(嶋田哲郎・桑原和之)



ハクガン

X サカツラガン カモ科

Anser cygnoides (Linnaeus, 1758)

国：情報不足 (DD)

千：X-X-X

【種の特性】 全長81－94cm。マガンより大きい。頭頂から後頸の羽色は褐色、顔・喉・前頸は淡白色である。

【分布】 シベリア中部・南部とサハリンで繁殖し、朝鮮半島、日本、中国に渡る。国内では稀な冬鳥または迷鳥。少数が迷鳥としてごく稀に渡来する。中国でこの種を家禽化したものをシナガチョウと呼ぶ。

【県内の状況】 千葉県内で昭和の初期には、約200羽の記録がある。新浜で1938年に20羽、1943年に約30羽の記録がある（黒田，1939；新浜倶楽部，1988）。しかし、生息環境の消滅により、越冬群は絶滅した。

【保護対策】 本種の保護には、マガンと同様に、安全なねぐらと水田のある、豊かな湿地の復元が不可欠である。越冬地の復元が望ましい。

【引用文献】 黒田（1939）／新浜倶楽部（1988）

【イラスト】 箕輪義隆

（嶋田哲郎・桑原和之）



サカツラガン

X クイナ クイナ科

Rallus aquaticus Linnaeus, 1758

国：掲載なし

千：A-A-X

【種の特性】 全長29cm。中型のクイナ。上面は、茶色で目立たない地味な羽色。下嘴の赤色や腹から下尾筒にかけて黒と白の横斑模様が目立つ。幼羽では、腹の横斑がなく縦筋があり、顔の色も茶色である。幼羽が確認できれば、成鳥と簡単に区別できる。顔も成鳥で灰色である。警戒心が強く、大変用心深い種で、なかなか、その姿をじっくり見る機会は少ない。

【分布】 ヨーロッパからロシア、中国、韓国、日本にかけ広い地域で繁殖する。冬期は南に渡る。Taylor & Perloら，1998は、3亜種に分けている。国内では北日本で繁殖するが、本州での繁殖地は少ない。秋・冬には暖地に移動する。冬期、全国の河川、水田、ヨシ原などの湿地で越冬する。

【県内の状況】 利根川周辺のヨシ原で繁殖した記録がある。利根川周辺では、繁殖行動やヒナをつれた成鳥が確認されている。1992年8月2日に千葉県香取郡小見川、阿玉川（現在は香取市）で2羽の成鳥と3羽の雛が撮影されている。冬期は、河川、水田、ヨシ原で越冬する（箕輪ら，1999）。湿地の減少とともに個体数も減少したと考えられる。繁殖期に鳴き声は確認されているが、1992年以降、繁殖記録がない。冬期は各地で見られる（銚子野鳥同好会，1990；桑原・三沢ら，2006）

【保護対策】 生息地全域での湿地が減少している。個体数が減少しているため、繁殖地と越冬地の確保が必要である。広い地域の湿地の保全が必要である。

【引用文献】 銚子野鳥同好会（1990）／桑原・三沢ら（2006）／箕輪ら（1999）／Taylor & Perlo（1998）

【写真】 1996年2月14日。本埜村下井（現：印西市）／米持千里

（桑原和之・茂田良光）



クイナ

X ヒメクイナ クイナ科

Porzana pusilla Linnaeus, 1758

国：掲載なし
千：X-X-X

【種の特性】 河川・水田・湿地などの水草やヨシの繁茂した水辺に生息する。食性は主に水生昆虫・貝類だが、植物の種子なども食べる。一夫一妻性で繁殖期は、5-8月で、草むらに造巣する(Ripley, 1977)。卵6-8個を産み、雌雄交替で抱卵する(中村・中村, 1995)。水辺のヨシや水草の繁った場所で生活する。警戒心が強く、観察例は稀であり、生息個体数等、生息状況の詳細は不明である。

【分布】 北海道、本州、四国で繁殖する。本州中部から九州で越冬する個体もいる。本州中部以南では、春と秋に通過の記録がある(中村・中村, 1995)。

【県内の状況】 千葉県内の繁殖例として、1928年に手賀沼(産地：千葉県手賀沼、山階鳥類研究所卵標本YIO-E-01220)、1978年に夷隅町(現：いすみ市)の記録がある(日本野鳥の会, 1980)。山階鳥類研究所では、1926年3月に採集された標本(YIO-113184)を所蔵している。近年の報告例としては標識調査による1987年10月、利根川河川敷(笹川)のヨシ原の記録(齋藤, 1989)があるのみである。1960年以降の観察例としては、新浜(1966年5月、10月、1968年2月、5月)、小見川(1966年11月、1968年11月)、木更津(1972年)がある(新浜倶楽部, 1988; 千葉県, 1976)。2000年以降、繁殖の確証は得られておらず、絶滅が危惧される。

【保護対策】 河川のヨシ原など水生植物の繁茂した湿地の消失に伴い、本種の繁殖・越冬に適した湿地は著しく減少していると考えられ、生息環境の保全が望まれる。

【引用文献】 千葉県(1976) / 中村・中村(1995) / 日本野鳥の会(1980) / Ripley(1977) / 齋藤(1989) / 新浜倶楽部(1988)

【写真】 箕輪義隆

(桑原和之・鶴見みや古)



ヒメクイナ

X アオシギ シギ科

Gallinago solitaria Hodgson, 1831

国：掲載なし
千：X-X-X

【種の特性】 全長30cm。中型のシギの仲間。オオジシギとほぼ同大である。長い嘴が特徴で、小動物を捕食する。アジアの固有種である。本種はサワシギなどとも呼ばれており、かつては狩猟の対象種であった。近年は稀になった(桑原, 2010a)。

【分布】 中国から極東地域で繁殖する。冬期は暖地に渡る。中国から東南アジアが越冬地である。国内では、旅鳥・冬鳥。各地域から記録がある。ただし、国内では稀に見られるに過ぎず、越冬生態や生息個体数は不明である。生息地は河川や溪流などの湿地で、山地の川筋で越冬することが多い。記録される個体数は少なく、稀に単独でみられるにすぎない。

【県内の状況】 1950年代までは、富津市湊川などでも採集されていたという(上野幸雄私信)。人がはいらない河川や湿地で越冬していたようである。正式な記録や標本は少ない(桑原・鶴見, 2000)。山階鳥類研究所では、県内で採集された次の3点の標本を所蔵している。1889年2月 Simosa 千葉縣(YIO-04958)、採集年不明11月千葉縣テガヌマ産(YIO-04979)、1940年1月千葉縣(YIO-04ag4) 標本を所蔵している。(以上、採集年、月、採集地、標本番号、の順)。近年、県内での観察例はほとんどなく、絶滅が危惧される。

【保護対策】 本種の生息地である小河川や休耕田などの湿地を保護する必要がある。湿地への立ち入り禁止区域を設けることも効果がある。

【引用文献】 桑原(2010a) / 桑原・鶴見(2000)

【写真】 2004年12月19日。鋸南町 / 桜井涼子

(桑原和之・鶴見みや古)



アオシギ

X コシギ シギ科

Lymnocryptes minimus (Brünnich, 1764)国：掲載なし
千：X-X-X

【種の特性】 全長：20cm。小型のシギの仲間。長い嘴が特徴で、小動物を捕食する。水田や小河川などの湿地で記録される。個体数は少なく、稀に単独でみられるにすぎない。国内での生息個体数は不明である。

【分布】 ユーラシア大陸の亜寒帯域で繁殖する。繁殖期は6-8月である。冬期は、アフリカ、インド、東南アジアに渡り越冬する。国内には旅鳥や冬鳥として飛来する。北海道、本州、九州、南西諸島など、各地域から記録はあるが、観察される個体数は少ない。

【県内の状況】 1920年12月中旬、手賀沼付近、♀1羽採集（粕山、1939）、1922年、我孫子付近、性別不明、1羽採集（粕山、1939）、1913年2月10日下総（鷹司信輔氏所蔵標本）、1913年1月21日下総で採集（黒田、1918）などの記録がある（我孫子市経済環境部環境保全課、1995）。山階鳥類研究所にも市原郡牛久で1971年11月に採集された標本（YIO-10313）、成東町で1991年1月に採集された標本（YIO-10308）など7点が所蔵されている。冬期、水田や湿地で越冬していたようであるが、開発や、水田の整備に伴い観察例は減少している。千葉県内に生息するシギ・チドリ類の中でも観察例はほとんどない。

【保護対策】 本種の個体数の減少の原因のひとつとして、生息地の減少や狩猟圧などが考えられる。近年は目撃の記録もほとんどないが、タシギなどと間違ふことのないよう狩猟者への助言が望ましい。生息地である休耕田や水田などの湿地を保護する必要がある（桑原・木幡ら、1999）。

【引用文献】 我孫子市経済環境部環境保全課（1995）／黒田（1918）／桑原・木幡ら（1999）／粕山（1939）

【イラスト】 箕輪義隆

（桑原和之・鶴見みや古）



コシギ

X カラスバト ハト科

Columba janthina Temminck, 1830国：準絶滅危惧 (NT)
千：X-X-X

【種の特性】 全長40cm。全身が黒色。光の当たり方により、緑色および紫色に見える部分がある。樹上で特徴のある「ウーウー」と聞こえる大きな声で囀る。島嶼や海岸の常緑広葉樹林で見られる。主に植物食で木の実や花芽を採食する。小笠原諸島に生息する亜種アカガシラカラスバト *C. j. nitens* が1969年に天然記念物に指定された。その後、種としてカラスバトが1971年に天然記念物に指定されている。現在、国内希少野生動植物種として亜種カラスバトが準絶滅危惧、亜種アカガシラカラスバトが絶滅危惧ⅠB類、亜種ヨナクニカラスバト *C. j. stejnegeri* が絶滅危惧ⅠA類に指定されている。国内では、生息地である島嶼や海岸の常緑広葉樹林が開発され、減少している。

【分布】 アジア東部に分布する。国内では、留鳥として伊豆諸島、奄美大島、沖縄諸島などに分布する。日本海側の島嶼でも旅鳥として記録される。

【県内の状況】 銚子市では1941年以前に外川周辺で見られた（鈴木恒治私信）。銚子市では1953-1954年頃までは、稀に記録された（銚子野鳥同好会、1990）。ただし、観察日、個体数などの基本的な記載はなく、詳細は不明である（桑原・三沢ら、2006）。千葉県でも確実な日付がある記録はない。近年の記録もない。

【保護対策】 本種の生息地である島嶼や海岸の常緑広葉樹林などの保護が重要である。植生を保護するだけでなく、ネコやネズミなどの捕食者の排除が必要である。

【引用文献】 銚子野鳥同好会、（1990）／桑原・三沢ら、（2006）

【イラスト】 箕輪義隆

（桑原和之）



カラスバト

X ヨタカ ヨタカ科

Caprimulgus indicus Latham, 1790

国：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

千：A-A-X

【種の特性】「キョキョキョキョ」と聞こえる大きな声で鳴く。夜行性で、夕方から活動する。飛びながら、ガ類・甲虫類等の飛翔性昆虫類を捕食する。平地から標高およそ2,000mまでの山地に渡来する。林縁・林内の空地・明るい林に生息する。夏鳥で繁殖期は主に6-7月である。地面にほとんど巢をせず産卵する。一腹卵数は1-2個である。全国でも1980年代以前は、普通に記録されていた。渡りの期間に鳴き声が確認されることも多かったが、近年は鳴き声すら稀となった。全国的に個体数の減少が著しい種といえる。夜行性で観察が困難であるため、生態等の詳しい資料がほとんどない。

【分布】ロシア極東南部・朝鮮半島・中国南東部で繁殖する。東南アジア・インド等に渡り越冬する。ただし、詳しい越冬状況は不明である。国内では夏鳥として九州以北に渡来し繁殖する。南西諸島・伊豆諸島では旅鳥である。

【県内の状況】数少ない夏鳥であった。個体数は著しく減少している。現在では、極めて稀である（我孫子野鳥を守る会、1994）。1960年代までは、習志野市から船橋市にかけての樹林等、東京湾岸でも繁殖していたらしい。渡りの時期には、旅鳥として普通に記録されていた（蓮尾、1982）。1980年以降、観察記録も極めて少ない種となり、千葉市内の繁殖記録以降、繁殖は確認されていない（桑原・和仁ら、1997）。1987年、1988年に千葉市内のススキ草地で繁殖した。1989年以降、繁殖記録はない。

【保護対策】海岸の疎林や松林、埋立地のススキ草地などの地上で繁殖する種であるため、繁殖地となる地域の立ち入り禁止や保護区の設置が必要である。また、繁殖地の環境、特に自然林や雑木林の保全も必要である。荒廃した植林地や薪炭林の適正な管理が望まれる。植生を保護するだけでなく、ネコやネズミなどの捕食者の排除も必要である。

【引用文献】我孫子野鳥を守る会（1994）／蓮尾（1982）／桑原・和仁ら（1997）

【写真】1987年、千葉市／堀 茂記

（桑原和之）



ヨタカ

X ヤイロチョウ ヤイロチョウ科

Pitta brachyura (Linnaeus, 1766)

国：絶滅危惧ⅠB類 (EN)

千：無-X-X

【種の特性】全長18cm。体上面および雨覆は緑色で光沢がある。腰は青色、下面は淡い褐色、腹部から下尾筒は赤色である。初列風切は黒褐色で、白色の斑がある。樹上で特徴のある「ホホヘン、ホホヘン」と聞こえる大きな声で囀る。常緑広葉樹林の中の下生えがない林床でミミズの仲間、昆虫、などの小動物を採食する。

【分布】夏期は中国東部、日本、台湾、朝鮮半島で繁殖する（内田、1938）。冬期は、中国南部やボルネオ島で越冬する。

【県内の状況】田中義和氏により1996年6月1日から3日にかけて、市原市梅ヶ瀬溪谷で♂1羽が確認された。1999年6月9日に市原市で加藤桂二、加藤恵美子両氏に確認され、写真が撮影されている。また、2005年5月30日には、市原市柿木台 市民の森で森将憲、加藤恵美子両氏に囀りが確認されビデオに録音されている。市原市では、2005年6月5日に1羽が確認され、8日に1羽が別個体に求愛給餌する行動が確認された（高田賢一郎・山田洋司私信）2003年6月19日8:00頃に鴨川市四方木で囀りが（布留川 毅私信）、2005年6月10日14:00頃、鴨川市東京大学千葉演習林 清澄山付近で30分以上の囀りが（五十嵐貴大私信）確認されている。君津市蔵玉付近では、2006年6月24日、囀りが確認された（高田私信）。2006年6月に大福山と元清澄山で声が確認されている（池田文隆私信）。

【保護対策】繁殖地などの保護が必要であるが、繁殖状況などが不明である。保護の対策を講じるためには繁殖地の環境など詳細な繁殖生態の究明が必要である。美しい種であるため、写真撮影の対象となる可能性が高く、野鳥写真撮影愛好家による心無い攪乱が予想される。観察者が集中し悪影響を与える可能性があるため、繁殖地への立ち入りなどの制限が必要となる。

【引用文献】内田（1938）

【写真】1999年6月9日、市原市／加藤桂二

（桑原和之）



X サンショウクイ サンショウクイ科*Pericrocotus divaricatus* (Raffles, 1822)

国：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

千：X-X-X

【種の特性】森林に生息する。主に落葉広葉樹林で繁殖し、常緑広葉樹林などでも見られる。樹幹部で昆虫を捕食する。

【分布】日本から中国、ロシアにかけた極東地域で繁殖する。冬期は南に渡る。国内では夏鳥。本州以北の平地から山地で繁殖する。繁殖分布は局地的であり、現在の繁殖地は次第に減少している。繁殖生態などの詳細は不明である。

【県内の状況】夏鳥であったと考えられる。1950年以前は、個体数は少ないが、習志野原などでも繁殖していたらしい。1950年以降、繁殖個体群はおそらく絶滅した。1970年までは、4月から8月にかけて記録があった。1968. 8. 8 内浦山（千葉県、1972）、1959. 5. 3 柏市 1羽、1962. 4.28 柏市 1羽、1963. 6. 5 習志野市 1羽、1965. 8.26 柏市 2羽、1966. 4.16 柏市 1羽、1967. 4.30 新浜 1羽、1968. 8. 5 内浦山、1969. 5. 2 山武町 1羽 数健三、1974. 6. 4 柏市 1羽等の記録が報告されている（千葉県、1976）。これらの報告でも、記録された個体数はせいぜい1-2羽と少ない。1990年代以降、記録は少ない。現在、春の渡りの時期に外房で少数が記録される。市街地からも稀に記録され、1990年5月22日千葉市中央区千葉県立中央博物館、1羽、鳴きながら上空を通過したなどの記録が報告されている（桑原ら、1994）。

【保護対策】繁殖地などの保護が必要である。ただし、保護の対策を講じるためには繁殖地の環境など詳細な繁殖生態の究明が必要である。

【引用文献】千葉県(1972)／千葉県(1976)／桑原ら(1994)

【写真】2007年4月29日。銚子市君ヶ浜／徳元 茂

(桑原和之)



サンショウクイ

X チゴモズ モズ科*Lanius tigrinus* Drapiez, 1828

国：絶滅危惧ⅠA類 (CR)

千：X-X-X

【種の特性】モズの仲間。頭部は灰色、下面は白色である。太い過眼線は黒色で目立つ。モズより太い声で鳴く。「ゲツ、ゲツ、ゲツ、ゲツ、ゲツ、ウゲゲゲゲーツツ」などと大きな声で鳴く。生態に関する詳しい報告はない。

【分布】日本から中国、朝鮮半島、ロシアで繁殖する。冬期は南に渡る。国内では夏鳥。中部以北の本州で繁殖する。繁殖分布は局地的である。夏鳥として1970年代まで、東京附近の公園や市街地でも繁殖していた。1990年以降、個体数は激減した。現在、国内で個体数は少なく、繁殖地も極めて少ない。

【県内の状況】かつては夏鳥（千葉県、1976）。夏鳥として千葉県内でも繁殖していた。千葉県内では、繁殖個体群は絶滅した。習志野原周辺で繁殖していたようであるが、確実な繁殖例はない。1961年8月6日、新浜 1羽（柳澤紀夫 私信）、1987年5月24日銚子市清水町 野口一誠宅、1羽（野口一誠私信）以降、報告例はない（桑原・三沢ら、2006）。1990年以降、個体数は激減し観察例が得られなくなった。

【保護対策】繁殖地などの保護が必要である。

【引用文献】千葉県(1976)／桑原・三沢ら(2006)

【イラスト】箕輪義隆

(桑原和之)



チゴモズ

X アカモズ モズ科

Lanius cristatus Linnaeus, 1758

国：絶滅危惧ⅠB類（EN）

千：X-X-X

【種の特性】モズの仲間。上面は明るい褐色、下面は白色である。過眼線が黒色で目立つ。

【分布】日本から中国、ロシアで繁殖する。国内では夏鳥。中部以北の本州で繁殖する。繁殖分布は局地的である。冬期は南に渡る。1970年代まで東京附近の公園や市街地でも繁殖していた。1990年以降、個体数は激減した。現在、国内での観察例は稀になった。個体数は少なく、繁殖地は極めて少ない。

【県内の状況】かつては夏鳥。夏鳥として千葉県内でも繁殖していた。千葉県内では、繁殖個体群は絶滅した。1950年以前、習志野原周辺で繁殖していたようであるが、営巣場所の確実な報告例はない。標本の記録も少ない。近年では1969年9月6日、山武町、1羽（富谷健三私信；千葉県、1976）、1970年、市原市上高根 佐藤一郎（市原の自然No.31974）、1991年6月7日、夷隅郡夷隅町（現 いすみ市）国府台小倉山、成鳥1羽（箕輪義隆私信）、1999年10月24日、浮島 1羽（布留川・富谷、私信）などの観察記録があるにすぎない。

【保護対策】繁殖地などの保護が必要である。

【引用文献】千葉県（1976）

【写真】2003年5月24日、習志野市秋津 谷津干潟自然観察センター／星野七奈

（桑原和之）



アカモズ

A サンカノゴイ サギ科

Botaurus stellaris (Linnaeus, 1758)

国：絶滅危惧ⅠB類（EN）

千：A-A-A

【種の特性】湖沼、河川、湿田等の広大なヨシ原に生息する。主にヨシ原の中などで生活するため、開けた水辺では見られない。外敵が接近すると首を上のにぼし、擬態する。羽毛が茶色であるため、周りの環境に紛れ、見つけにくい。繁殖期は、4-7月で、大きなよく通る声で鳴く。「ボーーン、ボーーン」「ボォーン、ボォーン」などと聞こえる。冬期でも鳴くことがある。

【分布】ユーラシア大陸の温帯域からアフリカ大陸の南部にかけて繁殖する。冬期は、熱帯で越冬する。北日本では夏鳥。国内では琵琶湖畔、茨城県、千葉県などで繁殖例がある。関東以南ではごく少数が越冬する

【県内の状況】周年を通じて観察記録がある。過去に手賀沼、東葛飾村戸張（現在の柏市）、印旛郡本埜村、行徳で記録された（千葉県、1976）。本種は広大な湿地に生息するため、利根川水系など千葉県北部の記録しかなかった（千葉県環境部自然保護課、1994）。近年、印旛沼およびその周辺で繁殖期に確認されている（箕輪ら、2005）。利根川下流部でも繁殖が確認されている（齋藤、1998）。甚兵衛広沼で繁殖期に確認されていたが（橋本ら、1992）、減少した。

【保護対策】広大なヨシ原を中心とした水辺の環境が採食、繁殖するために重要である。広大なヨシ原を残すことが望ましい。生息可能な環境を保全し、生息地の回復を試みることも必要である。

【引用文献】千葉県（1976）／千葉県環境部自然保護課（1994）／橋本ら（1992）／桑原・箕輪ら（2005）／齋藤（1998）

【写真】2007年6月5日、本埜村下井（現：印西市）／小林大光

（桑原和之・安齊友巳）



サンカノゴイ

A ヨシゴイ サギ科

Tlxobrychus sinensis (Gmelin,1789)

国：準絶滅危惧 (NT)

千：A-A-A

【種の特性】池、沼、川岸等のヨシ、ガマ類が繁茂する湿地に生息する。魚類やカエル類、昆虫類などの小動物を待ち伏せて捕食する。外敵が接近すると首を上へのぼし、擬態する。羽毛が茶色であるため、周りの環境に紛れ、見つけにくい。繁殖期は5-8月で、一夫一妻である。水辺の植物の葉や茎を生えたまま利用して営巣する。単独で営巣することが多い。条件の良い場所では3-13つがいだて集団営巣をすることもある。1巣卵数は4-7個で、産まれた順に抱卵を始めるため非同時孵化が起こる。

【分布】東アジア、インドなどで繁殖する。温帯で繁殖した個体は、冬期、南に渡る。フィリピンやインドネシア等の熱帯で越冬する。夏鳥として日本に渡来する。北海道から九州までの各地で繁殖する（環境庁、1981）。南日本では越冬期に見られることがある。

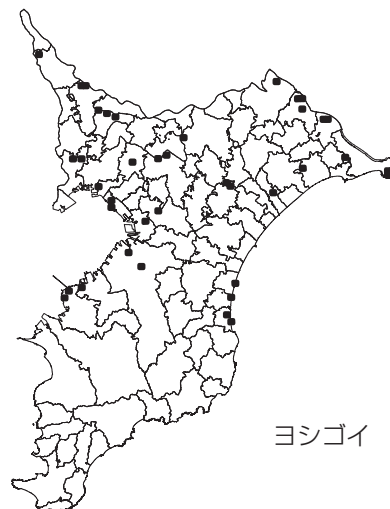
【県内の状況】夏鳥。少ない。極稀に冬期にも観察される。東葛飾、印旛、香取、海匝地区など広い湿原がある地域からの記録が多い（千葉県、1976；千葉県環境部自然保護課、1986）。印旛沼およびその周辺では繁殖期にみられる（橋本ら、1992）。そのほかの地域では少ない（箕輪ら、2005）。近年、広い湿原が減少しており、確実な繁殖の記録は少ない。本種の個体数や確認記録は減少傾向にある。

【保護対策】ヨシ、マコモ、ガマ等が密生する場所に生息するため、このような水辺の環境を保全することが望ましい。

【引用文献】千葉県（1976）／千葉県環境部自然保護課（1986）／橋本ら（1992）／環境庁（1981）／箕輪ら（2005）

【写真】2009年8月8日。本埜村下井（現：印西市） 印旛沼北部調整池（現：印西市）／和田信裕

（桑原和之・安齊友巳）



ヨシゴイ

A ミゾゴイ サギ科

Gorsachius goisagi (Temminck,1835)

国：絶滅危惧ⅠB類 (EN)

千：A-A-A

【種の特性】山地の暗い林に生息する。スギ、ヒノキ等の針葉樹林の密林やクリ、ナラ等の落葉広葉樹の密林に生息する（中村・中村、1995）。夜行性で、夕方から夜間にかけて沢筋や溪流、湖沼の縁などでサワガニ、ミミズ、魚類を捕食する。繁殖期は4-7月。樹枝、樹根などを巣材として、地上から7-20mぐらいの樹上に皿形の巣をつくる。3卵程度産む。雛、親とも外敵が巣に近づくと首をまっすぐに伸ばして静止し、周辺の植生に擬態する。夜行性で、個体数も少ないため詳細な生態はまだ調べられていない。

【分布】日本でだけ繁殖する固有種。冬期は南に渡る。台湾やフィリピンで越冬する。夏鳥として北海道から沖縄にかけて渡来する。本州以南の低山帯で繁殖する。南西諸島では、少数が越冬する。

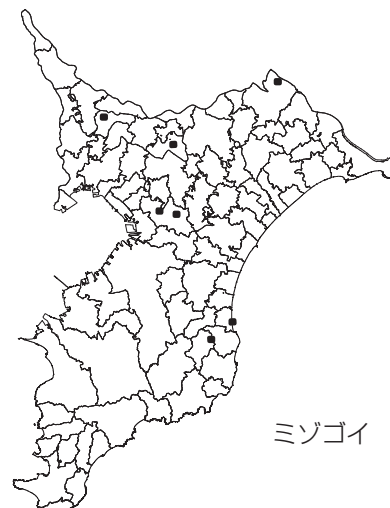
【県内の状況】夏鳥。極めて稀である。個体数も少ない。1960年代までは、千葉郡更科（現在の千葉市）、市原郡戸田（現在の市原市）、新浜、夷隅町などで記録がある。近年の記録は少ない。1972年10月8日に沼南町箕輪で1羽、1972年10月10日に柏市で1羽が確認されている（千葉県、1976）。千葉県内での繁殖記録は少ない。印旛沼周辺で繁殖記録がある（箕輪・桑原ら、2005）。市原市では、2009年7月4日-19日に、営巣している巣にヒナ4羽が記録されている（高田私信）。渡りの時期には、各地で記録がある。

【保護対策】繁殖地の環境を良好に維持することが望ましい。繁殖期、個体数の少ない本種の営巣場所に、趣味の写真撮影などで不必要に近づくことをつつむことが望ましい。

【引用文献】千葉県（1976）／箕輪・桑原ら（2005）／中村・中村（1995）

【写真】2006年9月22日。千葉市若葉区野呂町 泉自然公園／泉 宏子

（桑原和之・安齊友巳）



ミゾゴイ

A カラシラサギ サギ科

Egretta eulophotes (Swinhoe, 1860)

国：準絶滅危惧 (NT)

千：A-A-A

【種の特性】 干潟、河口、海岸、水田など湿地で、魚類などの小動物を捕食する。樹上に枯れ枝を利用して営巣する。4月頃に3-5卵を産む。コサギやアマサギ、アカガシラサギなどと集団繁殖コロニーを形成する。

【分布】 東アジアに固有の種。世界的に個体数が少ない。生息推定個体数はRose & Scott (1994) では2,500羽、Delany & Scott (2006) では2,600-3,400羽と推定されている。朝鮮半島、中国南東部で繁殖する。冬期は南に渡る。インドシナ半島、ボルネオ島、フィリピンなどで越冬する。国内では少く、主に九州以南の干潟に渡来する。近年は、北海道、本州、四国、九州、南西諸島から記録がある。

【県内の状況】 迷鳥として1976年以降に記録された（千葉県環境部自然保護課, 1986）。1982年6月6日に浦安で確認された（千葉県環境部自然保護課, 2000）。三番瀬（三沢ら, 2003）、銚子市（桑原・三沢ら, 2006）、小櫃川河口（箕輪ら, 2000）、一宮川河口干潟（三沢ら, 2005）などで記録がある。現在は、主に夏から秋にかけて見られる。越冬の記録はない。

【保護対策】 採食場所である水辺の環境を残すことが望ましい。生息地である干潟を良好に維持することが望ましい。

【引用文献】 千葉県環境部自然保護課（1986）／千葉県環境部自然保護課（2000）／Delany & Scott (2006)／桑原・三沢ら（2006）／箕輪ら（2000）／三沢ら（2003）／三沢ら（2005）／Rose & Scott (1994)

【写真】 2005年7月23日。市川市行徳鳥獣保護区／山口 誠
（桑原和之・安齊友巳）



カラシラサギ

A クロツラヘラサギ トキ科

Platalea minor Temminck & Schlegel, 1849

国：絶滅危惧ⅠA類 (CR)

千：A-A-A

【種の特性】 ヘラサギの仲間。ヘラシギに比べ、少し小さい。しゃもじ形の平たく大きな嘴が特徴である。嘴を少し開いて水中に差し入れ、首を左右に振り採食する。干潟や湿地・水田・河川湖沼の浅瀬等で、小魚や甲殻類を捕食する。無人島の断崖の岩棚に営巣する。古巣や、横取りした他種の巣を使うことが多い。

【分布】 東アジアに固有の種（Delany & Scott, 2006）。世界的な希少種で個体数が少ない。生息全個体数はRose & Scott (1994) では350羽、Delany & Scott (2006) では1,500羽と推定されている。現在知られている繁殖地は、朝鮮半島西海岸の無人島数ヶ所だけである。台湾・ベトナム・中国・香港・韓国・日本で越冬する。繁殖地における個体数と越冬個体数との間に差があるため、未発見の繁殖地があると考えられている。国内では、極めて稀な冬鳥である。博多湾、沖縄島等、九州地方および南西諸島における観察例が比較的多い。

【県内の状況】 千葉県内では、極めて稀な冬鳥。三番瀬では1992年12月12日1羽（桑原ら, 1994; 桑原・箕輪ら, 2000）、新浜では1963年7月18日-10月6日1羽（蓮尾, 1979; 北川, 1967; 千葉県, 1976; 新浜倶楽部, 1988）などの観察がある。そのほか、小櫃川河口（箕輪ら, 1996; 百瀬・桑原, 1988）や谷津干潟（桑原・石川, 1999）など東京湾岸域の干潟での記録が多い。銚子市や利根川河口域（鈴木, 1990）などの記録がある。沖縄県豊見城市（通称三角池）で2005年3月7日に捕獲されカラーリング（J04）とメタルリングがつけられたオス・成鳥は、3月26日まで沖縄県具志干潟に滞在していた。この（J04）に衛星追跡用の発信機が付けられて放鳥された（PTT56110）。この個体は、行徳鳥獣保護区で2008年3月29日、4月2日-5日に記録された。行徳野鳥観察舎で確認されていた前後に江戸川区葛西臨海公園でも記録された。行徳野鳥観察舎で記録された個体は、その後、4月8日に兵庫県加古川市で確認された。

【保護対策】 現在残されている干潟・湿地の環境を広く保全することが望ましい。生息可能な環境を保全し、生息地の回復を試みることも必要である。

【引用文献】 千葉県（1976）／Delany & Scott (2006)／蓮尾（1979）／北川（1967）／桑原ら（1994）／桑原・石川ら（1999）／桑原・箕輪ら（2000）／箕輪ら（1996）／百瀬・桑原（1988）／Rose & Scott (1994)／新浜倶楽部（1988）／鈴木（1990）

【写真】 2008年4月4日。市川市行徳鳥獣保護区／山口 誠
（桑原和之・佐藤達夫）



クロツラヘラサギ

A アカハジロ カモ科*Aythya baeri* (Radde,1863)

国：情報不足 (DD)

千：A-A-A

【種の特性】湖・池沼・大きな河川に生息する。主に淡水域に渡来する。主に水草類を採食する。

【分布】東アジアに固有に分布する。ロシア東部で繁殖する。冬期は南に渡る。中国・タイ南部・ビルマ等で越冬する。東アジアの個体群は、10,000－20,000羽と推定されている (Delany & Scott, 2006)。国内では稀な冬鳥。個体数も少ない。

【県内の状況】千葉県内では、稀な冬鳥。渡来記録は少ない。内陸の池や沼など、各地で1-2羽の記録がある。印旛沼の記録は1970年代で途絶えた (小野ら, 1990; 箕輪ら, 2005)。行徳等でも記録がある (蓮尾ら, 1980)。長生村中瀬 城之内干拓地では1974年12月1日に♂成鳥が藤原郁久氏に観察されている (三沢ら, 2005)。

【保護対策】河川や湖沼の環境を保全することが望ましい。

【引用文献】Delany & Scott (2006) / 蓮尾ら (1980) / 小野ら (1990) / 箕輪ら (2005) / 三沢ら (2005)

【写真】2005年2月3日。市川市南大野2丁目 / 中込 哲

(桑原和之)



アカハジロ

A サシバ タカ科*Batastur indicus* (Gmelin, 1789)

国：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

千：B-A-A

【種の特性】タカの仲間。平地から山地では、比較的目にする機会の多い種であった。ヘビ・カエル・トカゲ等両生・爬虫類を主に捕食する (石沢・千羽, 1967)。特に飛来直後は、産卵のために水田に集まるカエル類にかなり依存している。繁殖地には、3月末から4月初めに渡来する。針葉樹に営巣する。5月初旬までに2-4卵を生む。抱卵期間は約1ヶ月である。育雛期には、ネズミ類等の小型哺乳類や小鳥類の巣立ち雛も捕る。雛は孵化後40-45日である7月中旬までに巣立つ。

【分布】中国北東部・ロシアのウスリー地方等、ユーラシア大陸極東部で繁殖する。冬期は南に渡る。南西諸島から東南アジアで越冬する。国内では夏鳥である。岩手県・秋田県より南の本州・四国・九州及び伊豆諸島・対馬等で繁殖する。南西諸島では少数が越冬する。

【県内の状況】夏鳥。千葉県内では、都市部を除く全域に渡来する。主に谷津田周辺の雑木林で繁殖する。南部における生息状況は、調べられていない。秋の渡りの時期には、市街地の上空も通過する (桑原・落合ら, 1994)。人家近くの里山にも生息する。ニュータウン・工業団地・ゴルフ場・道路等の開発に伴い本種の生息地が減少している。

【保護対策】繁殖が成功する条件として、水田と雑木林がある程度のまとまりを持って存在することである (東ら, 1998)。雑木林の間に細い水田が入り込む谷津田の環境は、本種の生息環境として優れていると考えられる。したがって、谷津田を中心とした農村の環境保全が望ましい (高木, 1999)。また、密猟などによる繁殖の妨害の恐れがあるため、繁殖に関する情報の管理・取扱いには、細心の注意が求められる。

【引用文献】東ら (1998) / 石沢・千羽 (1967) / 桑原・落合ら (1994) / 高木 (1999)

【写真】2010年3月26日。木更津市真里谷 / 加藤恵美子

(高木 武・桑原和之)



A チュウヒ タカ科

Circus spilonotus Kaup,1847

国：絶滅危惧ⅠB類（EN）

千：B-A-A

【種の特性】 中型のタカの仲間。個体により羽色の変異が大きい。ヨシ原等の広い湿性草地に生息する。主にネズミ類・鳥類・カエル類等を捕食する。魚類や昆虫類・ヘビ類等も食べる。地上近くの低空を飛翔する。本州では、乾燥して草地化した干拓地での繁殖例が多い。5-6月に3-7卵を産む。抱卵期間は約33-47日で、雛は孵化後35-40日で飛べるようになる。越冬期には、ヨシ原に集団塒を形成する。

【分布】 ユーラシア大陸極東部のモンゴル・シベリア南部から日本にかけ繁殖する。冬期は南に渡る。西南日本・台湾・フィリピン・インドシナ半島等で越冬する。北海道・本州北部で少数が繁殖する。本州中部以南でも、利根川水系の湿地などで局地的に繁殖が知られている。関東地方では繁殖期の記録があり、各地で局所的に繁殖している可能性がある。越冬期には、ほぼ全国の湿地でみられる。

【県内の状況】 冬鳥。個体数は少ない。河川、池沼の周囲や河口部等のヨシ原で観察される。周年を通じ観察記録がある。個体数は冬期に増加する。利根川水系の湿地では、夏に見られることがある。利根川水系の湿地では、越冬期に、ヨシ原に20羽以上の集団塒を形成する（箕輪・桑原・浅川ら,2007）。定期的な越冬地は限られている（箕輪・桑原・三沢ら,2007）。東京湾岸では、埋立地や行徳鳥獣保護区が主な越冬地であった（桐原・桑原,2000; 箕輪ら,1999）。

【保護対策】 ヨシ原等の広い湿性草地の保全が望ましい。東京湾岸では恒久的な越冬地の確保が必要である。

【引用文献】 桐原・桑原（2000）／箕輪・桑原・浅川ら（2007）／箕輪・桑原・三沢ら（2007）／箕輪ら（1999）

【写真】 2009年1月3日。本埜村山田（現：印西市）／米持千里
（桑原和之・高木 武）



A ウズラ キジ科

Coturnix japonica Temminck & Schlegel,1849

国：準絶滅危惧（NT）

千：A-A-A

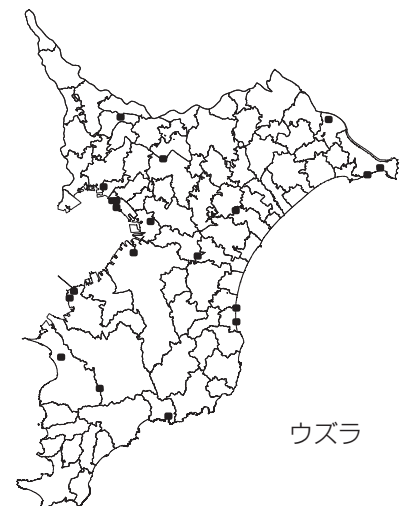
【種の特性】 地上で生活し、植物の種子や昆虫等を採食する。オスは、「グワッ、クルル」と大きな声で鳴く。繁殖期は5-9月で、地上に掘った窪みに営巣する。巢の産座には草本類の茎や葉等を用いる。7-12卵を産む。抱卵日数は16-21日である。雛は孵化後しばらくすると親とともに巣を離れる。秋期の渡来期には、刈り残しの稲田に多い。稲刈り後、水田の畦や放棄水田・河原等に移る。冬期は、平地や海岸の草原・稲田等で越冬する。全国的に個体数が減少している（環境庁自然保護局,1996; 1997; 林野庁,1964; 1965; 1966）。生息数自体が減少していると考えられるが、その要因はよく分かっていない。本種の生息環境は、広い草原であるため、草地の消失が個体数の減少に影響していると考えられる。地上性の種であることから、野犬やノネコによる被害も大きいと考えられる。個体数が1970年代から減少し、生息個体数が少なくなり絶滅が危惧されるためIUCNレッドリスト2001年版のカテゴリーでLeast Concernに指定されている。本種は狩猟対象となっていたが、2007年に環境省は、個体減少が著しいため、5年間の捕獲の制限を設けた。

【県内の状況】 冬鳥もしくは旅鳥。千葉県内では、少ない。観察記録も少ない（千葉県,1976）。1960年以前は、個体数も多かったが、1980年以降、繁殖の記録はない。繁殖個体群は絶滅したと推測される。近年、越冬個体数も激減しており、野外での目撃情報は少ない。利根川水系の水田や草地で記録されている（箕輪・桑原ら,2005）。市街地などからも報告があるが、逃げ出した飼育鳥、いわゆる籠脱け個体の観察記録と思われる例が多い（桑原ら,1994）。

【保護対策】 千葉県における生息状況が明らかでない。詳しい生息状況調査が必要である。河川敷等の草地の維持・保全が望ましい。半自然の草地を保全することが望ましい。

【引用文献】 千葉県（1976）／環境庁自然保護局（1996）／環境庁自然保護局（1997）／桑原ら（1994）／箕輪・桑原ら（2005）／林野庁（1964）／林野庁（1965）／林野庁（1966）

【写真】 2008年4月16日。香取市／白川浩一
（桑原和之・箕輪義隆）



ウズラ

A ヒクイナ クイナ科

Porzana fusca (Linnaeus, 1766)

国：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

千：A-A-A

【種の特性】水田・湖沼畔などの湿地に生息する。水生植物の茂みの中で生活し、開けた場所に姿を現すことは少ない。昆虫類や植物の種子を採食する。

【分布】東南アジアに分布する。日本、朝鮮半島・中国で繁殖する。北方で繁殖する個体は南方に渡る。インドシナ半島・マレー半島・ボルネオ・ジャワ等では周年見られる。国内では北海道から九州に渡来する夏鳥。近年、全国的に個体数の減少が著しい。西南日本では、少数が越冬する。

【県内の状況】夏鳥。千葉県内では、数少ない。目視されることは極稀である。かつては、水田地帯で普通種で、繁殖期に鳴き声が聞かれた。1970年代から激減した。近年の観察例は、非常に少ない。特に東京湾岸では、ほとんど観察されなくなっている（桐原・桑原, 1998; 2000; 箕輪ら, 1999; 2000）。

【保護対策】水生植物が繁茂する湿地の保全が望ましい。また、休耕田や耕作放棄水田の湿地としての活用も、生息地確保の方法として有効である。保護に際しては、農家の理解と協力が不可欠である。千葉県における生息状況が明らかでない。詳しい生息状況調査が必要である。

【引用文献】桐原・桑原(1998)／桐原・桑原(2000)／箕輪ら(1999)／箕輪ら(2000)

【写真】1990年6月3日。印西市酒直／米持千里

(桑原和之)



ヒクイナ

A シマクイナ クイナ科

Coturnicops exquisitus (Gmelin, 1789)

国：絶滅危惧ⅠB類 (EN)

千：A-A-A

【種の特性】小型のクイナ。小さく体型はすんぐりしている。頸・嘴とも短い。上面は焦茶色、赤茶色の縦斑と細く白い横斑がある。顔は灰色で、暗色の下眼線がある。腹は白く、下頸から胸・脇・下尾筒にかけて細かい茶色の横斑がある。繁殖環境は草丈の低い湿原である。足下から飛び立ち、極く短距離しか飛ばない。飛翔は非常に弱々しく、蝶の羽ばたきの様であるという。日本産のシマクイナの情報は少ない。食性およびつがい間の行動等に関する情報は少ない。生息数は多くないと予想されている。

【分布】ロシアのアムール川上流の一部と、ハンカ湖を中心とする沿海州・中国東北部の東アジアで繁殖する（Taylorら, 1998）。冬は南に渡る。朝鮮半島中南部、日本、中国の福建省・広東省付近で越冬する。国内では湿地で極く稀に記録されるにすぎない。国内における生息状況の詳細は知られていない。1982年以降2000年までに5例が知られるが、国内での確実な越冬記録は報告されていない。本州では、稀に見られる旅鳥である。繁殖期に記録されたことがある（宮ら, 2005）。

【県内の状況】千葉県内では、東京湾よりの沼沢地に多数生息していたらしい（千葉県, 1976）。山階鳥類研究所では、2点の標本（YIO-13133, 13134）を所蔵している。犬吠岬で標本が得られている（桑原・三沢ら, 2006）。1970年以降は、一宮で1973年12月15日に1羽が記録されている（千葉県, 1976）。印旛沼や利根川小櫃川河口などでしか、観察されていない（箕輪・桑原ら, 2005）。木更津市小櫃川河口で1990年12月24日に1羽が標識放鳥されている（金田彦太郎私信）。2001年11月19日に市川市福栄2丁目の民家で左翼上腕関節付近が骨折した個体が保護された（写真）。この個体は2003年4月26日まで、千葉県行徳野鳥観察舎で保護されていたが、死亡した（山口 誠私信）。

【保護対策】生息地全域での湿原の破壊や改変により、絶滅に瀕している。湿地の保全が必要である。

【引用文献】千葉県(1976)／桑原・三沢ら(2006)／箕輪・桑原ら(2005)／宮ら(2005)／Taylorら(1998)

【写真】保護日は2001年11月19日。市川市福栄2-11近くで保護した個体／佐藤達夫

(桑原和之・百瀬邦和・鶴見 みや古)



シマクイナ

A タマシギ タマシギ科

Rostratula benghalensis (Linnaeus, 1758)国：掲載なし
千：A-A-A

【種の特性】メスの羽色が鮮やかで、オスは地味な羽色をしている。一妻多夫で雄だけで抱卵・育雛を全て行う。水田・湿地に生息する。水生昆虫や小さな貝類等、泥の中の小動物を採食する。

【分布】中国南部から東南アジア、サハラ砂漠以南のアフリカ大陸・マダガスカル・オーストラリア南東部等に広く分布する。宮城県以南から南西諸島で、局所的に繁殖する。

【県内の状況】千葉県内では、各地の水田地帯で繁殖記録がある（時田ら、2005）。千葉市内でも繁殖していた（桐原・桑原、1998）。2009年、木更津市で雄1羽とヒナ3羽が確認されている（箕輪私信）。東京湾奥部からの繁殖記録はなくなった（箕輪ら、1999；2000）。

湿地の開発や耕地整理による水田の乾田化等により、繁殖に適した湿地は減少している。近年、個体数の減少が著しく、繁殖期の記録は少ない（桑原・鈴木、2002）。

【保護対策】水田や休耕田、水生植物の繁茂する湿地などの保全が必要である。繁殖地の保護、保全に際しては、農家の理解と協力が不可欠である。

【引用文献】桐原・桑原（1998）／桑原・鈴木（2002）／箕輪ら（1999）／箕輪ら（2000）／時田ら（2005）

【写真】2005年8月19日。長生村／高島斎二

（桑原和之）



タマシギ

A ミヤコドリ ミヤコドリ科

Haematopus ostralegus Linnaeus, 1758国：掲載なし
千：A-A-A

【種の特性】全長は、43—45cm、翼開長は、85—86cm、オレンジ色で目立つ嘴は約9cm。幼羽の嘴はやや淡いオレンジ色で、嘴の先端から鼻孔の先まで黒色を示す。冬期は、成鳥でも嘴の先は黒くなる。光彩は成鳥では赤く、幼鳥は褐色である（桑原・中川、1995）。脚は、成鳥は鮮やかな朱色、幼鳥はにぶく灰色がかったピンク色を呈する。干潟や砂浜、岩礁などの開けた海岸に飛来する。海岸では、二枚貝、ゴカイ類などの底生動物を捕食する（桑原、2007a）。

【分布】ヨーロッパから極東にかけて広く分布する（Cramp & Simmons, 1983）。冬期は、南に渡る。日本周辺でも樺太、千島から台湾にかけて分布し、明治期（19世紀末）には東京付近にも個体数は多かった（内田、1913）。対馬などでも個体数は多く、標本が採集されていた（Ijima, 1891）。20世紀はじめまでは、標本が採集されている（Takatsukasa, 1967）。おそらく、当時から1960年代にかけの個体数の減少は狩猟圧によると考えられる。1945年以降は少ない（Austin & Kuroda, 1953）。定期的な越冬地は博多湾、有明海、東京湾など数力所に過ぎない。

【県内の状況】富津岬、夷隅川河口、利根川河口、三番瀬などで越冬記録がある。九十九里海岸や銚子市など外房地域の海岸で、毎年観察される。渡りの期間に飛来する個体数は少なく、せいぜい数羽である。三番瀬では周年記録される（三沢ら、2003）。2010年10月11日には、234羽が確認された。

【保護対策】本亜種の分布は局地的であるため、繁殖地での湿原の破壊や改変、越冬地の開発などで絶滅に瀕している。干潟や砂浜などの海岸部の湿地の保全が必要である。また、砂浜海岸で交通事故により死亡した例があるため、乗り入れ規制の強化なども必要である。

【引用文献】Austin & Kuroda（1953）／Cramp & Simmons（1983）／Ijima（1891）／桑原（2007a）／桑原・中川（1995）／三沢ら（2003）／Takatsukasa（1967）／内田（1913）

【写真】1999年1月16日。千葉市美浜区豊砂／岡 典弘

（桑原和之）



ミヤコドリ

A シロチドリ チドリ科

Charadrius alexandrinus Linnaeus, 1758国：掲載なし
千：B-A-A

【種の特性】繁殖期は3-8月。一夫一妻で繁殖する。砂地や砂利地を浅く掘り、掘られた窪みに2-3卵を生む。千葉市美浜区での初卵日は5月中旬である（桑原ら、1997）。コアジサシのコロニー内で営巣すること多い。雌雄交替で抱卵し、24-27日で孵化する。孵化後、短時間で雛は歩けるようになり、離巣する。雛は自力で採食するが、両親の世話で育つ。

【分布】ユーラシア大陸と北アメリカ大陸西部の低・中緯度地方で繁殖する。繁殖地は点在する。冬期は南に渡る。アフリカ大陸・インド・東南アジア・メキシコ等に渡り、越冬する。本州以南では、主に夏鳥として繁殖する。繁殖個体数は多くない。本州中部以南で越冬する。南西諸島でも繁殖し、周年見られるが、個体数は多くない。

【県内の状況】千葉県内では、海岸から内陸で繁殖していた（茂田ら、1978）。東京湾岸の干潟では市川市から富津市まで、砂浜海岸では銚子市から外房に分布する。かつて、千葉市美浜区・中央区の埋立地では、コアジサシの営巣地が継続しており、同所的に繁殖していた（唐沢、1976）。美浜区若葉の約13haの仮設駐車場では、毎年コアジサシのコロニー内で繁殖していた（桑原・箕輪ら、1997）。夷隅川河口などでも繁殖記録がある（布留川・桑原、1991）。千葉県内の主な繁殖地は、東京湾内であったが、繁殖数は激減した。九十九里海岸で少数が繁殖する。本種の繁殖個体数に関する詳しい報告はない。各地で記録されるが、1,000羽を超す群れは見られなくなった（藤岡ら、1997a; 1997b; 1998a; b; 1999）。

【保護対策】生息可能な環境を保全する必要がある。生息可能な環境を保全し、生息地の回復を試みることも必要である。可及的に速やかに永続的な営巣地の確保が必要である。東京湾岸では、今後、造成地に代わる永続的な営巣地の確保が急務であるため繁殖地の回復を試みる事が望ましい。砂浜海岸・干潟・河川敷の広範な環境保全も必要である（桑原・中川、1998）。また、採食場所として砂浜海岸・干潟の保全が必要である。

【引用文献】藤岡ら（1997a）／藤岡ら（1997b）／藤岡ら（1998a）／藤岡ら（1998b）／藤岡ら（1999）／布留川・桑原（1991）／唐沢（1976）／桑原・箕輪ら（1997）／桑原・中川（1998）／茂田ら（1978）

【写真】1990年1月3日。習志野市谷津干潟／石川 勉
（桑原和之・早川雅晴）



A ケリ チドリ科

Vanellus cinereus (Blyth, 1842)国：掲載なし
千：A-A-A

【種の特性】大型のチドリの仲間。水田地帯や河川敷・埋立地で地上営巣する。繁殖期、警戒心が非常に強く、巣に近づく外敵に対して、つがい共同で激しく執拗に威嚇する。

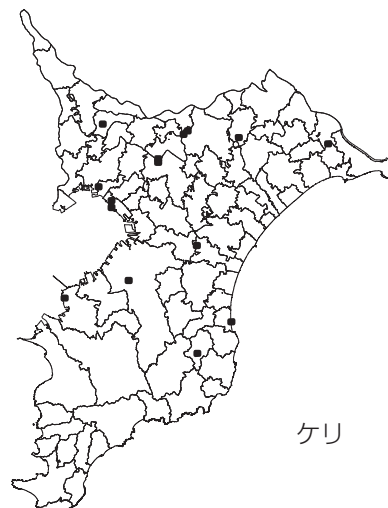
【分布】極東地域に固有の種である。日本・中国東北部・長江下流域に分布する。国内では、留鳥。本州で繁殖するが、営巣地は局地的である。積雪地で繁殖する個体は、冬期は南に渡り越冬する。

【県内の状況】千葉県内では、かつては稀に記録される種であった。近年は、定期的に少数が、渡りの季節や越冬期に観察される（箕輪ら、2005）。渡来数が最も多い野田市から流山市の水田地帯では、冬鳥である（藤岡ら、1998a; 1998b; 浅川・桑原、1999）。1998年に県内で初めての繁殖が野田市の今上耕地で確認された（新保ら、1999）。

【保護対策】繁殖地で繁殖個体の保護が必要である。休耕田や耕作放棄水田など湿地の営巣環境の保全が望ましい。ケリの繁殖地保護には、農家の理解と協力が不可欠である。

【引用文献】浅川・桑原（1999）／藤岡ら（1998a）／藤岡ら（1998b）／箕輪ら（2005）／新保ら（1999）

【写真】2010年1月2日。本埜村下井（現：印西市）／小林大光
（桑原和之）



A ヘラシギ シギ科

Eurynorhynchus pygmeus (Linnaeus, 1766)

国：絶滅危惧ⅠA類 (CR)

千：A-A-A

【種の特性】 小型のシギ類。嘴の先がへら状に丸い。主に砂浜・干潟・埋立地などの湿地で、小型の単脚類等の小動物を採食する。食物や採食場所に関しては、ほとんど報告されていない。海岸に近いツンドラ地帯の地上で繁殖する。抱卵や育雛の大部分をオスが行う。個体数が少なく、絶滅が危惧されるためIUCNレッドリスト2001年版のカテゴリーでEndangered (EN)に指定されている。

【分布】 繁殖分布は、極東地域の極めて狭い範囲に限定されている。繁殖地が知られている地域、ロシア北東部でもオホーツク海に面した地域からカムチャッカ半島にかけてだけである(桑原, 2000a)。日本には、数少ない旅鳥として飛来する。1970年代までは、個体数は少ないが、全国的に干潟や湿地で普通に記録されていた。1980年代から個体数が激減し、観察記録も稀になった。トウネンやミユビシギの群れの中で記録されることも多い(山本ら, 2000)。

【県内の状況】 旅鳥。千葉県内では、極めて稀である。個体数も少ない。東京湾内の干潟に渡来し、記録が三番瀬(桑原ら, 1994)・小櫃川河口(箕輪ら, 1999)・新浜(新浜倶楽部, 1988)・谷津干潟(桑原・石川ら, 1999)等で報告されている。外房では、一宮川河口の干潟等で観察されている。旭市飯岡萩園で2010年9月8日幼羽が1羽、トウネンの群れの中で観察されている(齋藤敏一私信)。

【保護対策】 東京湾内および九十九里、外房に残された湿地の保全が望ましい。

【引用文献】 桑原(2000a)／桑原・石川ら(1999)／桑原・田中ら(1994)／箕輪ら(1999)／新浜倶楽部(1988)／山本ら(2000)

【写真】 2004年9月22日。長生村 一宮川河口／高島斎二

(桑原和之)



ヘラシギ

A シベリアオオハシシギ シギ科

Limnodromus semipalmatus (Blyth, 1848)

国：情報不足 (DD)

千：A-A-A

【種の特性】 全長33-36cm。長く太い黒色の嘴が特徴である。干潟や湿地で、貝類やゴカイ類を採る。昆虫の幼虫や軟体動物等の小動物を食べることも観察されている。営巣地は湖岸等の水辺である。湿地の地上に6-20つがいの小コロニーを作り、繁殖する。産卵期は、5月下旬から6月である。一腹卵数はふつう2卵、稀に3卵である。個体数が少なく、絶滅が危惧される。

【分布】 旅鳥。少ない。日本では、1972年に青森県で初めて記録された(高野, 1981)。春と秋の渡りの時期に北海道・本州・九州等で、ほぼ毎年、少数が記録される(藤岡ら, 1997a; 1997b; 1998a; b; 1999)。稀に単独で見られるにすぎない。休耕田・河川敷・畑・干潟・海岸などの湿地でごく稀に見られる。

【県内の状況】 旅鳥。千葉県内では少ない。干潟で記録されたこともあり、谷津干潟では数例が知られる(桑原・石川ら, 1999)。

【保護対策】 渡りの中継地となる湿地の保護が望まれる。

【引用文献】 藤岡ら(1997a)／藤岡ら(1997b)／藤岡ら(1998a)／藤岡ら(1998b)／藤岡ら(1999)／桑原・石川ら(1999)／高野(1981)

【写真】 1992年8月31日。習志野市 谷津干潟／石川 勉

(桑原和之)



シベリアオオハシシギ

A イソシギ シギ科

Actitis hypoleucos (Linnaeus, 1758)国：掲載なし
千：B-B-A

【種の特性】 中型のシギ類。主に河川中流域の砂礫の河原に生息する。水辺から少し離れたまばらに草の生えた地上に営巣する。河川では中州や河口域、湖岸で見られる（石黒・桑原・桐原，2000）。海岸や埋立地でも見られる（桑原，1990）。水際や浅瀬でユスリカ等の水生昆虫を採食する。

【分布】 北極圏や砂漠・高山を除くユーラシア大陸の広い範囲で繁殖する。冬期は南に渡る。アフリカ・オーストラリア・南アジア等に渡り、越冬する（Hayman et al., 1986）。国内では九州以北で繁殖する。北方で繁殖する個体は、本州中部以南に渡り越冬する。

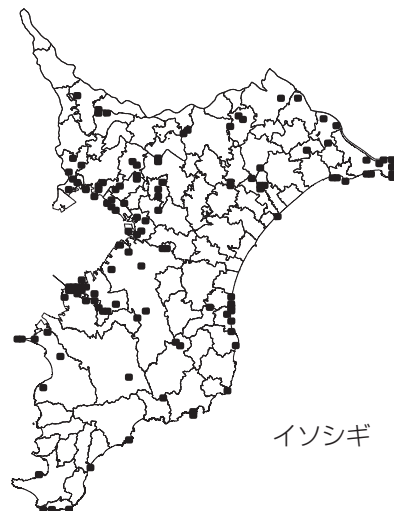
【県内の状況】 千葉県内では、周年見られる。渡りの時期の7-8月には個体数は増加する（新浜倶楽部，1988）。越冬期の個体数は少ない（藤岡ら，1998a；1998b）。1994年に習志野市谷津干潟で繁殖が記録された（富岡辰先私信）。埋立地の水辺でも繁殖期を通じ記録がある。各地で幼鳥が観察されているが、確実な繁殖記録の報告はない。千葉県内には、広い石河原を伴うような大きな河川が少ないため、繁殖地は限られている。河川改修による護岸整備により、採食場所や繁殖地が減少している。人や車の河川敷や海岸への立ち入りにより、圧迫を受けている。

【保護対策】 生息地の環境を良好に維持することが望ましい。生息環境である河川では砂州や砂礫地を保全し、生息地の回復を試みることも必要である。

【引用文献】 藤岡ら（1998a）／藤岡ら（1998b）／石黒・桑原・桐原（2000）／桑原（1990）／Hayman et al.（1986）／新浜倶楽部（1988）

【写真】 2008年5月12日。習志野市茜浜／菅 景成

（桑原和之）



イソシギ

A カラフトアオアシシギ シギ科

Tringa guttifer (Nordmann, 1835)国：絶滅危惧ⅠA類（CR）
千：A-A-A

【種の特性】 全長：29-32cm。中型のシギ類。「ケツ」「クエ」などと聞こえる声で鳴く。上に反った太い嘴が特徴である。干潟で小魚や底生生物を捕食する。夏羽では背・腰が濃い灰色で、喉から胸に黒色の斑があり、アオアシシギと異なる。冬羽の上面は、灰色である。個体数が少なく、絶滅が危惧されるためIUCNレッドリスト2001年版のカテゴリーでEndangered (EN)に指定されている。

【分布】 繁殖地は局所的で、サハリン南部でだけ繁殖する（Hayman et al., 1986）。世界で数百番しか繁殖していない。国内には旅鳥として飛来する。個体数は少なく、極めて稀である（藤岡ら，1997a；1997b；1998a；1998b；1999）。北海道、本州、九州、南西諸島などの地域から記録がある。干潟、海岸、湿地で見られる。主に秋の渡りの時期に記録は多い。

【県内の状況】 東京湾では、三番瀬（桑原・田久保，1997；三沢ら，2003）・小櫃川河口、新浜（新浜倶楽部，1988）、谷津干潟（桑原・石川ら，1999）などで記録がある。1990年、1993年に銚子市で観察されている（桑原・三沢ら，2006）。外房では一宮川河口の干潟などで観察されている。

【保護対策】 本種は干潟や海岸などの湿地で生活している。湿地の減少が、シギ・チドリ類の個体数の減少に影響を与えた。住宅地や工業用地のような環境では、本種を含むシギ・チドリ類の稀少種は、生活できない。現状の干潟を維持することが望ましい。

【引用文献】 藤岡ら（1997a）／藤岡ら（1997b）／藤岡ら（1998a）／藤岡ら（1998b）／藤岡ら（1999）／Hayman et al.（1986）／桑原・石川ら（1999）／桑原・三沢ら（2006）／桑原・田久保（1997）／三沢ら（2003）／新浜倶楽部（1988）

【写真】 2008年6月14日。船橋市潮見町地先 三番瀬／米持千里

（桑原和之）



カラフトアオアシシギ

A ダイシャクシギ シギ科

Numenius tenuirostris (Linnaeus, 1758)国：掲載なし
千：A-A-A

【種の特性】大型のシギの仲間。下に反った長い嘴が特徴である。長大な嘴で、泥の中からカニ類、ゴカイ類、カエル類、昆虫類などの小動物を捕らえる。ホウロクシギとは大きさ、形態、羽色も似ている。夏羽では背は灰色がかった茶色・腰は白色、下面は淡色を呈する。喉から胸に大きな黒色の斑があり、冬羽に顕著である。

【分布】シベリアのタイガ地帯で繁殖する (Hayman et al., 1986)。冬期は南に渡る。主に干潟で越冬する。国内では主に旅鳥。北海道、本州、九州、南西諸島などの干潟、海岸、水田などの湿地で、渡りの時期にみられる (藤岡ら, 1997a; 1997b; 1998a; 1998b; 1999)。越冬地は局所的である。本州以南の広い干潟で越冬する。

【県内の状況】旅鳥。東京湾では少数が越冬する。個体数は少ない。本種は、干潟や海岸などの湿地で生活している。広大な干潟は開発により減少した。湿地の減少が、個体数の減少に影響を与えたと考えられている (新浜倶楽部, 1988)。現在、千葉県内での観察記録や確認される個体数は少ない。谷津干潟、三番瀬およびその周辺では、渡りの時期や越冬期に定期的にみられる。ほかの地域では単独で稀にみられるにすぎなくなった (桑原・三沢ら, 2006)。

【保護対策】越冬地としての干潟の保護が極めて重要である。広大な干潟に依存する本種の保護のためには、現在ある干潟を維持することが望ましい。

【引用文献】藤岡ら (1997a) / 藤岡ら (1997b) / 藤岡ら (1998a) / 藤岡ら (1998b) / 藤岡ら (1999) / Hayman et al. (1986) / 桑原・三沢ら (2006) / 新浜倶楽部 (1988)

【写真】1989年12月11日。習志野市 谷津干潟 / 石川 勉
(桑原和之)



ダイシャクシギ

A ホウロクシギ シギ科

Numenius madagascariensis (Linnaeus, 1766)国：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
千：A-A-A

【種の特性】大型のシギ。嘴は長く下に湾曲している。ダイシャクシギとは大きさ、形態、羽色も似ている。干潟、河口域、水田、草地などの湿地で、カニ類・ゴカイ類・カエル類・昆虫類等の小動物を捕食する。繁殖期は5-8月で、5月中旬から6月下旬に2-3つがい集合して繁殖する。湿地や草地の地上に営巣する。4卵を産む。個体数は38,000羽と推定されている。国際的に保護する必要がある稀少種である。生態に関しては、あまり知られていない。

【分布】極東地域の固有種である (桑原, 2000)。中国北東部・カムチャッカ半島・シベリア北東部等の一部で繁殖する。冬期は南に渡る。インドネシア、台湾、フィリピン、ニューギニア、オーストラリア、ニュージーランド等へ越冬する (Hayman et al., 1986)。国内には数少ない旅鳥または稀な冬鳥として渡来する。北海道・本州・九州・南西諸島等、各地域から記録がある。個体数は多くない (藤岡ら, 1997a; 1997b; 1998a; 1998b; 1999)。

【県内の状況】旅鳥。極稀に越冬することがある。かつては、普通に見られる旅鳥であった (新浜倶楽部, 1988)。現在、千葉県内では、確認される個体数は少ない。春秋の渡りの時期に、干潟や河口、海岸に近い水田等の湿地でみられる (銚子野鳥同好会, 1990)。現在、東京湾で定期的に本種が記録される干潟は、谷津干潟や三番瀬だけである (桑原・三沢ら, 2006)。

【保護対策】渡りの中継地としての干潟の保護が極めて重要である。広大な干潟に依存する本種の保護のためには、現在ある干潟を維持することが望ましい。

【引用文献】銚子野鳥同好会 (1990) / 藤岡ら (1997a) / 藤岡ら (1997b) / 藤岡ら (1998a) / 藤岡ら (1998b) / 藤岡ら (1999) / Hayman et al. (1986) / 桑原 (2000) / 桑原・三沢ら (2006) / 新浜倶楽部 (1988)

【写真】1989年12月11日。習志野市 谷津干潟 / 石川 勉
(桑原和之)



ホウロクシギ

A ハリモモチュウシャク シギ科

Numenius tahitiensis (Gmelin, 1789)国：掲載なし
千：A-A-A

【種の特性】 全長は40－44cm。嘴は長く下に湾曲している。越冬地では、海岸や干潟・サンゴ礁・草地等で餌を探し、甲殻類や昆虫類を採食する。海鳥のコロニーから卵を盗り、岩に打ち付けたり、石を打ち付け卵殻を壊し、中身を食べる、等の報告が知られる。5月下旬から6月にかけて、湿地の地上に営巣し、4卵を産む。抱卵は雌雄で分担するが、雌は繁殖地から先に離れる。繁殖を終えると、8月中旬に、一旦アラスカの海岸の中継地に集まり、その後、南に渡る。その際、中継せず、海上を少なくとも4,000kmは渡る。個体数が少なく、推定最小個体数は10,000羽とされている（Delany & Scott, 2006）。

【分布】 西アラスカでのみ繁殖する。冬期は、南に渡る。太平洋からオセアニアの島嶼で越冬する（Hayman et al., 1986）。国内では、秋の渡りの時期に記録される。北海道、本州等からの記録があるが、極めて稀である（藤岡ら, 1997a; 1997b; 1998a; 1998b; 1999）。

【県内の状況】 旅鳥。千葉県内ではきわめて稀（千葉県, 1976）。開発や宅地の整備に伴い、観察例はなくなった。かつては、東京湾岸の草地に渡来していた（新浜倶楽部, 1988）。県内における記録は3例だけである。

【保護対策】 採食場所である広い草地の保全が望ましい。

【引用文献】 千葉県（1976）／Delany & Scott（2006）／藤岡ら（1997a）／藤岡ら（1997b）／藤岡ら（1998a）／藤岡ら（1998b）／藤岡ら（1999）／Hayman et al.（1986）／新浜倶楽部（1988）

【写真】 1969年10月5日。浦安市／柳澤紀夫

（桑原和之）



ハリモモチュウシャク

A チュウジシギ シギ科

Gallinago megala Swinhoe, 1861国：掲載なし
千：無-A-A

【種の特性】 全長27cm。小型のシギ類。オオジシギよりやや小さいタシギの仲間。長い嘴が特徴である。ミミズ、昆虫類等の小動物を捕食する。水田や湿地で採食する。

【分布】 シベリアからモンゴル、ロシア南東部でだけ繁殖する。冬期は南に渡る。主に中国南東部から東南アジア、南アジアで越冬する。国内では少ない旅鳥。現在では稀に渡りの季節や越冬期に渡来するだけである。

【県内の状況】 千葉県内では記録が少ない（千葉県, 1976）。東京湾岸や九十九里平野などで減少が著しい。現在、千葉県では利根川水系の湿地で記録されている。印旛沼では水田や畦などで見られている（箕輪・桑原ら, 2005）。2005年8月18日に1羽が銚子市海鹿島町の芝地で記録されている（桑原・三沢ら, 2006）。記録は8-9月上旬に多い。秋の渡りの時期に観察が集中している。春の渡りの時期、記録は少ない。

【保護対策】 採食場所である干潟に隣接した湿地、水田などの環境の保全が必要である。タシギなどと間違ふことのないよう狩猟者への助言が望ましい。

【引用文献】 千葉県（1976）／桑原・三沢ら（2006）／箕輪・桑原ら（2005）／齋藤（1998）

【写真】 2009年8月27日。成田市船形／箕輪義隆

（桑原和之）



チュウジシギ

A オオジシギ シギ科

Gallinago hardwickii (Gray, 1831)

国：準絶滅危惧 (NT)

千：A-A-A

【種の特性】 全長30cm。小型のシギ類。チュウジシギよりやや大きいタシギの仲間。長い嘴が特徴である。ミミズ、昆虫類等の小動物を捕食する。植物の種子なども食べる。山地や平地の草原で繁殖する（飯田，1991）。繁殖期、杭や樹上で囀る（新田・藤巻，1985）。草地や湿原の消失が、繁殖個体に影響を与えている。渡り時期、水田や蓮田、川岸などの湿地で見られる。

【分布】 日本、サハリン南部で繁殖する。冬期は南に渡る。オーストラリアと東南部やタスマニア島に渡る。国内では夏鳥。ただし、個体数は少ない。北海道、本州、九州、四国、南西諸島など各地域から記録がある。北海道・東北地方の平地および本州中部の高原や草原が主な繁殖地である（藤巻，1994; Tsushima, 1987）。渡りの季節には全国で観察される（大畑，1989）。渡りの時期、休耕田、河川敷、畑などの湿地で採食する。

【県内の状況】 旅鳥。千葉県内では少ない。水田、休耕田、河川敷、畑、干潟などの湿地で稀に見られる。おそらく、個体数は1950年代から徐々に減少していると考えられる（新浜倶楽部，1988）。個体数は少なくなり、現在は単独でみられるにすぎない（桑原・鶴見，2000）。

【保護対策】 水田、休耕田、河川敷、畑、干潟などの湿地の保全が望ましい。タシギなどと間違ふことのないよう狩猟者への助言が望ましい。

【引用文献】 藤巻（1994）／飯田（1991）／桑原・鶴見（2000）／新田・藤巻（1985）／大畑（1989）／Tsushima（1987）／新浜倶楽部（1988）

【写真】 1971年8月28日。長生村 一宮川河口／柳澤紀夫

（桑原和之）



オオジシギ

A セイタカシギ セイタカシギ科

Himantopus himantopus (Linnaeus, 1758)

国：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

千：B-A-A

【種の特性】 長い脚は赤色で目立つ。成鳥に比べ幼羽では、脚の色は淡い。嘴は、黒色で細長い。背はやや光沢を帯びた黒色、腹部は白色で、美しい色彩の種である。河川や湖沼、水田、干潟等の湿地で昆虫類、甲殻類、小魚等の小動物を採食する。繁殖地は水辺の砂泥地で地上に営巣する。

【分布】 ヨーロッパ南部・アフリカ南部・インド・東南アジア・オーストラリア・南アメリカ等に不連続に分布する。北部で繁殖する個体は、冬期、南に渡る。国内では稀な旅鳥である。観察記録は全国にある。一部の地域で局地的に繁殖する。1975年に愛知県の鍋田干拓地で国内初の繁殖が確認された。1978年以降、東京湾奥部の埋立地で局地的に繁殖が記録されるようになった。現在、東京湾岸では周年生息している（石川，1993; 桐原・桑原，1998; 桑原ら，1994, 1999）。

【県内の状況】 千葉県内では、東京湾岸では留鳥である。その他の地域では、稀に水田等に渡来する旅鳥である。千葉県内での繁殖は1978年、習志野市京葉港埋立地（現在の茜浜）で記録された。この繁殖例は国内2例目の記録である。その後、千葉市幕張埋立地（桐原・桑原，1998）や宮内庁新浜鴨場・市川市行徳鳥獣保護区でも繁殖が確認された（蓮尾，1988; 蓮尾，1990）。習志野市谷津干潟やその他の地域でも繁殖が記録されるようになった。ただし、東京湾岸では繁殖地が減少している。

【保護対策】 繁殖個体群を保護する必要がある。繁殖地の維持および保全が望ましい。現在の繁殖地の確保と環境の維持が望ましい。生息可能な環境を保全し、生息地の回復を試みることも必要である。また、以前は見られなかった捕食者であるミシシippieアカミミガメなどの外来種の駆除が必要な繁殖地もある。カラス類、ノネコ、野犬などの捕食者から守る必要もある。採食場所となる干潟や浅瀬などの湿地を保全することも望まれる。美しい種であるため、写真撮影の対象となる可能性が高く、人為的な攪乱が予想される。観察者が集中し悪影響を与える可能性があるため、繁殖地への立ち入りなどの制限を設けることが望ましい。

【引用文献】 蓮尾（1988）／蓮尾（1990）／石川（1993）／桐原・桑原（1998）／桑原・石川ら（1999）／桑原・田中ら（1994）

【写真】 2006年5月31日。習志野市秋津 谷津干潟自然観察センター／星野七奈

（桑原和之）



A ツバメチドリ ツバメチドリ科

Glareola maldivarum Forster, 1975

国：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

千：B-A-A

【種の特性】 ツバメに似た翼形をしている。昆虫を飛びながら捕食する。河川敷や埋立地・耕作地等の地上に営巣する。

【分布】 中国北東部からマレー半島・インド北部にかけての地域で繁殖する。冬期は南に渡る。インド南部・東南アジア・ニューギニア・オーストラリア等で越冬する。大部分の地域では稀な旅鳥として飛来する。南西諸島では、個体数は多くないが普通に農耕地で繁殖する。冬期には群れを作る。近年、本州南部以南で繁殖記録が局所的に得られている。

【県内の状況】 県内では、数少ない旅鳥。各地の干潟等で記録される（箕輪ら、1996）。1996年に、干潟町の水田の間の埋立地で繁殖が確認された（斎藤・桑原、1991）。また、市川市でも繁殖した（桑原・鈴木、2002）。東京湾岸の埋立地等でも繁殖期の観察記録があり、コアジサシやチドリ類の繁殖地で繁殖していた可能性がある（桐原・桑原、1998）。

【保護対策】 繁殖可能な営巣地を保全し、生息地の回復を試みることも必要である。河川敷や海岸への車両乗り入れ規制の徹底が望ましい。また、営巣が確認された場合、人為的な攪乱が予想される。観察者が集中し悪影響を与える可能性があるため、繁殖地への立ち入りなどの制限を設けることが望ましい。撮影や観察のため、過度に接近することは避けるべきである。

【引用文献】 桐原・桑原（1998）／桑原・鈴木（2002）／箕輪ら（1996）／斎藤・桑原（1991）

【写真】 2010年3月17日. 木更津市久津間／田村 満

（桑原和之）



ツバメチドリ

A ズグロカモメ カモメ科

Larus saundersi (Swinhoe, 1871)

国：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

千：A-A-A

【種の特性】 小型のカモメ類。ユリカモメに似るが、頭部はより丸く、翼は細長い。嘴は短く、黒色である。越冬期は、干潟に依存する種である。干潟の上を低く飛びながら小動物を探し、急降下してヤマトオサガニ・オサガニ等のスナガニ類や多毛類（ゴカイ類）・トビハゼ等を捕食する。海岸の塩性湿地で繁殖する。繁殖地の発見は1984年であり、繁殖生態についてはまだ不明な点が多い（高木、2000a）。個体数が少なく、絶滅が危惧される。

【分布】 東アジアに固有の種（del Hoyo et al., 1996）。個体数は多くない（Collar et al., 1994）。国内では数少ない冬鳥。主に九州の干潟に渡来する。他の地域では、少ないかきわめて稀である。

【県内の状況】 数少ない冬鳥（千葉県、1976）。三番瀬（桑原ら、1994；三番瀬再生計画検討会議事務局、2004）・谷津干潟・小櫃川河口（箕輪ら、1999）等の干潟で、越冬期の記録がある。三番瀬や谷津干潟では少数が定期的に越冬する（桑原・石川ら、1999）。

【保護対策】 越冬地として、カニ類やゴカイ類などの底生動物が多様に生息する干潟が必要である。干潟などの採食場所を広く保全し、生息地の環境を良好に維持することが望ましい。

【引用文献】 千葉県（1976）／Collar et al.（1994）／del Hoyo et al.（1996）／桑原ら（1994）／桑原・石川ら（1999）／箕輪ら（1999）／三番瀬再生計画検討会議事務局（2004）／高木（2000a）

【写真】 1987年3月6日. 習志野市 谷津干潟／石川 勉

（桑原和之・高木 武）



ズグロカモメ

A アカアシミツユビカモメ カモメ科

Rissa brevirostris (Bruch,1853)国：掲載なし
千：A-A-A

【種の特性】ミツユビカモメに似るが、脚は鮮やかな赤色である。ミツユビカモメに比べ、やや小さく、翼の上面の色が濃く、嘴は太く短い。魚やイカを捕食し、昼間だけでなく夜間にも採食する (Hoyo et al, 1996; Storer, 1987)。海岸の断崖の岩棚で集団繁殖する (Collar et al., 1994.)。繁殖期以外に陸地に近づくことは稀である。

【分布】北太平洋に固有の種である (del Hoyo et al., 1996)。極東ロシアでも繁殖する (高木ら, 2000)。国内では極めて稀な冬鳥 (高木, 2000b)。個体数が1990年代から減少し、生息個体数が少なくなり絶滅が危惧されるためIUCNレッドリスト2001年版のカテゴリーでVulnerable :VUに指定されている。

【県内の状況】冬鳥 (桑原・高木, 2000)。国内でも、極めて稀である。個体数も少ない。1977 - 1978年の越冬期に利根川河口で記録がある (桑原・三沢ら, 2006)。

【保護対策】豊富な魚類相を維持するために、漁業資源の保護が必要である。また、漁網やテグス等の廃棄物の適正処理が望まれる。

【引用文献】千葉県 (1976) / Collar et al. (1994) / del Hoyo et al. (1996) / 桑原・三沢ら (2006) / 桑原・高木 (2000) / Storer (1987) / 高木 (2000b) / 高木ら (2000)

【写真】1976年3月23日。銚子市大橋町／繁倉 崇

(高木 武・桑原和之)



アカアシミツユビカモメ

A コアジサシ カモメ科

Sterna albifrons Pallas, 1764国：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
千：B-A-A

【種の特性】上面は灰色、下面は白色。脚は短く黄色で、幼羽では鈍い色で目立たない。嘴は、黄色で細長い。海岸、河川や湖沼、水田、干潟等の湿地で小魚、甲殻類などの小動物を採食する。繁殖地は水辺の砂地で地上に営巣する。1-4卵を生む。約20日で孵化し、雛はすぐに歩けるようになる。

【分布】全世界で繁殖する。冬期、暖地に渡る。地域により地域個体群に分けられている。国内では夏鳥。観察記録は全国にあるが、青森県以南の繁殖記録がある。

【県内の状況】夏鳥。千葉県内では、東京湾岸、九十九里、利根川水系などの湿地で繁殖する。繁殖地以外の地域では、旅鳥である。小櫃川河口や三番瀬では数千羽 - 数万羽の渡りの群れが見られている (桑原・田中ら, 1994)。千葉市内から船橋市内の埋立地では1974年以降、繁殖が確認され、幼鳥が育っていた。習志野市京葉港埋立地や千葉市幕張埋立地では、大きなコロニーが記録されており、幼鳥が育っていた (桐原・桑原, 1998; 桑原・石川ら, 1999)。習志野市京葉港埋立地や千葉市幕張埋立地での繁殖記録は、2009年に途絶えた。東京湾岸では繁殖地が減少している。九十九里浜では、各地で繁殖している。

【保護対策】繁殖個体群を保護する必要がある。繁殖地の維持および保全が望ましい。現在の繁殖地の確保と環境の維持が望ましい。生息可能な環境を保全し、生息地の回復を試みることも必要である。カラス類、ノネコ、ノイヌなどの捕食者から守る必要もある。採食場所となる干潟や浅瀬などの湿地を保全することも望まれる。美しい種であるため、写真撮影の対象となる可能性が高く、野鳥写真撮影愛好家による心無い攪乱が予想される。観察者が集中し悪影響を与える可能性があるため、保護柵などを設け繁殖地への立ち入りなどの制限を設けることが望ましい。海岸や河川敷などの繁殖地への車両の乗り入れ規制などが望ましい。また、採卵など密猟や違法捕獲に対する見回りなども必要である。

【引用文献】桐原・桑原 (1998) / 桑原・石川ら (1999) / 桑原・田中ら (1994)

【写真】1993年5月20日。習志野市茜浜／桑原和之

(桑原和之・早川雅晴)



A ケイマフリ ウミスズメ科*Cepphus carbo* Pallas, 1811

国：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

千：A-A-A

【種の特性】 全長約38cm。ハトよりやや小さい中型のウミスズメ類。雌雄同色。夏羽では全身黒褐色、目の周囲が涙滴型に白い。脚は鮮やかな赤色。冬羽では上面が灰褐色、下面は白くなる。繁殖期は4-7月で断崖や岩礁の岩の割れ目や重なった石の下などで営巣する。

【分布】 サハリン、千島列島、オホーツク海沿岸、沿海州、朝鮮半島東部などで繁殖する。冬期は、やや南に渡る。国内では、北海道の天売島、積丹半島、知床半島などで少数が繁殖する（寺沢ら、1996）。冬期は北海道沿岸の他、東北、北陸、東海地方まで南下する。

【県内の状況】 東京湾では、夏羽1羽が1968年3月20日 富津岬（布引海岸）岬先端から東に200mほどの外湾側で記録されている（柳澤、私信）。外房の大原港や館山市などの記録がある（千葉県、1976）。1960年代までは、個体数は、少ないものの冬期に記録されていた。しかし、近年の観察記録は少なくなった。

【保護対策】 本種の最大の脅威は刺し網、流し網などによる混獲である。重油流出やレジンペレットなど海洋汚染による影響も受けやすい（大畑ら、2000）。東京湾においては船舶の航行による生息域の攪乱も影響するであろう。海上に生息する種であるため観察例は少ないが、保護対策を立てる上でも生息状況の把握が必要である。

【引用文献】 千葉県（1976）／大畑ら（2000）／寺沢ら（1996）

【イラスト】 箕輪義隆

（桑原和之・竹田伸一）



ケイマフリ

A カンムリウミスズメ ウミスズメ科*Synthliboeamphus wumizusume* (Temminck, 1835)

国：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

千：A-A-A

【種の特性】 全長は24-25cm。小型のウミスズメ類。雌雄同色。大きさ色彩ともにウミスズメに似る。体はやや小さく、嘴は青灰色で長い。後頭部は白く、頭頂には冠羽がある。日本近海の固有種で、個体数は5,000-6,000羽と推定されている。繁殖地では重なり合った岩のすき間や石の下、岩の割れ目などに営巣し1-2卵を産む。ヒナは約1ヶ月で孵化するが、生まれたときから綿羽に包まれている。孵化後2日目の夜には親に誘導されて海に入り、巣立ちする（寺沢・小野、1996）。繁殖期はおおむね3-5月だが、それ以外の生態は未だ不明である。繁殖地以外での非繁殖期の生息状況もよくわかっていない。繁殖地における本種の最大の脅威は、繁殖地におけるネズミやカラスによる捕食、釣り人による繁殖地の攪乱などがあげられる。

【分布】 本州中部以南の岩礁や離島で繁殖する。主な繁殖地は日本沿岸であるが、韓国南部の離島でも繁殖が知られる。伊豆諸島、駿河湾、伊勢湾、福岡県、宮崎県、山口県、若狭湾、石川県七ツ島などで繁殖記録がある。

【県内の状況】 極少数の記録がある（千葉県、1976）。東京湾では幕張海岸で記録がある（桐原ら、1998; 2000）。外房ではヒナが確認されている（奴賀ら、2004）。

【保護対策】 非繁殖期における最大の脅威は刺し網、流し網などによる混獲である（竹田ら、2001）。重油流出やレジンペレットなど海洋汚染による影響も受けやすい（大畑ら、2000）。東京湾においては船舶の航行による生息域の攪乱も影響するであろう。海上に生息する種であるため観察例は少ないが、保護対策を立てる上でも生息状況の把握が必要である。

【引用文献】 千葉県（1976）／桐原ら（1998）／桐原ら（2000）／奴賀ら（2004）／大畑ら（2000）／竹田ら（2001）／寺沢・小野（1996）

【写真】 2009年4月4日。銚子市沖海上／坂東俊輝

（桑原和之・竹田伸一）



カンムリウミスズメ

A コミミズク フクロウ科

Asio flammeus (Pontoppidan, 1763)国：掲載なし
千：B-B-A

【種の特性】フクロウの仲間。広い草地に生息する。主にネズミ類を捕食する。

【分布】ユーラシアと北アメリカの亜寒帯以北で繁殖する。冬期は南に渡る。アジアの温帯地方や北アメリカ南部・アフリカ北部などで越冬する。南アメリカの南緯40-70度の地域や、ガラパゴス諸島等では留鳥である。国内では冬鳥。全国に飛来する。日中は休息し、夜間に活動する。活動している時、「ギャーウー」と大きな声で鳴くことがある（石川, 1985）。

【県内の状況】冬鳥。個体数は少ない。草地性で、昼間は草の茂みの中で休息し、夕方から活動する。耕作地・河川敷等に飛来する（石川, 2007）。東京湾岸の埋立地が広大な草地であった1970-1980年代は、本種やトラフズクが飛来し越冬した（石川, 1991; 1993; 桐原・桑原, 1998）。1986年2月には東京湾岸の埋立地である幕張埋立地で11羽、京葉港埋立地で9羽が記録されている（石川, 1986）東京湾岸の埋立地が開発され、草地が減少し越冬数が減少した。越冬地の消滅とともに観察記録がなくなった。市原市などでも減少している（市原市自然ガイドブック刊行委員会, 1995）。一方、休耕田や造成地等、放置され草地化した場所が新たな越冬地となっている可能性がある。

【保護対策】耕作地・河川敷・草地の広範な環境保全が望ましい。越冬可能な環境を保全し、生息地の回復を試みることも必要である。また、千葉県における生息状況が明らかでない。全県的な生息状況および環境を精査する必要がある。ねぐらも含めた生息情報の早期把握と適切な情報管理が必要である。

【引用文献】市原市自然ガイドブック刊行委員会(1995)／石川(1986)／石川(1991)／石川(1993)／石川(2007)／桐原・桑原(1998)

【写真】2004年1月17日。柏市／高島斎二

(桑原和之・高木 武)



A アオバズク フクロウ科

Ninox scutulata (Raffles, 1822)国：掲載なし
千：B-A-A

【種の特性】小型のフクロウの仲間。森林性で主に夜間に活動する（大庭, 1990）。繁殖期に「ホッホー、ホッホー」と特徴のある声で鳴く（大庭, 1981）。鱗翅類・甲虫類等の昆虫類やコウモリ等を捕食する。社寺林等に残る大木の樹洞で繁殖する。

【分布】ロシアの沿海地方・中国東部・朝鮮半島・東南アジア・インド等で繁殖する。北方で繁殖する個体は南に渡る。東南アジア、南アジアなどで越冬する。国内では夏鳥。全国に渡来する。国内では、九州以北で*N.s. japonica*、奄美・沖縄で*N.s. tofotogo*の2亜種が繁殖する。全国的に個体数の減少が著しい。

【県内の状況】夏鳥。各地に渡来する（千葉県環境部自然保護課, 1994）。夜行性で生息の確認が難しい。千葉県における生息状況が明らかでない。開発に伴う森林の分断化・消滅や植林地の拡大等により、繁殖場所や個体数は減少している。

【保護対策】営巣可能な樹洞を有する大径木を含む樹林の保全が必要である。観賞用に捕獲されることも多い。繁殖地では、巡回による適切な見回りも有効である。さらに繁殖場所では、写真撮影の対象となる可能性が高く、野鳥写真撮影愛好家による心無い攪乱が予想される。観察者が集中し悪影響を与える可能性があるため、繁殖地への立ち入りなどの制限を設けることが望ましい。夜行性のフクロウ類に関しては生息情報の早期把握と適切な情報管理が必要である。

【引用文献】千葉県環境部自然保護課(1994)／大庭照代(1981)／大庭照代(1990)

【写真】2006年6月27日。白子町／高島斎二

(高木 武・桑原和之)



A アマツバメ アマツバメ科*Apus pacificus* (Latham,1801)国：掲載なし
千：A-A-A

【**種の特性**】ツバメとは、全く異なる分類群に属する。体型はツバメに似るが、腰の羽色が白色を示し、下面は黒色で翼が長いため、識別は容易である。高山や海岸で集団で繁殖する。

【**分布**】ロシアから中国にかけて広い範囲で繁殖する。繁殖後は南に渡り、越冬する。国内では夏鳥。本州以北で繁殖する。繁殖分布は局地的である。冬期は南に渡る。

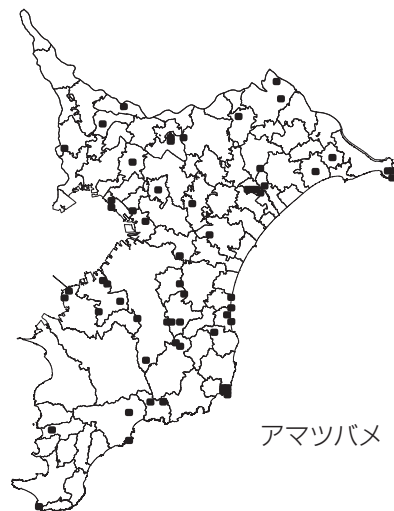
【**県内の状況**】夏鳥。局地的に繁殖する。千葉県では100年以上前から内房の島で繁殖が確認されている(オーストン, 1898; Bent, 1940; Campbell, 1900)。内房で営巣が確認されている。現在は、繁殖地も局地的になり、一部の海岸で繁殖しているにすぎない。繁殖地以外では、春と秋の渡りの時期に通過する。アマツバメの減少の原因は、採食場所や営巣場所が減少したためといわれているが、確証は得られていない。海岸等に営巣するため、人の不注意による巣の破壊が、繁殖攪乱要因となっていることも考えられる。

【**保護対策**】繁殖地への立ち入り禁止等の保護が重要である。

【**引用文献**】オーストン(1898)／Bent(1940)／Campbell(1900)

【**写真**】2010年3月17日. 君津市豊英／加藤恵美子

(茂田良光・桑原和之)



アマツバメ

A トラツグミ ツグミ科*Zoothera dauma* (Latham,1790)国：掲載なし
千：D-D-A

【**種の特性**】日本産ツグミ類の中で最も大きい。繁殖期、夜間から早朝に「ヒー、ヒョー」と口笛の様な声で鳴く。林床で小動物を採食し、雛にはミミズ類を多く給餌する。秋から冬には、各種の木の実も採食する。明るく開けた場所ではあまり見られない。

【**分布**】シベリア東部から中部・沿海地方・朝鮮半島・中国南西部からヒマラヤ地方で繁殖する。中国南部・東南アジア等で越冬する。国内では奄美大島以北で繁殖する。本州以南で越冬する。

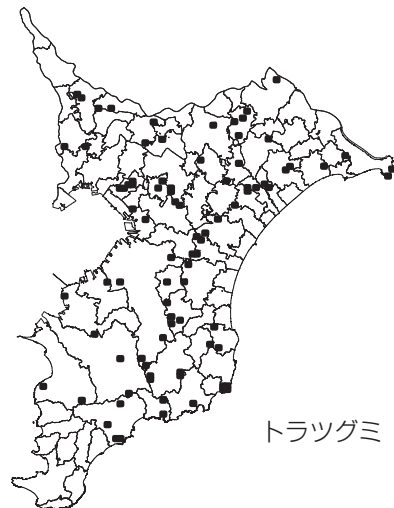
【**県内の状況**】千葉県内では、房総半島南部の丘陵地で繁殖する。ごく少数が繁殖している。冬期には、県内各地で観察される(浅川・桑原, 1999; 箕輪・桑原ら 1999, 箕輪・田村ら, 2000; 新浜倶楽部, 1988)。個体数は多くない。

【**保護対策**】繁殖個体群は絶滅のおそれが高い。繁殖地の森林の保全が望ましい。また、繁殖地の分布を確実に把握することが必要で、繁殖期における調査が望まれる。ノイヌやノネコや移入動物は本種の天敵であるため、駆除をするなどの十分な配慮が必要である。

【**引用文献**】浅川・桑原, (1999)／箕輪・桑原ら(1999)／箕輪・田村ら, (2000)／新浜倶楽部, (1988)

【**写真**】2010年1月20日. 千葉市緑区／加藤恵美子

(桑原和之・戸田光彦)



トラツグミ

A クロツグミ ツグミ科

Turdus cardis Temminck, 1831国：掲載なし
千：無－A－A

【種の特性】 全長22cm。オスの上面は黒色、腹部は白色で黒色の斑が入る。嘴と目の周りが黄色で目立つ。メスは背が茶色で脇が明るい褐色で地味な色彩をしている。

【分布】 日本と中国の一部の地域で繁殖する。冬期には南に渡る。主に中国南東部から東南アジアで越冬する。国内では夏鳥。九州以北の森林で繁殖する。渡りの季節は、各地で見られる。極く稀に越冬期に記録がある。

【県内の状況】 夏鳥。千葉県内では房総丘陵の森林で繁殖している。繁殖している個体数は少ない。繁殖地以外でも少ない。春と秋の渡りの時期に、銚子市（桑原ら、2006）、千葉市（桑原ら、1994）など各地で極稀に記録される。

【保護対策】 繁殖地の森林の保全が望まれる。

【引用文献】 桑原ら（1994）／桑原・三沢ら（2006）

【写真】 2004年5月22日。勝浦市太子坂逐道／布留川 毅

（桑原和之）



クロツグミ

A アカコッコ ツグミ科

Turdus celanops Stejneger, 1887国：絶滅危惧ⅠB類（EN）
千：C－C－A

【種の特性】 アカハラに似ている。本種の雄の頭部は黒色で頭部と胸部の赤褐色の羽毛の羽色との境界は明瞭に区切られているように見える。尾は黒く、明確である。アイリングは太く黄褐色で、目立っている。アカコッコに類似するアカハラ *Turdus chrysolaus* の亜種オオアカハラ *Turdus chrysolaus orii* の頭部は黒褐色であるが、胸部の赤褐色の羽毛との境がアカコッコほど明確ではない。亜種オオアカハラの尾は黒色でなく褐色である（桑原・茂田ら、2004）

【分布】 日本固有種。繁殖地は伊豆諸島とトカラ列島である。留鳥で分布は局所的である（内田、1960）。個体数は伊豆諸島では移入動物による捕食や噴火による生息環境の劣化のため激減してしまった。三宅島では、1980年代前半までは個体数が多く、簡単に観察することができた。1960年代までは、越冬期にも多くの繁殖地でアカコッコが普通に見られていたようである。静岡県下田市や神奈川県初島など繁殖地の周辺でも越冬が知られる（日本鳥学会、2000；日本野鳥の会神奈川支部、1998；山階鳥類研究所、1997）。トカラ列島でも冬期は減少する（小倉 豪私信）。温暖な伊豆半島や房総半島では、ごく稀に越冬が確認されている。

【県内の状況】 千葉県でも南部や九十九里－銚子市の外房地域で見られている。観察記録が減少した。写真によるアカコッコの記録は、千葉県では下記の2例のみである。アカコッコのオス成鳥が1983年12月15日から1984年4月7日まで千葉県銚子市清水町で越冬した。1992年4月25日から5月2日まで山武郡山武町埴谷（現：山武市）で観察された（桑原・茂田ら、2004）。

【保護対策】 生息地である森林を良好に維持することが望ましい。千葉県における生息状況が明らかでない。また、越冬地の分布を確実に把握することが必要で、越冬期における調査が望まれる。ノイヌやノネコや移入動物は本種の天敵であるため、駆除をするなどの十分な配慮が必要である。

【引用文献】 桑原・茂田ら（2004）／日本鳥学会（2000）／日本野鳥の会神奈川支部（1998）／山階鳥類研究所（1997）／内田（1960）

【写真】 1992年5月2日。山武市埴谷／富谷健三

（桑原和之・茂田良光）



アカコッコ

A オオセッカ ウグイス科*Locustella pryeri* (Seebom, 1844)

国：絶滅危惧ⅠB類 (EN)

千：A-A-A

【種の特性】 全長約13cm。昆虫類・クモ類等の小動物を採食する。利根川下流では、ヨシ・スゲ群落を嗜好し、繁殖した(植田ら, 1994)。繁殖期は5-8月であり、一夫多妻で繁殖する。繁殖期にオスは、飛び上がりながら大きな声でさえずる。繁殖期は、このディスプレイ・フライトを行うオスを確認することが多い。非繁殖期は、草地で生活し、ほとんど目につかない種である。

【分布】 極東地域の固有種(Witherby, 1913a)。ロシア、ウスリー地方・中国東北部・日本で局所的に繁殖する(Cheng, 1988)。大陸産のオナガオオセッカ(*M.p. sinensis*)と日本産の基亜種であるオオセッカ(*M.p. pryeri*)の2亜種が知られる(Witherby, 1913a; 粉山, 1949; 茂田, 1991)。1936年宮城県蒲生での繁殖記録が、国内における初めての繁殖記録である(安曇, 1937)。1947年3月25日に千葉県津田沼町で収集されている(粉山, 1947)。

【県内の状況】 1980年以前の千葉県内の記録は多くなかった(千葉県, 1976)。東京湾や九十九里で越冬期に記録されていた(早稲田大学生物同好会, 1973)。利根川沿いの佐原市・小見川町・東庄町で少数が繁殖する(千葉県環境部自然保護課 1984; 1988)。繁殖期、香取市およびその周辺には多い(桑原, 1991)。利根川河川敷では標識調査が行なわれている(茂田, 1989a; 1990)。また、印旛沼北部調整池およびその周辺でも数番が繁殖する(箕輪ら, 2005)。渡りや越冬期には、県内各地のヨシ原で記録がある(石川, 1977)。

【保護対策】 湿地の保護が必要である。特にヨシやマコモなど草丈の高い植物が必要である(永田, 1997)。ただし、下層植生が発達していない群落は、繁殖地として適していないという報告がある(植田・金井, 1994)。ヨシやマコモなど草丈の高い植物が疎らに生育し、下層部にスゲ属などの低い植物が密生するヨシ・スゲ群落を保護し、維持する必要がある。本種の生息状況が明らかでないため、今後も調査を行ない情報を収集する必要がある。

【引用文献】 安曇(1937) / Cheng(1988) / 千葉県(1976) / 千葉県環境部自然保護課(1984) / 千葉県環境部自然保護課(1988) / 石川(1977) / 桑原(1991) / 箕輪ら(2005) / 粉山(1947) / 粉山(1949) / 永田(1997) / 茂田(1989a) ; (1990a) ; (1991) / 植田ら(1994) / 早稲田大学生物同好会(1973) / Witherby(1913a)

【写真】 2010年8月10日。成田市 / 和田信裕

(茂田良光・桑原和之)



オオセッカ

A キビタキ ヒタキ科*Ficedula narcissina* (Temminck, 1835)

国：掲載なし

千：B-B-A

【種の特性】 オスは腹部・腰が黄色、上面が黒色で目立つ。メスは、灰褐色で地味な色彩をしている。オスは姿も声も美しいため、飼鳥とされてきた。現在でも全国各地で違法捕獲による飼養や密猟が少なくない。平地、丘陵地から山地の広葉樹林に生息する。森林の上層から中層部の枯枝等にとまり、昆虫を空中で捕食する。木の幹の裂け目や浅い樹洞に営巣する。

【分布】 ユーラシア大陸極東部に固有の種。日本、中国山西省東部・ウスリー・サハリン等で繁殖する。東南アジアなどで越冬する。国内では夏鳥。九州以北のほぼ全国で繁殖する。屋久島から南西諸島では周年見られる。

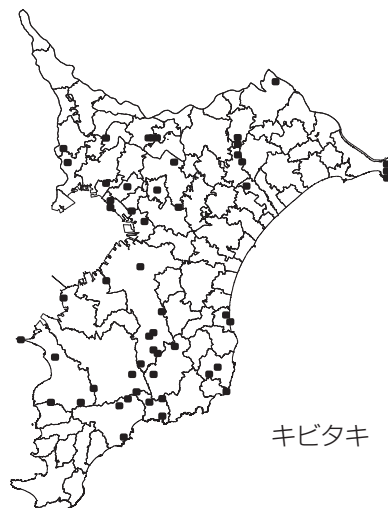
【県内の状況】 夏鳥。千葉県内で繁殖している個体数は少ない。市原市や房総丘陵の養老川源流部を中心とした地域などで繁殖する。千葉市、市原市南部・君津市東部・鴨川市北東部・天津小湊町・大多喜町西部等で繁殖している可能性がある。春と秋の渡りの時期に、各地で記録される(桑原ら, 1994; 桑原・三沢ら, 2006)。

【保護対策】 繁殖個体群の保護が望ましい。繁殖地の保全と森林の連続性の維持が必要である。密猟など違法捕獲の取り締まりも望まれる。

【引用文献】 桑原ら(1994) / 桑原・三沢ら(2006)

【写真】 2008年5月7日。鴨川市清澄 / 加藤恵美子

(桑原和之・戸田光彦)



キビタキ

A コサメビタキ ヒタキ科

Muscicapa dauurica Pallas, 1811国：掲載なし
千：B-A-A

【種の特性】丘陵地から低山の森林で繁殖する。屋敷林で繁殖することもある。樹木の横枝にコケや地衣類を用いて皿形の巣を作る。森林の上層から中層部の枯枝などに止まり、飛翔昆虫を空中で捕食する。渡りの時期には都市部の公園などにも出現する。かつては、里山で普通に見られていたが、都市近郊で、近年著しく減少した。

【分布】中国東北部からロシア沿海州、バイカル湖沿岸の地域にかけて繁殖し、東南アジアに渡り越冬する。国内では夏鳥。北海道から九州にかけて繁殖する。

【県内の状況】繁殖期には、主に養老川源流部を中心とした房総丘陵で確認例があり、繁殖の可能性が示唆されている。ただし、巢卵および巣立ち雛の確認など確実な繁殖例はまだ報告されていない。夏鳥であるオオルリやヤブサメに比べ、繁殖期の記録は少ない。繁殖していても、繁殖地はこれらの種より狭く、個体数も少ないと推測される。渡り時期には各地で観察されるが、渡りの時期には各地で観察されるが、記録は秋（9月と10月）に偏っている（千葉県，1976；桑原ら，1994）。近年は、旅鳥として通過する個体の観察例も減少傾向にある。

【保護対策】千葉県における繁殖状況が明らかでない。繁殖状況および環境を精査する必要がある。低地の森林を維持、育成することが望ましい。

【引用文献】千葉県（1976）／桑原ら（1994）

【写真】2006年5月4日。富津市富津岬／加藤恵美子

（桑原和之・戸田光彦）



コサメビタキ

A サンコウチョウ カササギヒタキ科

Terpsiphone atrocaudata (Eyton, 1839)国：掲載なし
千：A-A-A

【種の特性】美しい種である。オスは尾羽が長く、目立つ。かつてはヒタキ科に含められていたが（日本鳥学会，1974）、近年はヒタキ科とは縁遠い種であるとされる（日本鳥学会目録編集委員会，1997）。各地で減少が著しい。常緑広葉樹林やスギ林等、暗い林内に生息する。昆虫類を枝から飛びついて捕食する。クモの糸等を用い、細い枝にカップ状の巣を作る。滅多に地上に降りない。

【分布】日本・台湾・フィリピンで繁殖する。亜熱帯以南では周年みられる。国内では夏鳥。本州以南で繁殖する。全国的に渡来数の減少が著しい。

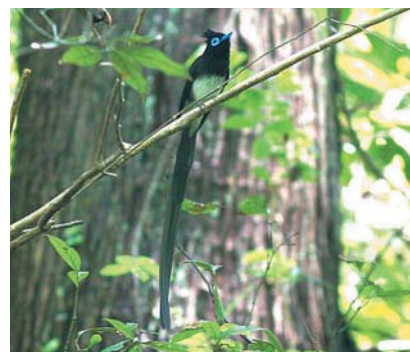
【県内の状況】夏鳥。個体数は少ない。房総丘陵に繁殖期の記録が集中している。清澄山の周辺では、少数が繁殖している（才木，2006）。北総の流山市周辺でも繁殖期に確認されている（浅川，1999）。各地にごく少数が繁殖している可能性がある。

【保護対策】森林の広範な保全、連続性の維持が望まれる。渓谷沿いの暗い常緑広葉樹林植生の維持が望まれる。また、写真撮影の対象となる可能性が高く、野鳥写真撮影愛好家による心無い攪乱が予想される。観察者が集中し悪影響を与える可能性があるため、繁殖地への立ち入りなどの制限が必要となる。密猟や繁殖妨害回避のため、繁殖地情報の取扱いには細心の注意が必要である。

【引用文献】浅川（1999）／日本鳥学会（1974）／日本鳥学会目録編集委員会（1997）／才木道雄（2006）

【写真】2007年6月27日。市原市／加藤恵美子

（桑原和之・戸田光彦）



サンコウチョウ

A コジュリン ホオジロ科*Emberiza yessoensis* (Swinhoe, 1874)

国：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

千：A-A-A

【種の特性】オスは頭部が黒色で目立つ(茂田, 1989b)。草原、農耕地、水田、畑、採草地、河川、湖沼などの広い草原やヨシ原などで生活する。樹林内部ではみられない。広い草原やヨシ原、湿地で繁殖する。越冬期や渡りの時期には、小群で生活する。北方で繁殖する個体は、南へ渡り越冬する。主に昆虫類や草本類の種子を採食する。

【分布】極東地域の固有種(Witherby, 1913b)。局地的に繁殖する。青森、秋田、山形、新潟、富山、長野、群馬、茨城、千葉、山梨、静岡、熊本などの県で繁殖記録がある(Ingram, 1908; 真木, 1989; 中村, 1981; 卯木, 1973; 谷口, 1973; 茂田, 1992; 渡辺, 1959)。北部で繁殖する個体は、低地や暖地に移動して越冬し、越冬期や渡りの時期には、本州、四国、九州に全国的に分布する(日本野鳥の会徳島県支部, 1987; 茂田, 1992)。

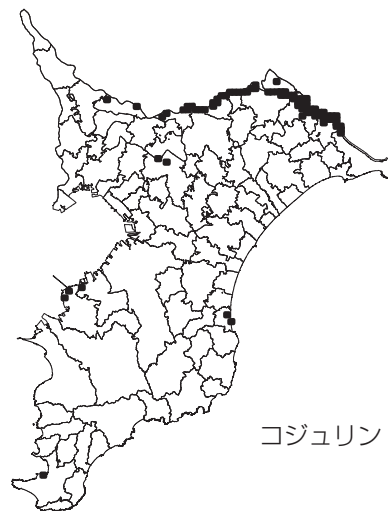
【県内の状況】周年記録がある。ただし、留鳥であるかどうかは不明である。香取郡小見川町で、1928年6月と1930年6月に各5個体の標本が採集されている(島根県立博物館, 1978)。千葉県内では、ヨシ原に分布する(桑原, 1991)。主に利根川流域で繁殖する(千葉県環境部自然保護課, 1986)。印旛沼北部調整池周辺でも繁殖する(箕輪・桑原ら, 2005)。冬期には、東京湾岸では、渡りの時期や越冬期にみられていた(桑原・石川ら, 1999)。ただし、埋立地の宅地化・市街地化により、観察例数や個体数は減少している。

【保護対策】繁殖地および越冬地など生息地である湿地の環境を良好に維持する必要がある。特に繁殖地の維持・保全が望ましい。

【引用文献】千葉県環境部自然保護課(1986) / Ingram(1908) / 桑原(1991) / 桑原・石川ら(1999) / 真木(1989) / 箕輪・桑原ら(2005) / 中村(1981) / 日本野鳥の会徳島県支部(1987) / 茂田(1989) / 茂田(1992) / 島根県立博物館(1978) / 谷口(1973) / 卯木(1973) / 渡辺(1959) / Witherby(1913b)

【写真】2004年6月27日。成田市／高島斎二

(茂田良光・桑原和之)



コジュリン

B ウミウ ウ科*Phalacrocorax capillatus* (Temminck et Schlegel, 1850)

国：掲載なし

千：B-B-B

【種の特性】大型の海鳥。主に海岸に生息する。カワウが河川・湖沼・波の静かな内湾等で見られるが、ウミウは河川や湖沼等では少ない。魚類などを捕食する。

【分布】カワウがユーラシア、アフリカ、オセアニアの亜寒帯の一部から熱帯地域、アメリカ東海岸等広範囲に分布するが、ウミウは極東地域に分布するだけである。日本海からオホーツク海周辺で繁殖する。冬期は南に渡る。国内では北海道、東北などの北日本、島嶼で繁殖する。冬期、各地の海岸で越冬する。北海道から北日本の海岸では周年見られ、本州中部以南では冬期に見られる(箕輪, 2007)。

【県内の状況】冬鳥。主に外房地域の海岸で越冬する。利根川下流部から銚子漁港などで数千羽が越冬する(桑原・三沢ら, 2006)。東京湾奥部では稀であった(箕輪ら, 1996; 桐原・桑原, 1998)。印旛沼などの湖沼でも少数が越冬する。人が近づけない外房海岸の海食崖などでねぐらをとる(奴賀ら, 2003)。

【保護対策】海岸の海食崖が浸食され、休息場所やねぐらとしての条件が劣化している。海岸の海食崖、岩場等の越冬地を良好に維持することが望ましい。テグスや釣り針などによる被害も少なくない。漁網等に巻き込まれることも考えられるため、留意が必要である。油流出事故の被害を受ける種でもあるため、油汚染への対策が望まれる。また、近縁種のカワウが狩猟鳥に指定されたことから、誤射による被害も憂慮される。

【引用文献】桐原・桑原(1998) / 桑原・三沢ら(2006) / 箕輪(2007) / 箕輪ら(1996) / 奴賀ら(2003)

【写真】2010年2月4日勝浦市 鵜原海岸／高島斎二

(桑原和之)



ウミウ

B チュウサギ サギ科

Egretta intermedia (Wagler, 1829)

国：準絶滅危惧 (NT)

千：B-B-B

【種の特性】 草地、水田、湖沼、河川等の湿地に生息する。主にカエル類やトカゲ類、魚類、昆虫類を捕食する。繁殖期は4-9月である。一夫一妻である。マツ林や雑木林等の樹上に営巣する。枯れ枝を利用し、粗雑な皿形の巣を造る。3-5卵を産む。産卵した順に抱卵を始めるため、非同時孵化が起こる。チュウサギはアマサギ、ダイサギ、コサギ、ゴイサギなど他のサギ類と混生して集団繁殖コロニーを形成する。夏から秋にかけ集団で塒をとることがある。

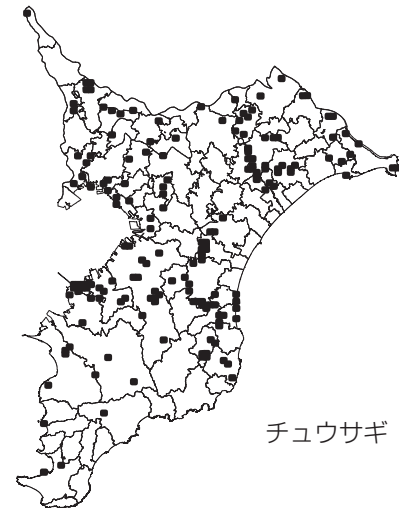
【県内の状況】 夏鳥。海岸から内陸の湿地に分布する（千葉県史料研究財団, 2002）。繁殖期、他のサギ類と集団繁殖を行う。水田などの湿地で採食する（奴賀ら, 2004）。繁殖期が終了すると繁殖地や近くの湿地でねぐらをとる（箕輪ら, 2005）。過去に個体数は少ないが越冬している個体が記録されていたが、近年の越冬例はない。住宅地に隣接した集団繁殖地では、近隣の住民から苦情が出る場合がある。近年の水田の減少により、本種の個体数が減少する可能性は高い。千葉市では要保護生物 (C) に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課, 2004）。

【保護対策】 水田や湖沼などの湿地の保全が望ましい。住宅地に隣接した集団繁殖コロニーでは、安易に営巣木を伐採しないよう配慮することが望ましい。

【引用文献】 千葉県史料研究財団（2002）／千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／箕輪ら（2005）／奴賀ら（2004）

【写真】 2005年5月24日。袖ヶ浦市長浦／山口 誠

（桑原和之・安齊友巳）



チュウサギ

B コクガン カモ科

Branta bernicla (Linnaeus, 1758)

国：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

千：B-B-B

【種の特性】 入り江や内湾の浅海域に飛来する。アマモ、ノリやアオサの仲間等の海草類を採食する。砂浜や岩場で休息する。

【分布】 北極圏のツンドラ地帯で繁殖する。冬期は、南に渡る。温帯地域で越冬する。国内では数少ない冬鳥。主に北海道と東北地方の内湾等で越冬する。渡りの時期、北海道・野付半島では5,000羽以上が観察され、その後分散して南下すると考えられる。宮城県北上川河口では130羽ほどが越冬する。かつては、全国の内湾・入り江・遠浅の砂泥地等に数多く渡来していたと考えられる（黒田, 1939）。現在の主な越冬地は、函館湾・陸奥湾等である（宮林, 1994）。

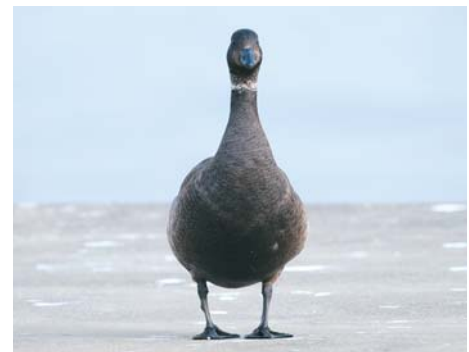
【県内の状況】 稀な冬鳥。観察記録は少ない。船橋市船橋中央埠頭地先や三番瀬等で、1-2羽が見られ、越冬することがある（桑原・田中ら, 1994; 桑原・箕輪ら, 1999; 嶋田, 1992）。九十九里海岸、利根川河口域などでも稀に見られる（桑原・三沢ら, 2006）。三番瀬では、ヒドリガモに混ざり浅瀬で海草類を採食する（嶋田, 1994）。手賀沼や印旛沼等の広い湖沼でも、1-2羽の記録がある（箕輪・桑原ら, 2005）。

【保護対策】 本種の保護には、越冬地である海岸、干潟、浅瀬等の湿地の保全が必要である。三番瀬を中心とした東京湾奥部の浅海域の保全が望ましい。

【引用文献】 黒田（1939）／桑原・田中ら（1994）／桑原ら（1999）／桑原・三沢ら（2006）／箕輪・桑原ら（2005）／宮林（1994）／嶋田（1992）／嶋田（1994）

【写真】 2010年1月18日。銚子市黒生／羽賀秀樹

（嶋田哲郎・桑原和之）



コクガン

B オシドリ カモ科*Aix galericulata* (Linnaeus, 1758)

国：情報不足 (DD)

千：B-B-B

【種の特性】 中型のカモ類。極東地域に固有の種である。ユーラシア大陸東部で繁殖する。冬期は南に渡る。越冬地で大きな群れを形成することがある(呉・蔡, 1999)。雄の繁殖羽は目立つ色彩をしている。樹洞に営巣する。

【分布】 海道・本州・九州・沖縄で繁殖する。越冬期は本州中部以南で見られる。

【県内の状況】 周年見られる。夏期の記録も少なくない(南房総動植物調査団, 1990)。各地の池などで越冬する(箕輪ら, 2005)。秋の渡りの期間に各地の池で見られる(桑原ら, 1994; 箕輪ら, 1999)。千葉市では要保護生物 (C) に選定されている(千葉市環境局環境保全部環境保全推進課, 2004)。

【保護対策】 繁殖地の環境を良好に維持することが望ましい。千葉県における繁殖状況が明らかでない。繁殖状況および環境を精査する必要がある。さらに繁殖地に関する情報の管理には、細心の注意を払う必要がある。また、越冬地の環境を良好に維持することが望ましい。

【引用文献】 千葉市環境局環境保全部環境保全推進課 (2004) / 呉・蔡 (1999) / 桑原ら (1994) / 南房総動植物調査団 (1990) / 箕輪ら (2005) / 箕輪ら (1999)

【写真】 2010年5月14日. 千葉市内／寺野淑子

(桑原和之)



オシドリ

B トモエガモ カモ科*Anas formosa* Georgi, 1775

国：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

千：B-B-B

【種の特性】 小型のカモ類。コガモよりやや大きい。オスでは、眼から渦巻き状に喉まで緑色の羽毛があり、頬が淡黄色であるため、顔に巴紋がある様に見える。メスは、コガモに似るが、嘴の付け根に白色の斑がある。河川や広い湖沼に飛来し、越冬する(山本ら, 2001)。

【分布】 極東地域に固有の種である(山本ら, 2000)。国内では冬鳥。かつては、日本海側や滋賀県で多数が越冬し、各地で大きな群が見られていた(黒田, 1939)。現在、越冬個体数は多くない。石川県のかほく市・金沢市河北潟や加賀市鴨池では数百羽単位の群れが越冬する(Yamamoto et al., 2003; 山本ら 2003)。

【県内の状況】 冬鳥。少ない。印旛沼や手賀沼等大きな湖沼で記録がある(箕輪ら, 1996; 小野ら, 1990)。東京湾岸の湿地でも稀に見られる(桐原・桑原, 1998)。コガモの群の中で数羽が記録されることがある。千葉市では重要保護生物 (B) に選定されている(千葉市環境局環境保全部環境保全推進課, 2004)。

【保護対策】 越冬地の環境を良好に維持することが望ましい。コガモとよく似ている種であるため、狩猟期間中、誤射される恐れがある。狩猟者への指導などが望ましい。

【引用文献】 千葉市環境局環境保全部環境保全推進課 (2004) / 桐原・桑原 (1998) / 黒田 (1939) / 箕輪ら (1996) / 小野ら (1990) / 山本ら (2000) / 山本ら (2001) / Yamamoto et al. (2003) / 山本ら (2003)

【写真】 2007年11月20日. 市川市 じゅん菜池緑地／中込 哲

(桑原和之)



トモエガモ

B ヨシガモ カモ科

Anas falcate Georgi, 1775

国：掲載なし
千：B-B-B

保護上重要な脊椎動物

哺乳類

鳥類

爬虫類
両生類

魚類

【種の特性】 中型のカモ類。極東地域に固有の種である。主に水草等を採食する。近年、国内では減少傾向にある。

【分布】 東シベリアで繁殖する。北海道では、少数が繁殖する。冬期は南に渡る。日本や中国で越冬する（黒田，1939）。国内では全国の湿地で越冬する。

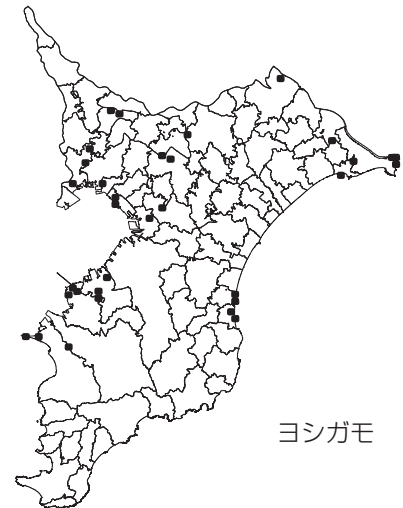
【県内の状況】 冬鳥。個体数は多くない（新浜倶楽部，1988）。千葉県内では各地の河川・湖沼などの湿地で越冬する（三島，1957a）。かつては、東京湾岸の干潟や浅瀬で、数百から数千羽の群れが記録されていた（黒田，1939；新浜倶楽部，1988）。1970年代までは、小櫃川河口から富津にかけての浅瀬でも極めて多く、数千羽が見られていた（百瀬・桑原，1989；箕輪ら，1996）。近年は東京湾で減少した（箕輪ら，2000）。現在、印旛沼（箕輪ら，2005）や手賀沼（環境庁自然環境局，2010）等の湖沼では少なくない。千葉市では重要保護生物（B）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課，2004）。

【保護対策】 越冬地の環境を良好に維持することが望ましい。東京湾の干潟や浅瀬の現状維持が不可欠である。アマモ、コアマモなどの海藻の生息可能な環境を保全し、生息地の回復を試みることも必要である。浅瀬では生物の多様性に富む水域を復活させることが望ましい。狩猟対象種ではあるが、鉛散弾の規制、定期的渡来地では狩猟の規制などの配慮が必要である。

【引用文献】 千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／環境庁自然環境局（2010）／黒田（1939）／箕輪ら（1996）／箕輪ら（2005）／箕輪ら（2000）／三島（1957a）／百瀬・桑原（1989）／新浜倶楽部（1988）

【写真】 2010年1月20日。九十九里町 片貝／和田信裕

（桑原和之）



ヨシガモ

B ビロードキンクロ カモ科

Melanitta fusca (Linnaeus, 1758)

国：掲載なし
千：D-C-B

【種の特性】 マガモとほぼ同大のカモ。クロガモより大きい。主に砂浜海岸で越冬する。主に二枚貝類、甲殻類等の小動物を捕食する。

【分布】 北ヨーロッパ、西シベリア北部、東部シベリア、北アメリカ北西部で繁殖する。冬期は南に渡る。国内では、冬鳥。秋に飛来し、海上で越冬する。北海道、本州北部・中部以北の海域に見られる。南日本では少ない。

【県内の状況】 千葉県内では、冬鳥。クロガモの群れが見られる海岸などで見られる。主に銚子市からいすみ市にかけの海岸で越冬する。東京湾では個体数が減少した。現在、東京湾内では京葉港や千葉市沖、三番瀬等で数羽が記録されるだけである（桑原，1990；桑原・田中ら，1994；桑原・箕輪・石黒ら，2000）。稀に越夏する。

【保護対策】 越冬地の環境を良好に維持することが望ましい。九十九里海岸を中心とした砂浜、浅海域の保全が望まれる。越冬地の環境を良好に維持することが望ましい。東京湾岸の干潟や浅瀬の現状維持が望ましい。ウインドサーフィンや小型船舶等のレジャーによる攪乱も多いため、本種の生息域への侵入防止等の規制も必要である。漁船の操業の際には、漁獲物との混獲を防止するための注意も必要である。

【引用文献】 桑原（1990）／桑原・箕輪・石黒ら（2000）／桑原・田中ら（1994）

【写真】 2006年12月17日。一宮町 一宮海岸／高島斎二

（桑原和之）



ビロードキンクロ

B ホオジロガモ カモ科*Bucephala clangula* (Linnaeus, 1758)国：掲載なし
千：C-B-B

【種の特性】 オスの嘴の基部、頬に白い羽毛がある。オスの頭部は、緑色で光沢がある。メスの頭部は茶褐色である。二枚貝類や甲殻類等を採食する。

【分布】 ユーラシア大陸北部と北アメリカ北部で繁殖する（黒田，1939）。冬期は南に渡る。温帯域で越冬する。ユーラシア大陸で亜種 *B.c.clangula*、北アメリカで亜種 *B.c.americana* が繁殖する。国内では冬鳥。亜種ホオジロガモ *B.c.clangula* が飛来する。全国に飛来し、越冬する。北海道厚岸付近で1,000羽ほど、クッチャロ湖で200羽ほどが越冬する。北日本に多く分布する。内湾や大きな河川、湖沼で数十羽が越冬する。

【県内の状況】 冬鳥。個体数は少ない。新浜沖、三番瀬の市川市沖で数百羽が記録されていた（嶋田，1992；1994）。三番瀬やその周辺の海域で少なくない（桑原ら，1994；嶋田ら，1996）。千葉市や習志野市の海上でも記録される（桐原・桑原，1998；桑原，1990）。印旛沼でも少数が越冬する（箕輪ら，2005）。

【保護対策】 越冬地の環境を良好に維持することが望ましい。東京湾岸の干潟や浅瀬の現状維持が望ましい。ウインドサーフィンや小型船舶等のレジャーによる攪乱も多いため、本種の生息域への侵入防止等の規制も必要である。漁船の操業の際には、漁獲物との混獲を防止するための注意も必要である。

【引用文献】 桐原・桑原（1998）／黒田（1939）／桑原（1990）／桑原ら（1994）／箕輪ら（2005）／嶋田（1992）／嶋田（1994）／嶋田ら（1996）

【写真】 1998年2月12日。船橋市潮見町地先 三番瀬／岡 典弘
（嶋田哲郎・桑原和之）



ホオジロガモ

B ミサゴ タカ科*Pandion haliaetus* (Linnaeus, 1758)国：準絶滅危惧（NT）
千：B-B-B

【種の特性】 タカの仲間。海岸・湖沼・河口等に生息する。上空から水中に突入し、足で魚を捕らえる。海岸の岩棚やアカマツ等の樹上に小枝を大量に積み上げて営巣する。

【分布】 汎世界的に分布する。極地や砂漠を除く北半球全域、オーストラリアの沿岸部で繁殖する。高緯度地方で繁殖する個体は、冬期、南に渡る。アフリカ、南アメリカ等で越冬する。国内では北海道・本州・四国・九州および島嶼・伊豆諸島等で繁殖する。北日本で繁殖する個体は、南に渡り越冬する。個体数は多くない。

【県内の状況】 繁殖は確認されていない。海岸線を中心に記録がある（桑原・三沢ら，2006；奴賀ら，2006）。湖沼でも観察される（箕輪ら，2005）。個体数は少ない。東京湾内では、数少ない旅鳥または冬鳥である（箕輪ら，1991；1996；白田ら，1998）。千葉市では重要保護生物（B）に選定されている（千葉市環境局環境保全全部環境保全推進課，2004）。

【保護対策】 干潟や浅瀬、湖沼等の湿地の環境保全が望ましい。水質汚染の影響を受けやすいことが知られており、河川や湖沼の水質の改善維持に努めることが重要である。

【引用文献】 千葉市環境局環境保全全部環境保全推進課（2004）／桑原・三沢ら（2006）／箕輪ら（1991）／箕輪ら（1996）／箕輪ら（2005）／奴賀ら（2006）／白田ら（1998）

【写真】 2008年4月4日。富津市富津岬／加藤恵美子
（高木 武・桑原和之）



B ハチクマ タカ科*Pernis ptilorhyncus* (Linnaeus, 1758)

国：準絶滅危惧 (NT)

千：B-B-B

【種の特性】比較的大型のタカの仲間。羽色の個体変異が大きい。丘陵地から山地の森林に生息する。ハチ類をはじめとする昆虫類を多く捕食する。地中に営巣するクロスズメバチの幼虫や蛹を採食する。繁殖地への飛来は、本州中部では5月中旬以降である。カラス類や他のタカ類の古巣を利用することが多い。6月中旬にかけて1-3卵を産む。抱卵の後、約1ヶ月後に孵化する。育雛にもハチ類の巣を多く利用する。ハチ類の巣を掘り出し、幼虫や蛹を雛に与える。雛は孵化後35-45日の8月に巣立つ。巣立ち時期は本州で繁殖するタカ類の中で最も遅い。8月中旬から10月中旬にかけ、越冬地に向けて渡る。

【分布】ヨーロッパから極東地域で繁殖する。国内では夏鳥。主に近畿以北の本州から北海道で繁殖する。個体数は多くない。四国・九州でも繁殖が確認されている。

【県内の状況】夏鳥。繁殖個体数は少ない。1970年代までは極めて稀な夏鳥（松田，1975）あるいは渡りの時期、稀に見られるだけであった（千葉県，1976）。渡りの時期は各地で見られる（箕輪ら，2005）。

【保護対策】自然林や雑木林の保全とともに、荒廃した植林地や薪炭林の適正な管理が望ましい。

【引用文献】千葉県（1976）／松田（1975）／箕輪ら（2005）

【写真】2009年5月15日。市原市／加藤恵美子

（高木 武・桑原和之）

**B オジロワシ タカ科***Haliaeetus albicilla* (Linnaeus, 1758)

国：絶滅危惧ⅠB類 (EN)

千：C-C-B

【種の特性】大型の海ワシ。翼開張は2 mにもなる。国の天然記念物。海岸・湖沼・大きな川の近くに生息する。魚類や鳥類を捕食する。屍肉も食べる。北海道では狩猟により放置されたエゾシカの肉を食べるため、鉛の摂取による中毒例が知られる。

【分布】ユーラシア大陸北部に広く分布する。高緯度地方で繁殖する。冬期は南へ渡る。北海道で少数が繁殖する。その他の地域では、冬鳥である。個体数は少ない。越冬数は北日本に比較的多く、本州中部以南では少ない。

【県内の状況】個体数の少ない冬鳥であった。1939年12月19日に行徳、1951年11月20日に新浜猟場で記録されている（三島，1957b）。観察例は減少している。少数が海岸、干潟や湖沼に飛来する（桑原ら，1999）。利根川河口域などでも観察されている（桑原・三沢ら，2006）。内陸の印旛沼では稀である（箕輪ら，2005）。現在は稀にしか見られない。富津市天羽で1989年2月28日（田中種雄 私信）、船橋市潮見町 ふなばし三番瀬海浜公園地先で1995年1月28日（野崎 正 私信）に1羽が確認されている。

【保護対策】河川敷・河口・浅瀬・干潟等の湿地の保全が望ましい。また、違法捕獲による被害を被ることがあるため、留意が必要である。観察者や写真愛好家などの人為的な悪影響を回避するため、飛来情報の早期把握と適切な情報管理が望ましい。

【引用文献】桑原ら（1999）／桑原・三沢ら（2006）／箕輪ら（2005）／三島（1957b）

【写真】1995年1月28日。船橋市潮見町 ふなばし三番瀬海浜公園地先／野崎 正

（桑原和之・高木 武）



B オオワシ タカ科*Haliaeetus pelagicus* (Pallas, 1811)

国：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

千：C-C-B

【種の特性】大型の海ワシ。極東アジアの特産種である。国の天然記念物。海岸・湖沼・サケ類の遡上する大きな川の近くに生息する。サケやスケトウダラ等の魚類やカモ類等の鳥類を捕食する。屍肉も食べる。北海道では狩猟により放置されたエゾシカの肉を食べるため、鉛の摂取による中毒例が知られる。

【分布】ロシアのアムール川下流域、オホーツク海沿岸地方、カムチャッカ半島、サハリン北部で繁殖する。冬期は南に渡る。日本・朝鮮半島等で越冬する。国内では冬鳥。個体数は少ない。主に北海道や東北地方等の北日本に飛来する。

【県内の状況】冬鳥。かつて、東京湾では11月末から2月始め頃に見られたらしい（黒田，1908）。現在、極稀に見られるだけである。少数が海岸や湖沼に飛来する（箕輪ら，2005）。利根川河口域などでも観察されている（桑原・三沢ら，2006）。2003年1月中旬から2月まで約4週間、若鳥1羽が南房総市白浜町で越冬した（山形達哉 私信）。印旛沼では1951年1月11日に1羽（平田，1955）、1989年12月10日に1羽が佐倉市土浮西部調整池に隣接する杉林で記録されている（長島充・長島弘子 私信）。

【保護対策】河川敷・河口・浅瀬・干潟等の湿地の保全が望ましい。また、違法捕獲による被害を被ることがあるため、留意が必要である。観察者や写真愛好家などの人為的な悪影響を回避するため、渡来情報の早期把握と適切な情報管理が望ましい。

【引用文献】平田（1955）／黒田（1908）／桑原・三沢ら（2006）／箕輪ら（2005）

【写真】2003年2月4日。南房総市白浜 名倉海岸／山形達哉
（桑原和之・高木 武）

**B オオタカ タカ科***Accipiter gentilis* (Linnaeus, 1758)

国：準絶滅危惧 (NT)

千：B-B-B

【種の特性】森林性のタカ類。平地から山地に生息する。主にハト類等の中型の鳥類を捕食する。キジ類やカモ類等やリス類・ノウサギ等の哺乳類も捕食する。スギ、アカマツ等の針葉樹に営巣する（前橋宮林局，1998）。産卵期は4-5月である。通常3-4卵を産む。雛は、6月中頃から7月上旬に巣立つ。越冬期、森林だけでなく、河川敷や湖沼畔等の湿地でも見られる。

【分布】北極圏周辺を除く、ユーラシア大陸・北アメリカ大陸北部で繁殖する。北方や高地で繁殖する個体は、低地や暖地に渡り、越冬する。国内では、亜種オオタカ *A. g.* が分布する（茂田ら，2006）。主に本州および北海道で繁殖する（環境庁自然保護局野生生物課，1996）。近年、中国地方や四国でも繁殖例が知られ、九州以北で広く繁殖している可能性がある。非繁殖期は、全国で見られる。個体数は、増加傾向にあると考えられている（Kawakami & Higuchi, 2003）。

【県内の状況】留鳥。1970年代は稀な種であった（松田，1975）。冬鳥ともされていた（千葉県，1976）。1990年代までは一般に広く公表されている繁殖地としては流山市の1例だけであった（浅川・桑原，1999）。野鳥観察の記録が増え、各地で繁殖していることが確認された（新保，2000）。千葉県内各地で、繁殖地が確認されるようになった。さらに近年、非繁殖期の確認例も増加している。

【保護対策】食物となる小動物が生息する多様な生息地の保全が望ましい。営巣木となる大木を含む樹林の保護も重要である。また、剥製や飼育目的の密猟が絶えない（遠藤，1989）。密猟や繁殖の妨害を回避するため、営巣地情報の早期把握が必要である。情報の管理に対しては、細心の注意が求められる。

【引用文献】浅川・桑原（1999）／千葉県（1976）／環境庁自然保護局野生生物課（編）（1996）／Kawakami & Higuchi（2003）／遠藤（1989）／前橋宮林局（編）（1998）／松田（1975）／茂田ら（2006）／新保（2000）

【写真】2008年1月14日。木更津市畔戸／加藤恵美子
（高木 武・桑原和之）



B ハイタカ タカ科*Accipiter nisus* (Linnaeus, 1758)

国：準絶滅危惧 (NT)

千：B-B-B

【種の特性】小型のタカの仲間。オスはおよそハトくらいの大きさ、オスはメスより小さい。オスの体重はメスの半分くらいしかない。日本産鳥類中でも、体の大きさの雌雄差が、もっとも大きな種の一つである（東條, 1991）。森林で生活する。スズメからツグミ位の小-中型の鳥類を捕食する（東條, 1993）。

【分布】ユーラシア大陸の中-高緯度地方と北アフリカで繁殖する。高緯度地方で繁殖する個体は、アフリカ・インド・東南アジア等に渡り越冬する。国内では北海道と本州で繁殖する。主に山地で営巣する。越冬期、全国で見られる。

【県内の状況】冬鳥。少ない。夏期にも観察例がある。繁殖は確認されていない。冬期、各地で見られる（桑原・三沢ら, 2006; 箕輪ら, 2005）。千葉市では要保護生物 (C) に選定されている（千葉市環境局環境保全推進課, 2004）。

【保護対策】生息地である薪炭林や植林地等の森林の適切な管理が望ましい。

【引用文献】千葉市環境局環境保全推進課（2004）／桑原・三沢ら（2006）／箕輪ら（2005）／東條（1991）／東條（1993）

【写真】2005年1月16日. 印旛郡栄町酒直／坂東俊輝

（高木 武・桑原和之）

**B ハヤブサ ハヤブサ科***Falco peregrinus* Tunstall, 1771

国：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

千：B-B-B

【種の特性】海岸・河川敷・湖沼・水田等の開けた場所に生息する。小型から中型の鳥類を空中で捕獲する。主に海岸の断崖の岩棚で繁殖する。

【分布】南極大陸を除く世界中に広く分布する。高緯度地方で繁殖する個体は、冬期、南に渡り、温暖な地域で越冬する。国内では全国的に見られる。ただし、繁殖個体数は、極めて少ない。北海道から九州の海岸で局地的に繁殖する。越冬期、全国で見られる。

【県内の状況】冬鳥。個体数は少ない。夏期の記録もある。繁殖は確認されていない。水鳥類の多い河口や干潟、湖沼等の湿地で観察される（桑原ら, 1999; 箕輪ら, 1996; 2005）。鳥類の大規模渡来地での記録も多い（桑原・三沢ら, 2006）。千葉市では要保護生物 (C) に選定されている（千葉市環境局環境保全推進課, 2004）。

【保護対策】広い耕作地・河口や河川敷・浅瀬や干潟等の湿地の保全が望ましい。繁殖期の記録もあるため繁殖状況の調査も必要である。

【引用文献】千葉市環境局環境保全推進課（2004）／桑原・箕輪ら（1999）／桑原・三沢ら（2006）／箕輪ら（1996）／箕輪ら（2005）

【写真】2008年4月4日. 富津市富津岬／加藤恵美子

（桑原和之・高木 武）



B バン クイナ科*Gallinula chloropus* (Linnaeus, 1758)国：掲載なし
千：C-B-B

【種の特性】 体長32 cm。平地から山地の湖沼、河川、水田等の湿地に生息する。水辺や水面上で、水草、水生昆虫、貝、甲殻類等を採食する。繁殖地は、ヨシ原や池、水田等の湿地である。地面に枯れ草を積み上げ、皿形の巣を造る。警戒心が強く、人影や物音などで草むらに隠れるが、開けた場所にもよく出てくる。

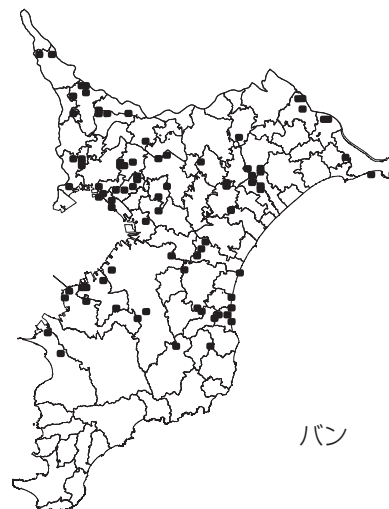
【分布】 オーストラリア区を除く世界中の熱帯から温帯にかけて分布する。全国に分布する。北海道、本州北部では夏鳥、関東地方以南では留鳥である。

【県内の状況】 留鳥。県内各地の水辺に生息・繁殖する（箕輪ら、1996）。河川やため池の改修により、水際のヨシ原などの植生が壊滅的な状況になり、本種の生息地が消失している（桑原、2007b）。特に、東京湾岸に発達していた広大な干潟は大部分が埋め立てられ、後背地に広がっていたヨシ原も消失した。このため、営巣環境の減少が著しい。近年、繁殖個体数だけではなく越冬期の個体数も激減している（箕輪ら、2005）。千葉市では重要保護生物（B）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課、2004）。

【保護対策】 水生植物の繁茂する湿地の保全が必要である。生息可能な環境を保全し、生息地の回復を試みることも必要である。狩猟対象種ではあるが、生息地では狩猟の制限等が望ましい。

【引用文献】 千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／桑原（2007b）／箕輪ら（1996）／箕輪ら（2005）

【写真】 2009年7月9日。千葉市緑区おゆみ野 大百池公園／泉 宏子
（桑原和之）

**B コチドリ チドリ科***Charadrius dubius* (Scopoli, 1786)国：掲載なし
千：B-B-B

【種の特性】 繁殖期は4－7月。一夫一妻で繁殖する。砂地や砂利地に浅い窪みを掘り、巣にする。一腹卵数は4卵が多い。千葉市美浜区での初卵日は、5月中旬である（桑原・箕輪ら、1997）。コアジサシのコロニーの周辺部で営巣すること多い。雌雄交替で抱卵する。抱卵中および育雛中に捕食者が近づくと擬傷を行う。22－25日抱卵でヒナに孵化する。ヒナは孵化後、短時間で歩けるようになり、離巣する。離巣したヒナは、自分で餌を採り、両親の世話を受けながら育つ。

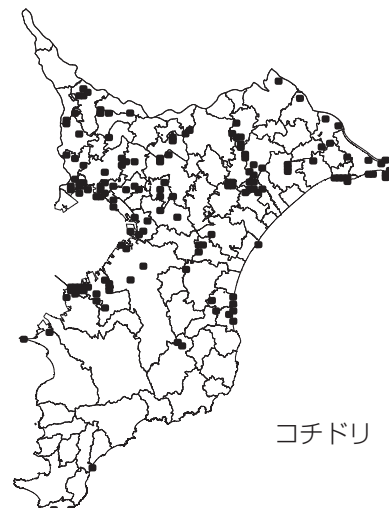
【分布】 ユーラシア大陸の低・中緯度地方の広い範囲で繁殖する。冬期は南に渡る。アフリカ大陸・インド・東南アジアに渡り、越冬する。国内では夏鳥。全国に渡来し繁殖する。少数が越冬する。

【県内の状況】 夏鳥。各地の湿地に飛来する。銚子市からいすみ市にかけの九十九里の砂浜海岸でも見られる（桑原・三沢ら、2006）。市川市から富津市までの埋立地でも営巣していた（桑原・田村ら、1993）。内陸部の手賀沼や野田市・流山市等、水田地帯にも普通に分布していた（野田野鳥同好会、1991）。千葉市美浜区と中央区の埋立地でも少数の繁殖が継続していた。美浜区若葉の約13haの仮設駐車場では、コアジサシのコロニー周辺で毎年少数が繁殖していた（桑原・箕輪ら、1997）。東京湾岸では繁殖地が減少しているため、繁殖数も激減した。千葉市では重要保護生物（B）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課、2004）。

【保護対策】 生息可能な環境を保全する必要がある。可及的に速やかに永続的な営巣地の確保が必要である。繁殖地の回復を試みる事が望ましい。砂浜海岸・干潟・河川敷の広範な環境保全が必要である。

【引用文献】 千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／桑原・三沢ら（2006）／桑原・箕輪ら（1997）／桑原・田村ら（1993）／野田野鳥同好会（1991）

【写真】 1995年6月24日。習志野市茜浜／岡 典弘
（桑原和之・早川雅晴）



B ウズラシギ シギ科*Calidris acuminata* (Horsfield, 1821)国：掲載なし
千：無-C-B

【**種の特性**】水田や湿地で採食する（桑原，2009）。近年、個体数が減少している（桑原・中川，1998）。

【**分布**】シベリアのツンドラで繁殖する。冬期には南に渡る。主にオーストラリアで越冬する。国内では旅鳥もしくは冬鳥。南西諸島では少数が越冬する。個体数は少ない。

【**県内の状況**】旅鳥。利根川水系、東京湾岸や九十九里地域の湿地で普通に見られていた。近年、激減した（箕輪ら，2005）。利根川下流域でも個体数は減少した（桑原・三沢ら，2006）。近年、県内では記録が少ない。千葉市では重要保護生物（B）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課，2004）。

【**保護対策**】採食場所である河川や水田、干潟等の湿地の保全が望ましい。

【**引用文献**】千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／桑原（2009）／桑原・三沢ら（2006）／桑原・中川（1998）／箕輪ら（2005）

【**写真**】1978年9月9日。銚子市長塚／繁倉 崇

（桑原和之）



ウズラシギ

B チシマシギ シギ科*Calidris ptilocnemis* (Coues, 1873)国：情報不足（DD）
千：B-B-B

【**種の特性**】海から遠くないツンドラで繁殖する。地上にくぼみを作り、コケを敷いて営巣する。4卵を産む。海岸で越冬する。他のシギ・チドリ類が採食しないような、波の当たる岩礁や防波堤で採食する。

【**分布**】シベリア北東部のチェコト半島・アラスカ西部・アリューシャン列島・プリビロフ諸島・コマンドル諸島で繁殖する（Hayman et al., 1986）。北アメリカ西海岸・アリューシャン列島・千島列島で越冬する。国内では、数少ない冬鳥または旅鳥。北海道・本州・石川県・山陰地方の海岸等から記録がある。北海道や本州で少数が越冬する。国内でも稀に記録があるだけである。

【**県内の状況**】冬鳥。千葉県内では、極めて稀である。個体数も少ない。銚子市の利根川河口域や岩礁海岸、富津岬、小櫃川河口等の湿地で記録がある（箕輪ら，1999）。銚子市では利根川河口や岩礁で越冬した（桑原・三沢ら，2006）。岩礁だけでなく干潟で採食することもある。富津・小櫃川でも越冬記録がある（藤岡ら，1997a; b; 1998a; b; 1999）。

【**保護対策**】採食場所や休息場所である岩礁や防波堤への人の立ち入り制限をする必要がある。干潟等の保全も望ましい。

【**引用文献**】藤岡ら（1997a）／藤岡ら（1997b）／藤岡ら（1998a）／藤岡ら（1998b）／藤岡ら（1999）／Hayman et al.（1986）／桑原・三沢ら（2006）／箕輪ら（1999）

【**写真**】1978年12月30日。銚子市川口／繁倉 崇

（桑原和之）



チシマシギ

B ハマシギ シギ科*Calidris alpina* (Linnaeus, 1758)国：掲載なし
千：無－B－B

【種の特性】シギの仲間。嘴が細長く、地面の小動物などを捕食する。干潟、砂浜、礫浜、河川、湖沼、水田などの湿地で採食する。

【分布】広い範囲に分布する。ヨーロッパから北アメリカで繁殖する。冬期には南に渡る。多くの亜種に分けられている。おのおのの亜種の生息個体数や分布に関しては不明な点が多い。国内では冬鳥・旅鳥。国内には亜種ハマシギ *Calidris alpina sakhalina* が飛来するとされている。ただし、未記載のアラスカ産の亜種なども国内各地で記録されている。渡りの時期や越冬期に日本全国の湿地に飛来する。太平洋側の東京湾、愛知県の内湾、九州などの干潟に多かった (Thompson et al., 1993)。各地で激減した。

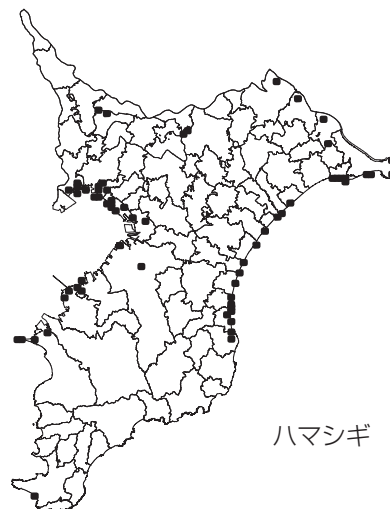
【県内の状況】冬鳥・旅鳥。東京湾岸や九十九里地域で越冬する。東京湾の干潟では、数万羽が越冬していた。1975年以前は、千葉市から習志野市の海岸では毎年10,000羽以上が越冬していた (千葉県, 1975)。減少の傾向が著しく、現在多くない。千葉市では最重要保護生物 (A) に選定されている (千葉市環境局環境保全部環境保全推進課, 2004)。

【保護対策】採食場所である干潟、砂浜等の湿地の保全が望ましい。越冬地の環境を良好に維持することが望ましい。東京湾岸の干潟や浅瀬の現状維持が望ましい。ウインドサーフィンや小型船舶等のレジャーによる攪乱も多いため、本種の生息域への侵入防止等の規制も必要である。

【引用文献】千葉県 (1975) / 千葉市環境局環境保全部環境保全推進課 (2004) / Thompson et al. (1993)

【写真】2006年4月24日。習志野市 谷津干潟／小林大光

(桑原和之)



ハマシギ

B キリアイ シギ科*Limicola falcinellus* (Pontoppidan, 1763)国：掲載なし
千：無－B－B

【種の特性】シギの仲間。嘴が細長く、地面の小動物などを捕食する。干潟や海岸、埋立地等の湿地で採食する。水田や内陸の湿地では少ない。

【分布】極極東地域で繁殖する (Hayman et al., 1986)。冬期には南に渡る。主に中東から南アジア、東南アジア、オーストラリア等で越冬する。国内では旅鳥。個体数は少ない。主に秋の渡りの時期に飛来する。

【県内の状況】旅鳥。千葉県でも東京湾岸や九十九里地域で見られていたが減少した。利根川下流域でも個体数は減少した (桑原・三沢ら, 2006)。1969年の秋の渡りの時期の個体数が多く千葉県では数百羽の群れが確認されている (高野, 1978)。春の渡りの時期の記録は少ない。千葉市では最重要保護生物 (A) に選定されている (千葉市環境局環境保全部環境保全推進課, 2004)。

【保護対策】採食場所である干潟や海岸等の湿地の保全が望ましい。

【引用文献】千葉市環境局環境保全部環境保全推進課 (2004) / Hayman et al. (1986) / 桑原・三沢ら (2006) / 高野 (1978)

【写真】2004年8月20日。長生村 一宮川河口／高島斎二

(桑原和之)



キリアイ

B ツルシギ シギ科*Tringa erythropus* (Pallas, 1764)国：掲載なし
千：無-B-B

【種の特性】水田や湿地で採食する（桑原，2009）。近年、個体数が減少している（桑原・中川，1998）。

【分布】ヨーロッパから極東地域で繁殖する。冬期には南に渡る。主にアフリカから、南アジア、東南アジアで越冬する。国内では旅鳥もしくは冬鳥。南西諸島では越冬する。個体数は少ない。

【県内の状況】旅鳥。東京湾岸や九十九里地域の湿地で大きな群れが見られていた。近年、激減した（桑原・鈴木ら，2001）。利根川下流域でも個体数は減少した（桑原・三沢ら，2006）。近年、県内では記録が少ない。千葉市では最重要保護生物（A）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課，2004）。

【保護対策】採食場所である河川や水田、干潟等の湿地の保全が望ましい。

【引用文献】千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／桑原（2009）／桑原・三沢ら（2006）／桑原・鈴木ら（2001）／桑原・中川（1998）

【写真】2006年10月16日。長生村／高島斎二

（桑原和之）



ツルシギ

B アカアシシギ シギ科*Tringa totanus* (Linnaeus, 1758)国：絶滅危惧Ⅱ類（VU）
千：D-D-B

【種の特性】干潟や海岸に近い水田、湿原等の湿地に生息する。昆虫、ゴカイ類などの小動物を捕食する。繁殖は小集団で行う。水に近い草の中の地上に営巣する。1巣に4卵を産む。雄雌が23-25日間抱卵する。育雛期間は約1か月で、繁殖の終了とともに南へ渡り越冬する。

【分布】ヨーロッパ、中央アジア、モンゴル、中国、ウスリー地方など広い範囲で繁殖する（Hayman et al., 1986）。アフリカ、アラビア、インド、東南アジア、フィリピン、スンダ列島などに渡り越冬する。湿地や草原の減少が繁殖個体群に圧迫を与えている。北海道東部で少数が繁殖する。国内では渡りの途中に見られる。本州、四国、九州、伊豆諸島などで見られる。南西諸島では渡りの時期だけではなく、越冬期にも見られる。

【県内の状況】旅鳥。少ない（藤岡ら，1997a; b; 1998a; b; 1999）。休耕田、河川敷、干潟、海岸などの湿地で1-2羽で見られるにすぎない。谷津干潟、小櫃川河口、新浜、印旛沼、利根川周辺の水田などから数例が知られる（桑原・石川ら，1999; 箕輪ら，1999）

【保護対策】休耕田、内陸湿地、塩性湿地や干潟などの渡りの中継地の保護が望ましい。

【引用文献】藤岡ら（1997a）／藤岡ら（1997b）／藤岡ら（1998a）／藤岡ら（1998b）／藤岡ら（1999）／Hayman et al.（1986）／桑原・石川ら（1999）／箕輪ら（1996）

【写真】2006年9月16日。長生村 一宮川河口／高島斎二

（桑原和之）



アカアシシギ

B タカブシギ シギ科*Tringa glareola* Linnaeus, 1758国：掲載なし
千：無－B－B

【種の特性】水田や湿地で採食する（桑原，2009）。近年、個体数が減少している（桑原・中川，1998）。

【分布】ヨーロッパから極東地域で繁殖する。冬期には南に渡る。主にアフリカから、南アジア、東南アジアで越冬する。国内では旅鳥もしくは冬鳥。南西諸島では普通に越冬する。個体数は少ない。

【県内の状況】旅鳥。主に春と秋の渡りの時期に見られる。少数が越冬していたが、近年、越冬の記録は極く少ない。渡りの時期、東京湾岸や九十九里地域、利根川水系の湿地で見られていたが、減少した。秋の渡りの時期、市川市行徳付近では1966年9月4日に325羽も見られており、その他の観察日でも300羽前後の記録があった（高野，1962）。習志野市谷津干潟周辺でも見られていた（桑原・石川ら，1999）。現在、東京湾奥部の湿地では稀である。県内での個体数は少ない。千葉県では最重要保護生物（A）に選定されている（千葉県環境局環境保全全部環境保全推進課，2004）。

【保護対策】採食場所である水田等の湿地の保全が必要である。

【引用文献】千葉県環境局環境保全全部環境保全推進課（2004）／桑原（2009）／桑原・石川ら（1999）／桑原・中川（1998）／高野（1962）

【写真】2008年9月15日。成田市野馬込／菅 景成

（桑原和之）



タカブシギ

B ベニアジサシ カモメ科*Sterna dougallii* Montagu, 1813国：絶滅危惧Ⅱ類（VU）
千：C－C－B

【種の特性】中型のアジサシ。主に魚類を捕食する。岩礁や砂浜に密度の高い集団繁殖地を形成する。地面に営巣する。貝殻、小石や枯葉を集めた簡単な巣を造る。

【分布】北アメリカ東岸・西インド諸島・イギリス・インド洋・東南アジア・オーストラリア等で繁殖する。高緯度地方で繁殖する個体は、赤道付近の熱帯海域に渡り越冬する。越冬地の詳細は不明である。国内では夏鳥。奄美諸島や南西諸島で繁殖する。近年、有明海にある人工島でも繁殖が確認された。繁殖地が北上している。コアジサシのコロニーでも観察されることがある（桑原，2006）。

【県内の状況】主に夏期に見られる。広い干潟では、コアジサシやアジサシの群れの中で見られる（桑原・箕輪・田村・白田，2000）。砂浜などでも観察される（桑原・奴賀ら，2008）。三番瀬（桑原・田中ら，1994）と小櫃川河口（箕輪ら，1999）などで記録がある。東京湾岸ではコアジサシのコロニーが減少したため、観察例数が減少している。

【保護対策】コアジサシのコロニーの保護が望ましい。渡りの中継地として干潟や浅瀬の現状維持が望ましい。

【引用文献】桑原（2006）／桑原・田中ら（1994）／桑原・箕輪・田村・白田（2000）／桑原・奴賀ら（2008）／箕輪ら（1999）

【写真】2006年7月26日。山武郡横芝光町 木戸浜海水浴場／長屋ゆみ子

（桑原和之）



ベニアジサシ

B マダラウミスズメ ウミスズメ科

Brachyramphus marmoratus (Gmelin, 1789)

国：情報不足 (DD)

千：D-B-B

【種の特性】 約25 cm。雌雄同色。ウミスズメとほぼ同大である。ウミスズメ類では、体型は全体的に細く長く見える。細く長い嘴は、黒色である。夏羽では上面は黒褐色、褐色の羽毛が全身にありうろこ模様に見える。冬羽では上面は黒褐色で首、胸から下面は白色である。周年、肩に長い白斑がありよく目立つ。大きなコロニーは形成しないで、内陸の針葉樹林帯で繁殖する (Birkhead, 1985)。針葉樹の高木や林内の岩場などで営巣する。

【分布】 北太平洋に広く分布する。オホーツク海沿岸から、千島列島、カムチャッカ半島、アラスカ半島、カナダ沿岸等に分布する (寺沢・小野, 1996)。夏期、北海道東部の海上で少数が観察され、内陸での記録もある。繁殖期の詳細は不明である。冬期、全国の海上で記録がある。主に北日本の海上で越冬する (竹田ら, 2001)。九州や沖縄などの海上でも観察されている。

【県内の状況】 東京湾でも数多く記録されていたようである。近年の記録は少ない (石黒ら, 2000)。外房でも稀に記録される。ウミスズメよりも少ない (奴賀・桑原, 2001)。九十九里浜でも冬期に記録される (奴賀ら, 2006)。越冬の状況は不明である。

【保護対策】 越冬地の環境を良好に維持することが望ましい。刺し網、流し網などによる混獲、重油流出やレジンペレット等海洋汚染による被害が各地で報告されている。ウインドサーフィンや小型船舶等のレジャーによる攪乱も多いため、本種の生息域への侵入防止等の規制も必要である。レジャーによる海岸の利用の制限も必要である。

【引用文献】 Birkhead (1985) / 石黒ら (2000) / 奴賀・桑原 (2001) / 奴賀ら (2006) / 竹田ら (2001) / 寺沢・小野 (1996)

【写真】 2007年12月16日。一宮町 一宮海岸 / 坂東俊輝
(桑原和之・竹田伸一)



マダラウミスズメ

B ウミスズメ ウミスズメ科

Synthliboramphus antiquus (Gmelin, 1789)

国：絶滅危惧ⅠA類 (CR)

千：B-B-B

【種の特性】 全長約25 cm。雌雄同色。夏羽では頭、喉が黒色、背は灰色、翼は黒褐色。頬、胸、腹は白色、嘴はクリーム色、足は青灰色。冬羽では喉が白色である。体の割りに大きな卵を産む (Harris & Birkhead, 1985)

【分布】 北太平洋に広く分布する。オホーツク海沿岸から、千島列島、カムチャッカ半島、アリューシャン列島、アラスカ半島などで繁殖する (寺沢・小野, 1996)。冬期はやや南へ渡る。夏期、北海道天売島や岩手県三貫島で繁殖し周辺海上に見られる。ただし、繁殖地の状況は調べられていない。冬期はやや南下する。ウミスズメの仲間では最も普通に見られる (竹田ら, 2001)。主に北海道、本州北部沿岸海上に見られる。本州南部、九州、沖縄でも少数が稀に見られる。

【県内の状況】 冬鳥。東京湾で普通に越冬していた。少なくなかったが、近年の記録少ない (石黒ら, 2000; 箕輪・桑原・嶋田, 1999)。ウミスズメの仲間では外房でも最も普通に見られる (奴賀・桑原, 2001)。九十九里浜でも冬期に記録される (奴賀ら, 2006)。稀に内陸でも記録される (佐藤・桑原, 2007)。越冬期の生息状況は不明である。

【保護対策】 越冬地の環境を良好に維持することが望ましい。刺し網、流し網などによる混獲、重油流出やレジンペレット等海洋汚染による被害が各地で報告されている。ウインドサーフィンや小型船舶等のレジャーによる攪乱も多いため、本種の生息域への侵入防止等の規制も必要である。レジャーによる海岸の利用の制限も必要である。

【引用文献】 Harris & Birkhead (1985) / 石黒ら (2000) / 箕輪・桑原・嶋田 (1999) / 奴賀・桑原 (2001) / 奴賀ら (2006) / 佐藤・桑原 (2007) / 竹田ら (2001) / 寺沢・小野 (1996)

【写真】 2007年12月21日。岬町太東 太東漁港 / 坂東俊輝
(桑原和之・竹田伸一)



ウミスズメ

B シラコバト ハト科*Streptopelia decaocto* (Frivaldszky, 1838)

国：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

千：C-C-B

【種の特性】農村から住宅地に生息する。農家・畑・樹林等が混在するような環境で生活する。森林内で確認されることは少ない。畑や稲刈り後の水田・畦道等、開けた地上で採食する。主に穀類等の植物の種子を採食する。季節的な移動は少ない。非繁殖期には小群を形成する。

【分布】ヨーロッパからインドにかけてのユーラシア大陸南部、中国の一部から朝鮮半島に分布する。3亜種に分けられている。国内には、亜種シラコバト *S.d.decaocto* が分布する（日本鳥学会目録編集委員会，1997）。かつては、埼玉県越谷市を中心とした埼玉県東南部から千葉県にかけ、関東平野の一部だけに分布していた（三島，1957c）。飼育されていた個体が野外で観察されたと思われる例も報告されている（平野，2010）。

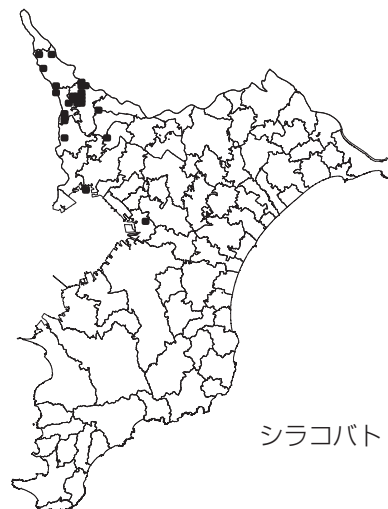
【県内の状況】千葉県内では一時絶滅したが、その後、個体数が増えた（埼玉県教育委員会ら，1982）。千葉県南行徳町では1950年或は1951年に繁殖した（三島，1957c）。1956年以降、分布域が拡大し、各地に定着した。北西部の野田・松戸・柏・流山各市で繁殖する（浅川・桑原，1999；野田野鳥同好会，1991）。周辺の市町村でも記録がある（青木ら，1992；桑原ら，1994）。ただし、1980年代以降、分布域は拡大していない。現在、個体数は減少している。

【保護対策】農村地帯の生息地の保全が望ましい。

【引用文献】青木ら（1992）／浅川・桑原（1999）／平野（2010）／桑原ら（1994）／三島（1957c）／日本鳥学会目録編集委員会（1997）／野田野鳥同好会（1991）／埼玉県教育委員会ら（1982）

【写真】2004年2月21日。松戸市新松戸／中込 哲

（桑原和之・高木 武）



シラコバト

B アオバト ハト科*Sphenurus sieboldii* (Temminck, 1835)

国：掲載なし

千：B-B-B

【種の特性】緑色のハト類。森林で生活する。木の実を採食する。繁殖期、海岸で海水を飲む行動が見られる。

【県内の状況】周年見られる。房総丘陵では繁殖期にも確認されている（青木，1994；青木・桑原，1994）。ただし、千葉県内では繁殖は確認されていない。外房海岸では、（6－8月）に海岸で見られる（奴賀ら，1998；奴賀ら，2003）。渡りの時期、各地で記録がある（桑原ら，1994）。

【保護対策】生息地である房総丘陵の森林の保全が望ましい。周年の記録があるが、生息状況が明らかでない。生息状況を精査する必要がある。

【引用文献】青木（1994）／青木・桑原（1994）／桑原ら（1994）／奴賀ら（1998）／奴賀ら（2003）

【写真】2006年12月15日。習志野市 谷津干潟自然観察センター／佐藤捨吉

（桑原和之）



アオバト

B オオコノハズク フクロウ科*Otus lempiji* (Horsfield, 1821)国：掲載なし
千：B-B-B

【種の特性】 小型のフクロウ。森林性で発達した広葉樹林に生息する。夜行性で日中の確認が難しい。ネズミ・ヒメズ等の小型哺乳類を主に捕食する。大木の樹洞で繁殖する。

【分布】 ロシアのウスリー地方から中国、朝鮮半島、台湾、東南アジアに分布する。北方で繁殖する個体は南へ移動し越冬する。島嶼では固有亜種が多く記載され、20亜種以上に分けられている。国内では全国で繁殖する。北日本や高地で繁殖する個体は、冬期、暖地や低地に移動する。本種に関する観察例や報告が少ない。繁殖地など分布状況はまだ解明されていない。

【県内の状況】 亜種オオコノハズク *O.l.semitorques* が分布するとされる。非繁殖期に少数が観察される（桐原・桑原，1998；2000）。繁殖はまだ確認されていない。観察記録は少なく、稀である（桑原・和仁ら，1997）。渡りの時期にも記録される（桑原・三沢ら，2006）。個体数等の生息状況はほとんど解明されていないが、近年県内で保護される例数などは減少している。

【保護対策】 森林の減少や植林地の拡大により、おそらく生息環境は悪化している。生息地、越冬地の保全が望ましい。密猟や野鳥写真撮影愛好家による心無い攪乱が予想される。生息地に関する情報の取扱いには細心の注意が必要である。

【引用文献】 桐原・桑原（1998）／桐原・桑原（2000）／桑原・和仁ら（1997）／桑原・三沢ら（2006）

【写真】 1991年1月13日。千葉市美浜区美浜／米持千里

（桑原和之・高木 武）

**B フクロウ フクロウ科***Strix uralensis* Pallas, 1771国：掲載なし
千：B-B-B

【種の特性】 夜行性の猛禽である。平地から山地の森林に生息する。主にネズミ類・モグラ類等の小型哺乳類を捕食する。小型の鳥類や昆虫、両生類等も捕食する。大木の樹洞で繁殖する。地上に産卵することもある。

【分布】 ユーラシア大陸の温帯・亜寒帯地域に広く分布する。国内では留鳥。九州以北に生息する。4亜種に分けられている。

【県内の状況】 留鳥。周年見られる。各地に分布する。稀に市街地でも見られる（桑原・和仁ら，1997）。県北部では亜種モミヤマフクロウ *S.u.momiyamae*、南部では亜種 キュウシュウフクロウ *S.u.fuscescens* が繁殖するとされている（日本鳥学会，1974；2000）。千葉県内ではこの2亜種の分布の詳細は不明である。森林、社寺林や屋敷林の樹洞で繁殖する。房総丘陵には全域に分布する（富谷，1999）千葉県では最重要保護生物（A）に選定されている（千葉県環境局環境保全部環境保全推進課，2004）。

【保護対策】 繁殖地の保全が望ましい。営巣可能な大木の保全も必要である。違法捕獲等も少なくないため、密猟の取り締まりも望まれる。写真撮影の対象となる可能性が高く、野鳥写真撮影愛好家による心無い攪乱が予想される。観察者が集中し悪影響を与える可能性があるため、繁殖地への立ち入りなどの制限が必要となる。密猟や繁殖妨害回避のため、繁殖地情報の取扱いには細心の注意が必要である。

【引用文献】 千葉県環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／桑原・和仁ら（1997）／日本鳥学会（1974）／日本鳥学会（2000）／富谷（1999）

【写真】 2009年5月12日。白子町／高島齋二

（高木 武・桑原和之）



B ヤマセミ カワセミ科*Ceryle lugubris* (Temminck, 1834)国：掲載なし
千：B-B-B

【種の特性】日本産カワセミ類の中で最も大きい。主に山地の渓流や湖沼畔に生息する。警戒性は強い。水中に飛び込み魚類を捕食する（神保ら、1986）。垂直な土の崖に横穴を掘り営巣する（西村、1979）。周年、同じ地域に生息するが、厳冬期に移動する個体もいる。渡りの時期には、河川中流域や平野部で見られることもある。

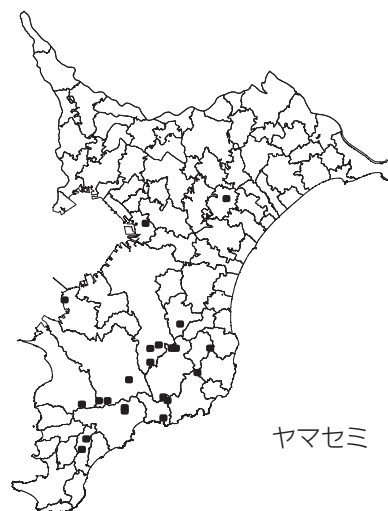
【分布】東アジアの山地帯に分布する。北海道で亜種エゾヤマセミ *C.l.pallida*、本州、四国、九州で亜種ヤマセミ *C.l.lugubris* が繁殖する（日本鳥学会、1974; 2000）。

【県内の状況】留鳥。標高が低い千葉県内では、ヤマセミの生息域は限られている。個体数は少ない。房総半島南部の山地渓流に生息する（千葉県環境部自然保護課、1986; 1994）。君津市や市原市等の山間部で見られる（青木、1994; 千葉県教育委員会、1999; 2000）。極稀に海岸部で見られることがある（箕輪ら 1999; 2000）。レジャーによる河川の利用が増加したため、減少した（千葉県史料研究財団、2002）。房総丘陵は、周辺都県の山地帯から孤立しており、個体数の少ない本種の絶滅の危険性は高い。

【保護対策】生息地である渓流の保全が望ましい。レジャーによる河川の利用の制限も必要である。

【引用文献】青木（1994）／千葉県環境部自然保護課（1986）／千葉県環境部自然保護課（1994）／千葉県教育委員会（1999）／千葉県教育委員会（2000）千葉県史料研究財団（2002）／神保ら（1986）／箕輪ら（1999）／箕輪ら（2000）／西村（1979）／日本鳥学会（1974）／日本鳥学会（2000）

【写真】2006年10月27日。市原市 養老溪谷／田中義和
（高木 武・桑原和之）



ヤマセミ

B コシアカツバメ ツバメ科*Hirundo daurica* Linnaeus, 1771国：掲載なし
千：B-B-B

【種の特性】ツバメより尾羽が長い。腰は淡い褐色の羽色を示す。人家の軒下やビルに集団で営巣する。ツバメの巣と異なるとっくり状の巣を造る。

【分布】南ヨーロッパ、北アフリカ、地中海沿岸、アジアで繁殖する（Turner & Rose, 1989）。冬期は南に渡る。9亜種が知られる。夏鳥。国内では亜種コシアカツバメ *H. d. japonica* が分布する。繁殖地の分布は局地的である。九州以北で繁殖する。東日本では多くない。東北地方から北では少ない。冬期は南に渡る。

【県内の状況】夏鳥。外房では、春から秋にかけて見られる。漁港等に営巣する（桑原、2006b）。内房から外房にかけて営巣が確認されている（桑原・三沢ら、2006; 奴賀ら、2006）。銚子市でも営巣例がある（桑原・三沢ら、2006）。渡りの時期に各地でみられる（箕輪ら、2005）。近年、個体数や営巣数が減少している（千葉県史料研究財団、2002）。千葉市内では、1938-40年に千葉駅前で営巣が確認されていた。その後、繁殖記録は報告されていない（白井、1953）。1990年以降は、渡りの時期に千葉県立中央博物館生態園で観察されている（桑原、1997a）。茂原市内でも茂原駅周辺で、1973年10月10日に使われている巣が10巣以上確認されている。上総一ノ宮駅周辺でも1983年8月28日に巣が記録されているが、1980年代の繁殖は確認されていない。ヒメアマツバメやスズメに巣を横取りされ、繁殖を放棄する例も多い。千葉県北部では観察記録は少ない（我孫子野鳥を守る会、1994）。

【保護対策】人家やビル、漁港などに営巣するため、人為的な繁殖の攪乱がある。人家やビル、漁港などの所有者・管理者や住民の理解が重要である。

【引用文献】我孫子野鳥を守る会（1994）／千葉県史料研究財団（2002）／桑原（1997a）／桑原（2006b）／桑原・三沢ら（2006）／箕輪ら（2005）／奴賀ら（2006）／白井（1953）／Turner & Rose（1989）

【写真】2005年6月17日。いすみ市 大原漁港／高島斎二
（桑原和之・富谷健三）



コシアカツバメ

B キセキレイ セキレイ科*Motacilla cinerea* Tunstall, 1711国：掲載なし
千：C-B-B

【種の特性】主に河川の中流から上流域に生息する。繁殖期、平地から標高2,000m以上の高地にまで分布する。岩の間や崖の窪み・人工建造物の隙間等に営巣する。

【分布】ユーラシア大陸の温帯から亜寒帯とアフリカ大陸の北部及びサハラ砂漠以南で繁殖する。高緯度地方で繁殖する個体は、温暖な地域へ渡り越冬する。九州以北で繁殖する。北日本や高地で繁殖する個体は、南へ渡り越冬する。各地で個体数が激減している。

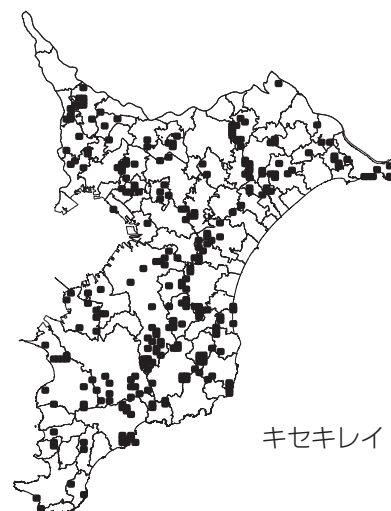
【県内の状況】留鳥。個体数は多くない。房総半島南部の山地渓流に生息する（千葉県環境部自然保護課，1986；1994）。梅ヶ瀬渓谷では繁殖期に見られる（越川，2003）。丘陵地から山地の渓流で繁殖する（千葉県史料研究財団，2002）。越冬期には各地の湿地で見られる（箕輪ら，2005）。渡りの時期には海岸などでも見られる（箕輪ら，1996）。千葉市では重要保護生物（B）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課，2004）。

【保護対策】繁殖地の渓流と越冬地となる湿地の環境保全が望ましい。可能な限り中州・砂州・砂礫地の保全も必要である。

【引用文献】千葉県環境部自然保護課（1986）／千葉県環境部自然保護課（1994）／千葉県史料研究財団（2002）／千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／越川（2003）／箕輪ら（1996）／箕輪ら（2005）

【写真】2008年1月6日。市原市石塚／加藤恵美子

（桑原和之）



キセキレイ

B オオルリ ヒタキ科*Cyanoptia cyanomelana* (Temminck, 1829)国：掲載なし
千：B-B-B

【種の特性】渓谷、沢筋の林に生息する。低山帯から亜高山の谷沿いの落葉広葉樹林で繁殖する。目立つ梢にとまり、長時間囀る。姿、声ともに美しいことから、全国各地で飼養目的の密猟が絶えない。コケを多用した椀型の巣を土崖の窪みに造る。建造物の隙間に営巣することもある。

【分布】アムール、ウスリー、中国東北部、朝鮮半島、日本等で2亜種が繁殖する（del Hoyo et al., 2006）。台湾、東南アジア、フィリピン等で越冬する（Wells, 2007）。国内では夏鳥。九州以北の山地で繁殖する。

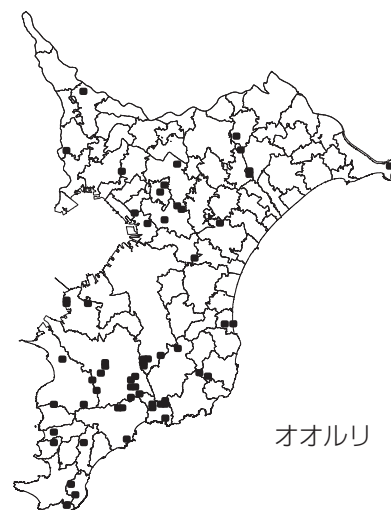
【県内の状況】夏鳥。個体数は少ない。南房総の各地で見られる（南房総動植物調査団，1990）房総丘陵の市原市・君津市・鴨川市・大多喜町等で繁殖している（青木，1992）。養老川、小糸川源流部を中心とした地域で見られる（青木・桑原，1994）。渡りの時期には、県内各地で少数が観察される（原田ら，1995；箕輪ら，1996；1999；2000）。

【保護対策】繁殖地である渓谷沿いの落葉広葉樹林の保全が望ましい。森林の連続性を維持することが望ましい。メジロ、ヤマガラやホオジロ等と同様の密猟が行われている可能性が高い。違法捕獲による密猟等の取り締まりの徹底が望まれる。

【引用文献】青木（1992）／青木・桑原（1994）／原田ら（1995）／del Hoyo et al.（2006）／南房総動植物調査団（1990）／箕輪ら（1996）／箕輪ら（1999）／箕輪ら（2000）／Wells（2007）

【写真】2009年5月26日。君津市三石山／加藤恵美子

（桑原和之・戸田光彦）



オオルリ

C カイツブリ カイツブリ科*Tachybaptus ruficollis* (Pallas, 1764)国：掲載なし
千：C-C-C

【種の特性】 河川や湖沼に生息する。海岸では稀である。「キリリリリー」と大きな声で鳴く（桑原，2010b）。潜水して魚類・水生昆虫・甲殻類等の小動物を捕食する。繁殖期には、ヨシ等の間の水面に水草等を積み上げ営巣する。人工物を利用することもある（Hiraoka, 1996）。

【分布】 ヨーロッパ、アフリカ、アジアにかけ広く分布する。国内では全国に分布する。北日本や高地で繁殖する個体は、冬期、暖地に移動し越冬する。

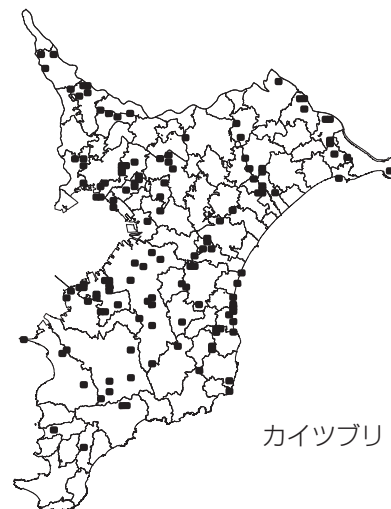
【県内の状況】 千葉県内では、水辺に広く生息する（千葉県，1976；千葉県環境部自然保護課，1986；千葉県環境部自然保護課，1994）。各地の水辺で繁殖する。冬期、越冬個体数が増加する地域がある（箕輪ら，2005）。河川、湖沼や貯水池の改修により、水際の植物帯が消失したため、営巣場所の減少が著しい。千葉市では要保護生物（C）に選定されている（千葉市環境局環境保全全部環境保全推進課，2004）。

【保護対策】 生息地である河川や湖沼の環境を良好に維持することが望ましい。生息可能な環境を保全し、生息地の回復を試みることも必要である。

【引用文献】 千葉県（1976）／千葉県環境部自然保護課（1986）／千葉県環境部自然保護課（1994）／千葉市環境局環境保全全部環境保全推進課（2004）／Hiraoka（1996）／桑原（2010b）／箕輪ら（2005）

【写真】 2006年2月28日．松戸市千駄堀 21世紀の森と広場／中込哲

（桑原和之・高木 武）



カイツブリ

C ヒメウ ウ科*Phalacrocorax pelagicus* Pallas, 1811国：絶滅危惧ⅠB類（EN）
千：C-C-C

【種の特性】 ウミウより小さい。外海に面した海岸に多く、内湾では少ない。淡水域では稀である。潜水して魚類や甲殻類を捕食する。外海岸の海蝕崖、断崖の岩棚に集団で営巣する。冬期は海蝕崖、断崖の岩棚でねぐらをとる。

【分布】 サハリン、千島列島、カムチャツカ半島、ベーリング海沿岸、北アメリカ北部の太平洋沿岸で繁殖する（Delany & Scott, 2006）。冬期は南に渡る。国内では留鳥。北海道、本州北部、九州の日本海沿岸で繁殖する。冬期は南に渡る。冬期、九州以北の沿岸で越冬する（箕輪，2007）。

【県内の状況】 冬鳥。多くない。主に外房海岸で見られる。銚子から白浜にかけての太平洋岸に飛来する。利根川下流部から銚子漁港などで数百羽が越冬する（桑原・三沢ら，2006）。九十九里海岸では多くない（奴賀ら，2006）。内房から富津岬にかけては少ない。東京湾内では稀である（桐原・桑原，1998）。東京湾奥部では極稀である。

【保護対策】 海岸の海食崖が浸食され、休息場所やねぐらとしての条件が劣化している。海岸の海食崖、岩場等の越冬地を良好に維持することが望ましい。テグスや釣り針などによる被害も少なくない。漁網等に巻き込まれることも考えられるため、留意が必要である。油流出事故の被害を受ける種でもあるため、油汚染への対策が望まれる。

【引用文献】 Delany & Scott（2006）／桐原・桑原（1998）／桑原・三沢ら（2006）／箕輪（2007）／奴賀ら（2006）

【写真】 2006年3月8日．いすみ市太東 太東漁港／高島斎二

（桑原和之）



ヒメウ

C ダイサギ サギ科

Egretta alba (Linnaeus, 1758)国：掲載なし
千：C-C-C

【種の特性】見通しの良い河川、湖沼、干潟、水田等の湿地で魚類、両生類、甲殻類等を捕食する。4－9月に一夫一妻で繁殖する。マツ林、雑木林、竹林等の樹上に枯れ枝を利用し、粗雑な皿形の巣を作る。3－5卵を産む。産まれた順に抱卵を始めるため、非同時孵化が起こる。コサギ、チュウサギ、アマサギ、ゴイサギ、アオサギ等他のサギ類と混生して、集団で繁殖する。非繁殖期にも集団でねぐらをとることが多い（行徳野鳥観察舎友の会、2005）。繁殖期、住宅地に隣接した集団繁殖地では、糞や餌の吐き戻しによる悪臭、雛や親鳥の大きな鳴き声に対し、近隣の住民より苦情が出されることがある。

【分布】世界中の熱帯、温帯で繁殖する。国内では2亜種が分布している。亜種チュウダイサギ *Egretta alba modesta* が、各地で繁殖する。チュウダイサギは、主に関東以西で繁殖する。冬期は南に渡る。大部分の個体は、フィリピン等の東南アジアへ移動し、越冬する。亜種ダイサギ *Egretta alba alba* は冬鳥。亜種ダイサギの飛来数は少ない。

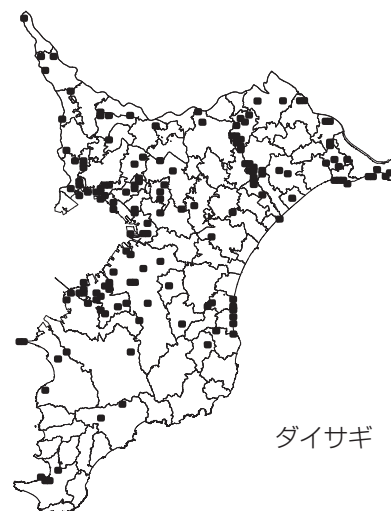
【県内の状況】留鳥。海岸から内陸に分布している。ほぼ全域で確認される。海岸では小櫃川など河川の河口や干潟、内陸では印旛沼などの湖沼や比較的大きな河川で見られる。コロニーでの営巣数はチュウサギに次いで多い（千葉県、2007）。印旛沼では繁殖期が終了した夏から秋にかけ、大きなねぐらを形成する（箕輪ら、2005）。千葉市では要保護生物（C）に選定されている（千葉市環境局環境保全全部環境保全推進課、2004）。

【保護対策】採食地である河川、干潟等の湿地といった水辺の保全が望ましい。住宅地に隣接した集団繁殖コロニーでは、安易に営巣木を伐採しないよう配慮することが望ましい。

【引用文献】千葉県（2007）／千葉市環境局環境保全全部環境保全推進課（2004）／行徳野鳥観察舎友の会（2005）／箕輪ら（2005）

【写真】左：ダイサギ。2004年8月14日。市川市福栄 千葉県行徳鳥獣保護区／山口 誠

（桑原和之・安齊友巳）



ダイサギ

C コサギ サギ科

Egretta garzetta (Linnaeus, 1758)国：掲載なし
千：C-C-C

【種の特性】河川、湖沼、沼沢地、水田、海岸、干潟、潮間帯湿地、塩性湿地、河口域等の湿地、水辺に見られる。ドジョウ、フナなどの魚類、カエル類やアメリカザリガニなどを餌とする。泥の中で足をかき回し魚等の小動物を追い出して捕食する動作も見られる。4－9月に一夫一妻で繁殖する。マツ林、雑木林、竹林等の樹上に枯れ枝を利用し、粗雑な皿形の巣を作る。4－7卵を産む。抱卵は初卵の直後に始まるため、非同時孵化が起こる。ダイサギ、チュウサギ、アマサギ、ゴイサギ、アオサギ等他のサギ類と混生して、集団で繁殖する。非繁殖期にも集団でねぐらをとることが多い（行徳野鳥観察舎友の会、2005）。繁殖期、住宅地に隣接した集団繁殖地では、糞や餌の吐き戻しによる悪臭、雛や親鳥の大きな鳴き声に対し、近隣の住民より苦情が出されることがある。

【分布】アジア、オーストラリア大陸、アフリカ大陸の温帯から熱帯にかけて広く分布する。国内では留鳥。本州から九州までの各地で繁殖する（環境庁、1981）。冬期、一部は南へ渡る。

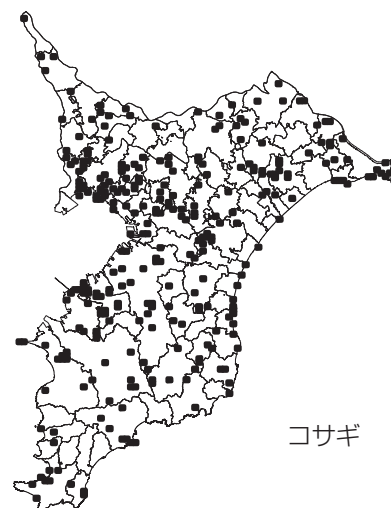
【県内の状況】個体数が著しく減少している留鳥。サギ類の中では最も広く分布する。海岸から内陸の湿地、ほぼ全域に分布する。集団繁殖地は野田市、我孫子市、成田市、市川市、八街市、野栄町、旭市、銚子市、市原市、木更津市、夷隅町、館山市、一宮町等で確認されている。コロニーでの営巣数はそれほど多くない（千葉県、2007）。繁殖期が終了した夏から秋にかけ、大きなねぐらを形成する（箕輪ら、2005）。冬期は個体数が少ない。館山市では、しばしば地域住民や林業、水産業への影響が生じ、繁殖地の分散や駆除対策が講じられていた。千葉市では重要保護生物（B）に選定されている（千葉市環境局環境保全全部環境保全推進課、2004）。

【保護対策】採食地である水田、河川、干潟等の湿地といった水辺の保全が望ましい。住宅地に隣接した集団繁殖コロニーでは、安易に営巣木を伐採しないよう配慮することが望ましい。

【引用文献】千葉県（2007）／千葉市環境局環境保全全部環境保全推進課（2004）／行徳野鳥観察舎友の会（2005）／環境庁（1981）／箕輪ら（2005）

【写真】2009年5月28日。旭市井戸野／山口 誠

（桑原和之・安齊友巳）



コサギ

C クロサギ サギ科

Egretta sacra (Gmelin, 1789)国：掲載なし
千：C-C-C

【種の特性】羽色が黒色型と白色型の2型がある。本州から種子島周辺以北は黒色型が多い。南西諸島以南は白色型の割合が増す。本州で白色型は多くない。岩場の多い海岸や珊瑚礁で魚類、カニなどの甲殻類、貝類などを捕食する。4-9月に一夫一妻で繁殖する。岩礁海岸の岩棚や岩場に生える低木に皿形の巣を造る。3卵程を産む。他のコサギ*Egretta* 属のサギ類とは異なり、集団で繁殖しない。

【分布】中国南部からオーストラリア、ニュージーランドの沿岸地域に分布する。国内では留鳥。本州以南の海岸に分布する。1950年代まで、日本海側では佐渡島、太平洋側では房総半島が北限とされ、主な繁殖地は本州中部以南といわれていた（清棲, 1952）。秋田県男鹿市で繁殖が確認され、東北各地でも記録が増え、繁殖分布は北上した（環境庁, 1981）。

【県内の状況】館山市の鷹の島、勝浦市鵜原、銚子市屏風ヶ浦等の岩礁海岸で生息が確認されている（千葉県, 1976；箕輪ら）。南房総市富浦町等で繁殖が確認されている（鈴木, 1984; 1988）。

【保護対策】本種の営巣地となる岩場の保全が望ましい。営巣地となっている岩場等に人が容易に近づけないよう配慮することも望まれる。釣り針を呑み込むことがあるため、釣り人への啓発等も必要である。

【引用文献】千葉県（1976）／環境庁（1981）／清棲（1952）／箕輪ら（2005）／鈴木（1984）／鈴木（1988）

【写真】2006年8月26日. 天津小湊町（現：鴨川市）／高島斎二
（桑原和之・安齊友巳）



クロサギ

C オカヨシガモ カモ科

Anas strepera Linnaeus, 1758国：掲載なし
千：C-C-C

【種の特性】主に淡水の湖沼、河川、湿地に生息する。内陸部よりも沿岸部の湖沼に多い。主に植物食であるが、水生の小動物等も採食する。繁殖期は5-7月で地上の草むらに営巣する。非繁殖期にも大群ではなく、10-40羽程度の小群で行動する。

【分布】ヨーロッパ、シベリア、北アメリカの亜寒帯で繁殖する。温帯からインド・アフリカ等熱帯の一部に渡り、越冬する。国内では本州以南に冬鳥として飛来する。国内での繁殖の報告は少ない。北海道の数ヶ所と千葉県の東京湾岸の埋立地が、繁殖地である可能性がある（環境庁, 1981）。

【県内の状況】大部分の地域では冬鳥。他のマガモ*Anas* 属の種と比べ、個体数は多くない。県内では、局所的に繁殖する。1987年に千葉市幕張埋立地で初めて繁殖が確認された（桐原・桑原, 1998; 2000）。1988年には、新浜水鳥保護区でも雛が確認された（蓮尾, 1990; 市立市川自然博物館, 1993）。その後、1996年に習志野市谷津干潟でも繁殖した（Shimada, et al., 2002）。習志野市谷津干潟では1996年から1999年まで一つがいが越冬している（桑原ら, 1999）。越冬期には、東京湾岸や手賀沼（柿沢, 1988）、印旛沼等で見られる（小野・桑原ら, 1990）。千葉市では要保護生物（C）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課, 2004）。

【保護対策】繁殖地が局地的な分布である。繁殖個体群の保護には、繁殖地である湿地の保全が望ましい。

【引用文献】千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／蓮尾（1990）／柿沢（1988）／環境庁（1981）／桐原・桑原（1998）／桐原・桑原（2000）／桑原ら（1999）／箕輪ら（2005）／小野・桑原ら（1990）／Shimada, et al.（2002）／市立市川自然博物館（1993）

【写真】2007年12月24日. 習志野市芝園地先／岡 典弘
（桑原和之）



オカヨシガモ

C ツミ タカ科

Accipiter gularis (Temminck et Schlegel, 1844)

国：掲載なし
千：B-B-C

保護上重要な脊椎動物

哺乳類

鳥類

爬虫類
両生類

魚類

【種の特性】タカ類。日本産タカ類の中で最も小さい。メスはおよそハト位、オスはヒヨドリ位の大きさである。平地から亜高山の森林に生息する。主にスズメ程の大きさの鳥類を捕食する（平野・君島，1997；植田，1992a）。アカマツやモミヤスギ等に営巣する。5月上旬に3-5卵を産む。

【分布】亜種ツミ *A.g.gularis* は、サハリン、クリル諸島から日本で繁殖する。冬期は南に渡る。中国南東部、東南アジアで越冬する。亜種リュウキュウツミ *A.g.iwasakii* は、留鳥。石垣島、西表島、与論島で繁殖する。かつては、非常に稀な種とされていた。近年、ほぼ全国的に繁殖していることが確認された（遠藤ら，1991）。市街地や都市公園等の営巣例もある（植田，1992b；1996）。越冬期の分布や生息状況に関しては、不明な点が多い。

【県内の状況】千葉県では1970年以前は、時々見られていたようである（千葉県，1976）。現在は、主に夏鳥として飛来する。各地で繁殖する。個体数は少ない。一部の地域で越冬期に見られている。越冬の報告はない。越冬期の生息状況については不明である。旅鳥としても主に秋の渡りの時期、各地で記録される。松戸市で繁殖記録がある。1990年と1991年に市川市の小塚山市民の森では繁殖活動が観察されたが、2年とも失敗している（市立市川自然博物館，1993）。千葉市では重要保護生物（B）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課，2004）。

【保護対策】繁殖地の保全が望ましい。営巣可能な大木の保全も必要である。違法捕獲等も懸念されるため、密猟の取り締まりも望まれる。写真撮影の対象となる可能性が高く、野鳥写真撮影愛好家による心無い攪乱が予想される。観察者が集中し悪影響を与える可能性があるため、繁殖地への立ち入りなどの制限が必要となる。密猟や繁殖妨害回避のため、繁殖地情報の取り扱いには細心の注意が必要である。

【引用文献】千葉県（1976）／千葉市環境局環境保全部環境保全推進課，2004）／遠藤ら（1991）／平野・君島（1997）／市立市川自然博物館（1993）／植田（1992a）／植田（1992b）／植田（1996）

【写真】2009年4月28日。市原市／加藤恵美子

（桑原和之・高木 武）



C ノスリ タカ科

Buteo buteo (Linnaeus, 1758)

国：掲載なし
千：C-C-C

【種の特性】タカ類。トビよりやや小さい。小型哺乳類、鳥類、両生類、爬虫類、昆虫類等の小動物を捕食する（石沢・千羽，1967）。山地の森林で繁殖する。耕作地のネズミ類を捕食する。

【分布】ユーラシア大陸の温帯から亜寒帯域とアフリカの一部で繁殖する。高緯度地方で繁殖する個体は、温暖な地域に渡り、越冬する。国内では留鳥・冬鳥。北海道・本州・四国で繁殖する。冬期は各地で見られる。

【県内の状況】主に冬鳥。南部では周年記録される。各地に飛来する。冬期は、湖沼周辺、耕作地や河川敷等の湿地で見られる（箕輪ら，2005）。開発や耕作地の宅地化・市街地化により、越冬地は減少している。千葉市では要保護生物（C）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課，2004）。

【保護対策】繁殖地および越冬地の保全が望ましい。違法捕獲等も懸念されるため、密猟の取り締まりも望まれる。写真撮影の対象となる可能性が高く、野鳥写真撮影愛好家による心無い攪乱が予想される。観察者が集中し悪影響を与える可能性があるため、繁殖地への立ち入りなどの制限が必要となる。密猟や繁殖妨害を回避するため、繁殖地の情報の取り扱いには細心の注意が必要である。

【引用文献】千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／石沢・千羽（1967）／箕輪ら（2005）

【写真】2010年1月6日。木更津市畔戸／加藤恵美子

（高木 武・桑原和之）



C ヤマドリ キジ科

Phasianus soemmerringii Temminck, 1830国：掲載なし
千：C-C-C

【種の特性】丘陵地から山地の林に生息する。樹林林床に生息する。主に植物の葉や種子等植物質の餌を採食する。昆虫類やカタツムリ等も捕食する。オス・メスともあまり鳴かないが、「ククク」または「コッココッコ」と鳴く。繁殖期は4-11月である。オスは翼を強くはばたかせて「ドドド…」と大きな音を出す。林内の岩の陰や木の根元等の地表を浅く掘り巣とする。草本類の茎や葉等を産座に利用する。7-10卵を産む。抱卵日数は約24日である。メスだけで抱卵および育雛を行う。孵化し、しばらくすると親とともに雛は巣を離れる。

【分布】日本特産種である。本州と四国、九州で繁殖する（黒田，1970）。季節的な移動はしない。

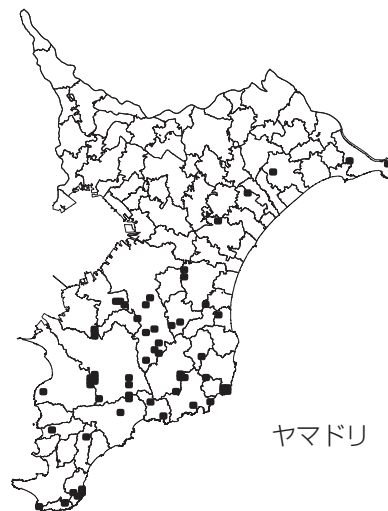
【県内の状況】留鳥。北部に亜種ヤマドリ *P.s.scintillans*、南部に亜種ウスアカヤマドリ *P.s.subrufus* の2亜種が分布するとされる（清棲，1952）。主に南部で繁殖する（千葉県環境部自然保護課，1990）。南部に記録が多い（桑原，2010c）。北部の平野部でも記録があるが、自然分布かどうかは不明である（小野・大槻ら，1990）。代表的な狩猟鳥であり、県内では年間数百羽が捕獲されている（環境庁自然保護局，1996；1997）。1990年以降は三芳猟区を除いて、2005年以降は県内全域で、1月16日-2月15日の期間オスの捕獲が禁止された。県内では1979年から人為的な放鳥が開始された。1985年以降は、毎年約200-600羽が放鳥されている（千葉県環境部自然保護課，1990）。現在、亜種ヤマドリと亜種ウスアカヤマドリの特徴を持つ個体がいるかどうか不明である。

【保護対策】1970年代までに乱獲と環境の荒廃により個体数が減少したという（千葉県，1976）。丘陵地や山地における森林の保全が望ましい。荒廃した植林地や薪炭林の適切な管理が求められる。放鳥事業の結果、亜種間の交雑が進行している可能性が高い。亜種の特定のための調査も必要である。

【引用文献】千葉県（1976）／千葉県環境部自然保護課（1990）／環境庁自然保護局（1996）／環境庁自然保護局（1997）／清棲（1952）／黒田（1970）／桑原（2010c）／小野・大槻ら（1990）

【写真】2009年5月19日。長生郡長柄町／川名年男

（箕輪義隆・桑原和之）



C クロヅル ツル科

Grus grus (Linnaeus, 1758)国：情報不足 (DD)
千：C-C-C

【種の特性】中型のツルの仲間。ミミズ・カエル・トカゲ等の小動物や植物の新芽・種子等を採食する。川沿いや湖沼畔の湿地で繁殖する。ツルについては、すでにアナハヅル、ソデグロヅルとクロヅルがヒマラヤを越える種として知られている（Donald, 1953; 茂田，1990b）。

【分布】中部ヨーロッパからシベリア東部までユーラシア大陸の中・高緯度地方の広い範囲で繁殖する。中国南東部・インド北部・アフリカ北部等に渡り、越冬する。2亜種に分けられている（Meine & Archibald, 1996）。日本国内には、クロヅル分布域の東部の亜種クロヅル *G.g.lilfordi* が渡来する。鹿児島県の出水地方では毎年マナヅル・ナベヅルの群に混じって1-数羽が確認される。その他の地域では、極めて稀な冬鳥または旅鳥である。

【県内の状況】現在、極めて稀に飛来する。1980年以降、2例の記録が残されている。1987年、白子町から大網白里町の水田での観察がある。2010年10月31日から11月2日、我孫子市北新田の水田（平山知男私信）で確認された。1987年11月8日から11日に白子町浜宿新田で記録された個体は、12月14日に大網白里町四天木で野犬に噛まれ、傷つき、保護されたが、死亡した（茂田・桑原，2001）。

【保護対策】飛来地は、水田地帯であることが多い。したがって、採食地とねぐらの確保のため広範な地域の保全が望ましい。飛来した個体が密猟に遭う危険性がある。また、観察者や写真撮影愛好家が集中し、悪影響を与えることがある。特に、餌付けが安易に行われ、警戒心が薄れることは、野犬等の被害に遭う一因となる。飛来情報の早期把握と適切な情報管理、および越冬地での保護対策が必要である。越冬個体および越冬地の保護に対する理解と協力を地権者、周辺住民から得ることが望ましい。

【引用文献】Meine & Archibald (1996)／Donald (1953)／茂田（1990b）／茂田・桑原（2001）

【写真】1987年。白子町浜宿／片岡寿夫

（桑原和之・茂田良光）



C ナベヅル ツル科

Grus monacha Temminck, 1835

国：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

千：C-C-C

【**種の特性**】 中型のツルの仲間。植物の種子、地下茎や昆虫類等を採食する。まばらに灌木の生えた湿原で繁殖する。越冬地では水田等の耕作地で採食し、湿田に集団で塒をとる（河村，1975）。

【**分布**】 ロシア極東地域のウスリー川の東側から、アムール川の北側地域、中国東北部の一部で繁殖が確認されている。繁殖分布は、まだ十分には把握されていない。朝鮮半島と長江流域でも少数が越冬する。生息総数は、9,000-10,000羽と推測される（Meine & Archibald, 1996）。地球上に生息するナベヅルのほとんどが日本に渡り、越冬する。鹿児島県出水地方で数千羽が越冬する。出水は、本種の世界最大の越冬地である。山口県、高知県でも少数が越冬する。その他の地方では、極めて稀な冬鳥または旅鳥である。

【**県内の状況**】 冬鳥。極めて稀である。明治時代には毎冬、現柏市内の水田に現れたという（千葉県，1976）。1910年1月に柏市で7羽の記録がある（斉藤，1968）。岬町椎木（現：いすみ市）で1995年12月下旬から1996年3月8日までナベヅル4羽が水田で越冬した（富谷健三 私信）。農業用堰をねぐらや休息地として利用した（千葉県史料研究財団，2002）。

【**保護対策**】 採食地とねぐらの確保のため広範な地域の保全が望ましい。飛来した個体が密猟に遭う危険性がある。また、観察者や写真撮影愛好家が集中し、悪影響を与えることがある。特に、餌付けが安易に行われ、警戒心が薄れることは、野犬等の被害に遭う一因となる。飛来情報の早期把握と適切な情報管理、および越冬地での保護対策が必要である。越冬個体および越冬地の保護に対する理解と協力を地権者、周辺住民から得ることが望ましい。

【**引用文献**】 千葉県（1976）／千葉県史料研究財団（2002）／河村（1975）／Meine & Archibald（1996）／斉藤（1968）

【**写真**】 1996年1月11日。岬町椎木（現：いすみ市）／富谷健三
（百瀬邦和・桑原和之）



C カナダヅル ツル科

Grus canadensis (Linnaeus, 1758)

国：掲載なし

千：C-C-C

【**種の特性**】 小型のツルの仲間。湿原や沼沢地で繁殖する。植物の種子・地下茎や、カエル・昆虫類等の小動物を採食する。

【**分布**】 シベリア北東部・北アメリカから中央アメリカで繁殖する（Meine & Archibald, 2002）。Delany & Scott（2006）では5亜種に分けられている。北方の2亜種の推定個体数は多いが、定住性の南方の3亜種は130羽から4,000-6,000羽と少ない。北方で繁殖する2亜種は、南部に渡り越冬する。メキシコ湾岸の3亜種は、渡りをしない。国内では、極めて稀な冬鳥または旅鳥である。鹿児島県の出水地方に毎年1-数羽が、マナヅル・ナベヅルの群に混じる。

【**県内の状況**】 千葉県内では稀である。1985年10月-1986年4月にかけて、富津市で1羽が越冬した（千葉県史料研究財団，2002）。日中は水田で採食していたが、ねぐらの位置は特定されなかった（百瀬，1986）。

【**保護対策**】 越冬地である耕作地や草地の広範な保全が望ましい。飛来した個体が密猟に遭う危険性がある。また、観察者や写真撮影愛好家らが集中し、悪影響を与えることがある。特に、餌付けが安易に行われ、警戒心が薄れることは、野犬等の被害に遭う一因となる。飛来情報の早期把握と適切な情報管理、および越冬地での保護対策が必要である。越冬個体および越冬地の保護に対する理解と協力を地権者・周辺住民から得ることが望ましい。

【**引用文献**】 千葉県史料研究財団（2002）／Delany & Scott（2006）／Meine & Archibald（1996）／百瀬（1986）

【**写真**】 1985年12月1日。富津市／米持千里
（桑原和之・百瀬邦和）



C マナヅル ツル科

Grus vipio Pallas, 1811

国：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

千：C-C-C

【種の特性】大型のツルの仲間。平地の広い湿原で繁殖する。昆虫類等の小動物、植物の種子を採食する。

【分布】ロシア極東地域のアムール川流域、モンゴル北東部、中国北東部等で繁殖する（Delany & Scott, 2006）。日本、長江流域、朝鮮半島に渡り、越冬する。生息総数は、5,000羽と推測される（Meine & Archibald, 1996）。国内では鹿児島県出水地方で約2,000羽が越冬する。その他の地方では極めて稀な冬鳥または旅鳥である。

【県内の状況】千葉県内では極めて稀な種である。以下の4例の記録がある。1984年3月16日－30日、館山市で1羽が記録されている（当時の朝日新聞より）。1984年3月、御宿町で1羽が記録されている（千葉県史料研究財団, 2002）。1984年10月17日、木更津市小櫃川河口に成鳥2羽が飛来した（百瀬, 1986; 百瀬・桑原, 1988）。1984年10月24日－1985年3月15日、小見川町（現：香取市）で成鳥2羽が越冬した（齋藤, 1999）。

【保護対策】越冬地である耕作地や草地の広範な保全が望ましい。飛来した個体が密猟に遭う危険性がある。また、観察者や写真撮影愛好家が集中し、悪影響を与えることがある。特に、餌付けが安易に行われ、警戒心が薄れることは、野犬等の被害に遭う一因となる。飛来情報の早期把握と適切な情報管理、および越冬地での保護対策が必要である。越冬個体および越冬地の保護に対する理解と協力を地権者、周辺住民から得ることが望ましい。

【引用文献】千葉県史料研究財団（2002）／Delany & Scott（2006）／Meine & Archibald（1996）／百瀬（1986）／百瀬・桑原（1988）／齋藤（1999）

【写真】1984年10月25日、小見川町下小堀新田（現：香取市）／齋藤敏一

（桑原和之・百瀬邦和）



C オオバン クイナ科

Fulica atra (Linnaeus, 1758)

国：掲載なし

千：C-C-C

【種の特性】全身が黒色の羽毛で覆われ、嘴と額板が白色が目立つ。足にはみずかきが発達している。主に湿地を歩行し生活するバンとは異なり、水面に浮かびながら生活することが多い（桑原, 2007b）。湖沼、潮間帯湿地、塩性湿地、沼沢地、河川、河口域、水田等の湿地に生息する。広い水域で生活する。水面を泳ぎ、潜水して水草の葉、茎などを採食し、水生昆虫、貝、甲殻類など捕食する。繁殖期、ヨシやマコモの湿原や草むらに枯れ草を積み上げて皿形の巣を造る。冬は数羽から数十羽の群れになることもある。

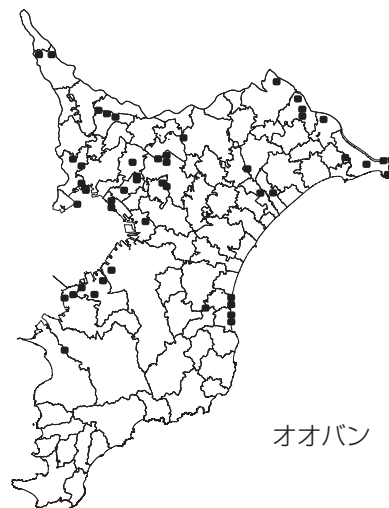
【分布】旧北区、東洋区、オーストラリア区に広く分布する。国内では留鳥。本州中部以北、北海道で繁殖する。北部で繁殖する個体は、冬期、南に渡る。1980年代頃まで、東京湾岸が繁殖の南限であった。1980年以降、各地の湿地で繁殖が確認されるようになった。越冬期、各地の湿地で見られる。

【県内の状況】留鳥。繁殖期、利根川水系の湿地で見られる（千葉県環境部自然保護課, 1986）。冬期、各地の水辺で越冬する。1970年代まで印旛沼では多数が繁殖していた（東邦大学野鳥の会, 1977）。2000年以降、印旛沼では繁殖期の個体数は少ない（箕輪ら, 2005）。東京湾岸では広大な湿地の大部分が埋立られ、後背地のヨシ原等の湿地が消失し、営巣地の減少が著しく、繁殖個体数は激減した。東京湾岸の湿地が繁殖地であったが、近年、繁殖の報告がない。千葉市では要保護生物（C）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課, 2004）。

【保護対策】水生植物の繁茂する湿地の保全が望ましい。湖沼の水質改善をすると共に、植生の再生、創出により生息地の回復を試みることも必要である。外来種を抑え、動物の多様性に富む水域を復活させることも望ましい。

【引用文献】千葉県環境部自然保護課（1986）／千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／桑原（2007b）／箕輪ら（2005）／東邦大学野鳥の会（1977）

【写真】2009年11月6日、千葉市若葉区 泉自然公園／大島健夫
（桑原和之）



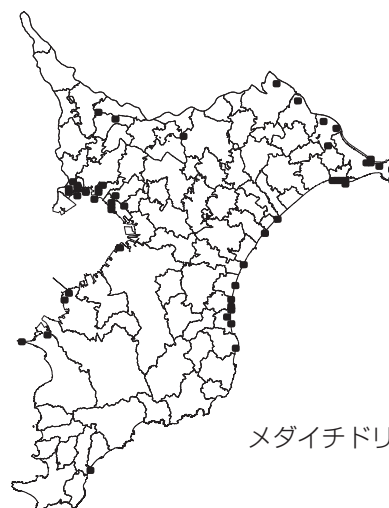
オオバン

C イカルチドリ チドリ科

Charadrius placidus J.E. & G.R. Gray, 1863国：掲載なし
千：無-C-C**【種の特性】** 河川敷等で繁殖する。河川敷、水田や湿地で採食する。**【分布】** 極東地域で繁殖する。北部で繁殖する個体は、冬期、南に渡る。主に中国南東部から東南アジアで越冬する。国内では留鳥。冬期、北日本の個体は、南に渡る。越冬期は、本州から南の地域で見られ、河川敷、水田や蓮田で採食する（桑原 1988）。越冬期でも大きな群れは形成しない（樋口ら、1996）。**【県内の状況】** 千葉県内では冬鳥。個体数は少なく、越冬記録も少ない。広い河川敷がない千葉県では繁殖の記録がない。東京湾岸、九十九里地域、利根川流域や南房総の内陸の湿地で見られる（木幡・桑原、1995）。渡りの期間や越冬期に飛来する。極稀に干潟等の海岸で記録される（桑原・三沢ら、2004）。越冬期は単独か10羽以下の小さな群れで行動する。小河川、水田や蓮田で越冬する。千葉市では重要保護生物（B）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課、2004）。**【保護対策】** 採食地である河川敷、水田、蓮田等の湿地の保全が望ましい。**【引用文献】** 千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／樋口ら（1996）／桑原（1988）／桑原・三沢ら（2004）／木幡・桑原（1995）**【写真】** 2008年2月27日。岬町 轟橋近く（現：いすみ市）／布留川 毅（桑原和之）

イカルチドリ

C メダイチドリ チドリ科

Charadrius mongolus Pallas, 1776国：掲載なし
千：無-C-C**【種の特性】** 干潟、砂浜や水田などの湿地で採食する（桑原・石川、1984）。干潟ではアシナガゴカイ等のゴカイ類を採食する（桑原、1991b）。**【分布】** 東アジア、ヒマラヤから極東地域で繁殖する。春の渡りの時期は、越冬地から繁殖地に渡り、秋の渡りの時期には繁殖地から越冬地に渡る。アフリカ、インド、東南アジアからオーストラリアで越冬する（Hayman et al., 1986）。国内では主に旅鳥。渡りの季節や越冬期に飛来する（樋口ら、1996）。南西諸島では越冬する個体が見られる。**【県内の状況】** 主に旅鳥。少数が越冬する。干潟、砂浜などの海岸で採食する。内陸の水田等の湿地では多くない。東京湾岸や九十九里地域、利根川流域で見られていたが減少した。千葉市では重要保護生物（B）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課、2004）。**【保護対策】** 採食地である干潟、浅瀬や砂浜等の湿地の保全が望ましい。採食地の環境を良好に維持することが望ましい。パラグライディング、ウインドサーフィンや小型船舶等のレジャーによる攪乱も多いため、本種の生息域への侵入防止等の規制も必要である。**【引用文献】** 千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／Hayman et al. (1986)／樋口ら（1996）／桑原（1991b）／桑原・石川（1984）**【写真】** 2006年8月28日。長生村 一宮川河口／高島斎二（桑原和之）

メダイチドリ

C ダイゼン チドリ科

Pluvialis squatarola (Linnaeus, 1758)国：掲載なし
千：無-C-C

【種の特性】夏羽は背が淡い色彩で、顔から腹部が黒色を呈する（石川、1982）。干潟、砂浜などの海岸で採食する。内陸の水田等の湿地では多くない。ゆっくり歩きながら小動物を探し、時々、立ち止まり、地面の餌をつついて捕らえる。干潟では、アシナガゴカイ等ゴカイ類、コメツキガニ、チゴガニ、アナジャコ等の甲殻類の他、小型の魚類を捕食する（桑原、1996）。満潮時、シオフキ、アサリやヒメシラトリガイ等の二枚貝類を採食する（桑原、1985）。干潟ではイソギンチャクの仲間も捕食する（桑原、2010d）。

【分布】旧北区、新北区のツンドラ地域で広範囲にわたる地域で繁殖する。春の渡りの時期は、越冬地から繁殖地に渡り、秋の渡りの時期には繁殖地から越冬地に渡る。広範囲にわたる地域で越冬する（Hayman et al., 1986）。国内では冬鳥もしくは旅鳥（樋口ら、1996）。海岸で見られるが、多くない。太平洋側の干潟や砂浜等の海岸で、越冬する。内陸では稀に渡りの時期に飛来するだけである。

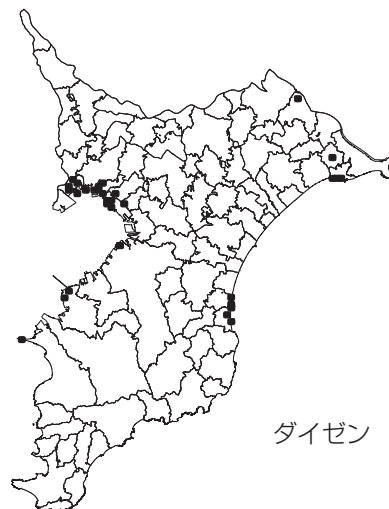
【県内の状況】周年見られる。主に冬鳥や旅鳥。千葉県でも東京湾岸や九十九里地域で見られていた（千葉県、1975）。個体数は大きく減少した。かつては、東京湾では数百羽が越冬していた。1975年以前は、千葉市内では毎年100羽前後が越冬していたが（千葉県、1975）、現在は、極稀にしか記録されなくなった。干潟が減少した千葉市では重要保護生物（B）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課、2004）。

【保護対策】採食地である干潟、浅瀬や砂浜等の湿地の保全が望ましい。採食地の環境を良好に維持することが望ましい。パラグライディング、ウインドサーフィンや小型船舶等のレジャーによる攪乱も多いため、本種の生息域への侵入防止等の規制も必要である。

【引用文献】千葉県（1975）／千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／Hayman et al.（1986）／樋口ら（1996）／石川（1982）／桑原（1985）／桑原（1996）／桑原（2010d）

【写真】1990年1月3日。習志野市 谷津干潟／石川 勉

（桑原和之）



ダイゼン

C タゲリ チドリ科

Vanellus vanellus (Linnaeus, 1758)国：掲載なし
千：無-C-C

【種の特性】黒く長い冠羽があり目立つ。上面は光沢のある緑色、下面は白く、美しい種である。水田、蓮田や草地等の湿地で採食する。稀に干潟等の海岸近くで採食することがある。内陸の水田等の湿地では多くない。ゆっくり歩きながら小動物を探し、時々、立ち止まり、地面の餌をつついて捕らえる。

【分布】ヨーロッパ、中央アジア、モンゴルから極東地域にかけ広い範囲で繁殖する。北部で繁殖する個体は、冬期には南に渡る。主に、ヨーロッパ、地中海沿岸の北アフリカ、中東、中国南東部から台湾で越冬する。国内では主に冬鳥か旅鳥。渡りの時期や越冬期に各地に飛来する。国内では北陸地方で繁殖した例がある（樋口ら、1996）。

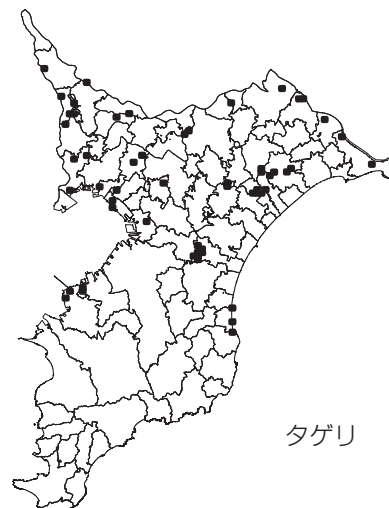
【県内の状況】冬鳥。多くない。千葉県では各地で見られる。東京湾岸や九十九里地域、利根川流域の水田や草地等の湿地で見られる（桑原、2010e）。小櫃川河口（百瀬・桑原、1988）、夷隅川河口（露崎、2004）等河川の河口近くの水田などでも見られる。水田や蓮田が減少している千葉市では重要保護生物（B）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課、2004）。

【保護対策】採食地である水田、蓮田等の湿地の保全が望ましい。

【引用文献】千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／樋口ら（1996）／桑原（2010e）／百瀬・桑原（1988）／露崎（2004）

【写真】2010年1月2日。本埜村下井（現：印西市）／小林大光

（桑原和之）



タゲリ

C キョウジョシギ シギ科

Arenaria interpres (Linnaeus, 1758)

国：掲載なし
千：無-C-C

【種の特性】干潟、砂浜、岩礁、礫浜等の海岸、潮間帯湿地、塩性湿地、河口域、蓮田、水田等の湿地で採食する。歩きながら小動物を探し、頑丈でふと短い嘴でつついて食べる。干潟では、コメツキガニ、チゴガニ、アナジャコ等の小型の甲殻類等を捕食する。

【分布】ヨーロッパ、シベリア、アラスカ等、広い範囲で繁殖する。春の渡りの時期は、越冬地から繁殖地に渡り、秋の渡りの時期には繁殖地から越冬地に渡る。ヨーロッパ、アフリカ、中近東、インド、中国南東部、東南アジア等で越冬する。国内では旅鳥。各地で春と秋の渡りの時期に見られる。南西諸島や小笠原諸島では越冬する。冬期は少ない。

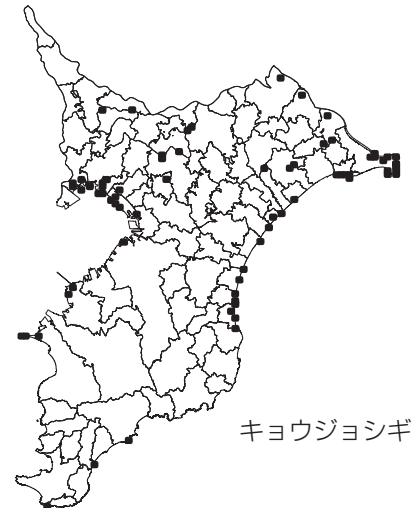
【県内の状況】旅鳥。普通に海岸で見られる。稀に越冬する（藤岡ら、1998b）。千葉県でも東京湾岸や九十九里地域で見られていたが減少した。外房海岸では少なく、九十九里海岸以外では記録が少ない。東京湾岸の干潟では、個体数が多く普通に見られていた。採食地である干潟が減少した千葉市では重要保護生物（B）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課、2004）。

【保護対策】採食地である海岸、干潟、水田などの湿地の保全が望ましい。採食地の環境を良好に維持することが望ましい。東京湾岸の干潟や浅瀬の現状維持が望ましい。パラグライディング、ウインドサーフィンや小型船舶等のレジャーによる攪乱も多いため、本種の生息域への侵入防止等の規制も必要である。

【引用文献】千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／（藤岡ら1998b）

【写真】2004年8月11日。長生村 一宮川河口／高島斎二

（桑原和之）



キョウジョシギ

C オバシギ シギ科

Calidris tenuirostris (Horsfield, 1821)

国：掲載なし
千：無-C-C

【種の特性】干潟、砂浜、浅瀬や水田等の湿地で採食する。主にアサリ、シオフキ等の二枚貝等の小動物を捕食する（石川・桑原、1984b）。

【分布】北東シベリアで繁殖する。春の渡りの時期は、越冬地から繁殖地に渡り、秋の渡りの時期には繁殖地から越冬地に渡る。主にインドから東南アジア、オーストラリアの海岸で越冬する（Hayman et al., 1986）。国内では旅鳥。多くない。稀に渡りの時期に飛来する。南西諸島では、越冬期にも見られる。

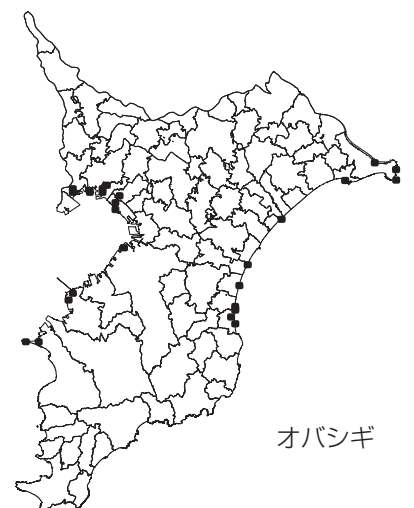
【県内の状況】旅鳥。東京湾岸や九十九里地域で見られていたが減少した。1975年以前は、千葉市内でも毎年数十羽が飛来していた（千葉県、1975）。千葉市内では現在、極稀である。千葉市では重要保護生物（B）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課、2004）。

【保護対策】採食地である干潟、浅瀬や砂浜等の湿地の保全が望ましい。採食地の環境を良好に維持することが望ましい。パラグライディング、ウインドサーフィンや小型船舶等のレジャーによる攪乱も多いため、本種の生息域への侵入防止等の規制も必要である。

【引用文献】千葉県（1975）／千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／Hayman et al. (1986)／石川・桑原（1984b）

【写真】1993年12月12日。習志野市 谷津干潟／岡 典弘

（桑原和之）



オバシギ

C キアシシギ シギ科

Heteroscelus brevipes (Vieillot, 1816)国：掲載なし
千：無-C-C

【種の特性】干潟、浅瀬、砂浜、岩礁海岸、潮間帯湿地、塩性湿地、小河川、沼沢地、河口域や水田等の湿地で採食する。歩きながら小動物を探し、餌を細長い嘴でつついて食べる。干潟では、コメツキガニ、チゴガニ、アナジャコ等の小型の甲殻類、ゴカイ類等を捕食する。

【分布】ロシア極東地域で繁殖する。春の渡りの時期は、越冬地から繁殖地に渡り、秋の渡りの時期には繁殖地から越冬地に渡る。主にオーストラリアから東南アジアで越冬する。国内では旅鳥。渡りの時期に飛来する。南西諸島では越冬する。

【県内の状況】旅鳥として干潟に飛来する（石川，1979）。小櫃川河口の干潟では、普通に見られていた（岩瀬・桑原，1989）。千葉県でも東京湾岸や九十九里地域で多かったが、減少した。干潟が減少した千葉市では重要保護生物（B）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課，2004）。

【保護対策】採食地である干潟、浅瀬、砂浜、岩礁海岸、水田などの湿地の保全が望ましい。

【引用文献】千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／石川（1979）／百瀬・桑原（1988）／岩瀬・桑原（1989）

【写真】2003年8月19日。長生村 一宮川河口／高島斎二

（桑原和之）



キアシシギ

C ソリハシシギ シギ科

Xenus cinereus (Güldenstädt, 1775)国：掲載なし
千：無-C-C

【種の特性】干潟、浅瀬、砂浜、岩礁海岸等の湿地で採食する。干潟では、チゴガニやコメツキガニ等の小型の甲殻類やゴカイ類を長くやや上方に反っている嘴で捕食する。

【分布】ロシア、シベリアから極東地域で繁殖する。春の渡りの時期は、越冬地から繁殖地に渡り、秋の渡りの時期には繁殖地から越冬地に渡る。アフリカ、サウジアラビア、東南アジアからオーストラリアで越冬する。国内では旅鳥。国内では旅鳥。渡りの時期に飛来する。南西諸島では、少数が越冬する。

【県内の状況】千葉県でも東京湾岸や九十九里地域で見られていたが減少した。千葉市では少なくなり、重要保護生物（B）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課，2004）。

【保護対策】県内では記録が少ない。採食場所である水田などの湿地環境の保全が必要である。生息地の環境を良好に維持することが望ましい。

【引用文献】千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）

【写真】2004年7月18日。長生村 一宮川河口／高島斎二

（桑原和之）



ソリハシシギ

C オグロシギ シギ科

Limosa limosa (Linnaeus, 1758)国：掲載なし
千：無-C-C

【種の特性】嘴が長い。水田、蓮田や干潟等の湿地で採食する。内陸の水田に飛来する（桑原，2009）。干潟では、シオフキ等の二枚貝類を捕食する。

【分布】ヨーロッパ、中央アジア、ロシアから極東地域で繁殖する。北部で繁殖する個体は、冬期には南に渡る。ヨーロッパ、アフリカ、インド、中国南東部、東南アジアやオーストラリア等で越冬する。国内では旅鳥。各地で春と秋の渡りの時期に見られる。各地で減少し、個体数は少ない（桑原，2005）。南西諸島では、少数が越冬する。

【県内の状況】旅鳥。各地で見られる。春と秋の渡りの時期に見られる。春の渡りの時期、個体数は少ない。秋の渡りの時期、主に幼羽が見られる。東京湾岸や九十九里地域で普通に見られていた。個体数が減少し、現在は少ない。千葉県でも東京湾岸や九十九里地域で見られていたが減少した。千葉市では重要保護生物（B）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課，2004）。

【保護対策】県内では記録が少ない。採食地である水田、蓮田や干潟等の湿地の保全が望ましい。

【引用文献】千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／桑原（2005）／桑原（2009）

【写真】2007年9月9日。長生村／高島斎二

（桑原和之）



C オオソリハシシギ シギ科

Limosa lapponica (Linnaeus, 1758)国：掲載なし
千：無-C-C

【種の特性】干潟、浅瀬、砂浜、岩礁海岸、水田等の湿地で採食する。干潟では、ゴカイ類を長くやや上方に反っている嘴で捕食する（高野，1978）。オスよりメスが大きい（石川，1983）。

【分布】スカンジナビア、ロシア、シベリアからアラスカで繁殖する。ヨーロッパ、アフリカ、中近東、南アジア、中国南東部、東南アジアやオーストラリア等の海岸で越冬する。国内では旅鳥。各地で春と秋の渡りの時期に見られる。南西諸島では、少数が越冬する。

【県内の状況】旅鳥。各地で見られる。春と秋の渡りの時期に見られる。東京湾岸では春の渡りの時期、干潟で個体数が多い（石川，1984）。千葉県でも東京湾岸や九十九里地域で見られていたが減少した。千葉市では重要保護生物（B）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課，2004）。

【保護対策】採食地の環境を良好に維持することが望ましい。東京湾岸の干潟や浅瀬の現状維持が望ましい。パラグライディング、ウインドサーフィンや小型船舶等のレジャーによる攪乱も多いため、本種の生息域への侵入防止等の規制も必要である。

【引用文献】千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／石川（1983）／石川（1984）／高野（1978）

【写真】2005年5月4日。旭市岩井地先干潟八万石／齋藤敏一

（桑原和之）



C チュウシャクシギ シギ科

Numenius phaeopus (Linnaeus, 1758)国：掲載なし
千：無-D-C

【種の特性】シギ類。砂浜、岩礁、干潟、水田等の湿地で採食する。下に湾曲した嘴で、小型の甲殻類等を捕食する（石川・桑原，1984）。砂浜ではスナガニ、干潟では、ヤマトオサガニ、オサガニ、コメツキガニ、チゴガニ等のスナガニ類を採食する（石川・桑原，1984）。水田ではアメリカザリガニを捕食する（桑原，2009）。

【分布】ヨーロッパから極東地域、北アメリカで繁殖する。繁殖地は局地的である。春の渡りの時期は、越冬地から繁殖地に渡り、秋の渡りの時期には繁殖地から越冬地に渡る。アフリカ、南アジア、東南アジア、オーストラリア、南アメリカ等の海岸近くで越冬する。国内では旅鳥。各地で春と秋の渡りの時期に見られる。南西諸島では、少数が越冬する。

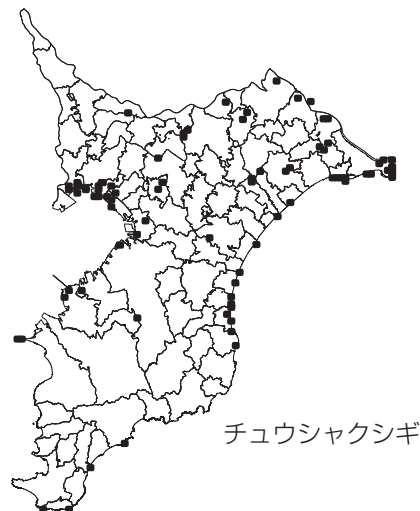
【県内の状況】旅鳥。各地で見られる。春と秋の渡りの時期に見られる。春の渡りの時期に個体数が多い（桑原・石川，1991）。東京湾岸、利根川周辺や九十九里地域で多かったが減少した。谷津干潟で1970年代にねぐらが確認された（桑原・久保田ら，1984）。千葉市では要保護生物（C）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課，2004）。

【保護対策】採食地である干潟、砂浜、岩礁や水田等の湿地の保全が望ましい。採食地の環境を良好に維持することが望ましい。東京湾岸では干潟や浅瀬の現状維持が望ましい。レジャーにより、ねぐらが攪乱されることも多い。ねぐら等の休息場所の保護が望ましい。

【引用文献】千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／石川・桑原（1984）／桑原（2009）／桑原・石川（1991）／桑原・久保田ら（1984）

【写真】2009年5月3日、船橋市米ヶ崎町／金子敏之

（桑原和之）



チュウシャクシギ

C セグロアジサシ カモメ科

Sterna fuscata Linnaeus, 1758国：掲載なし
千：C-C-C

【種の特性】中型のアジサシ類。主に魚類を捕食する。熱帯、亜熱帯の外洋の島嶼で繁殖する。岩礁や草地に大きな集団繁殖地を形成する。

【分布】南太平洋、インド洋、大西洋、オーストラリア北部等の大洋上の島々で繁殖する。非繁殖期には、熱帯から亜熱帯の洋上に生息する。国内では夏鳥。小笠原諸島、南鳥島、仲御神島等で繁殖する。台風通過前後、強風等で本来の生息地と異なる内陸等で観察され、保護されることがある。越冬地および非繁殖期の生態に関しては、まだ不明な点が多い。

【県内の状況】少ない。主に夏に見られる。コアジサシのコロニー等で見られることがある。九十九里海岸（奴賀ら，2006）や銚子市（桑原・三沢ら，2006）等、太平洋に面した海岸で少数が見られる。東京湾（桑原・箕輪・田村ら，2000）でも小櫃川河口（箕輪ら，1996；1999）や幕張の浜などで記録がある。1998年台風6号通過時の1998年9月21日・25日に1羽が三番瀬で記録されている（桑原・三沢ら，2004）。

【保護対策】コアジサシのコロニーの保護が望ましい。渡りの中継地として砂浜、干潟や浅瀬の現状維持が望ましい。台風や低気圧等の通過により、海岸ではなく内陸等で確認されることがあるので、緊急保護が必要な状況が生じる可能性があり、適宜対応する必要がある。

【引用文献】桑原・箕輪・田村ら（2000）／桑原・三沢ら（2004）／桑原・三沢ら（2006）／箕輪ら（1996）／箕輪ら（1999）／奴賀ら（2006）

【写真】2007年6月9日、九十九里浜／白川浩一

（桑原和之）



セグロアジサシ

C カッコウ カッコウ科

Cuculus canorus (Linnaeus, 1758)

国：掲載なし
千：C-C-C

【種の特性】「カッコウ、カッコウ」と特徴がある大きな声で囀る。疎林や低木の混じる草地等で見られる。ねぐらや採食場所は、主に樹林内である（Nakamura & Miyazawa, 1997）。主食は昆虫類である。他の鳥類があまり食べない鱗翅類の幼虫（毛虫）を捕食する。カッコウの主要宿主はオオヨシキリ、モズ、ホオジロで、国内では29種が托卵されている（樋口ら, 1997）。近年、オナガも宿主とされる（Nakamura, 1990）。

【分布】北極圏を除くユーラシア大陸で繁殖する。冬期は南に渡る。アフリカ中南部、インド、東南アジア、ニューギニアで越冬する。約10亜種に分けられている。国内では夏鳥。亜種カッコウ *C.c. telephonus* が繁殖する。九州以北に飛来する。東日本では平地から山地、西日本では山地で繁殖する。冬期は南に渡る。

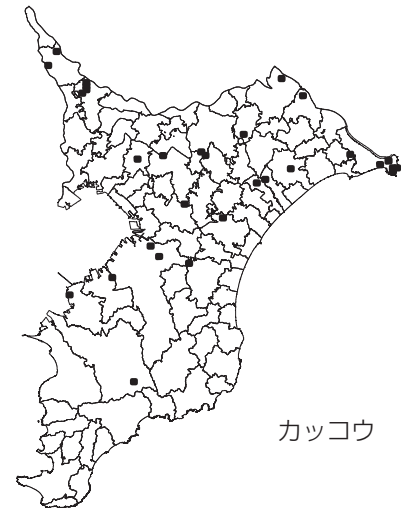
【県内の状況】夏鳥または旅鳥。少ない。繁殖期、利根川流域に分布する。江戸川沿いの地域でも繁殖していると思われる。渡りの季節には各地で記録がある（原田ら, 1995; 箕輪ら, 1999; 2000）。

【保護対策】宿主が繁殖する河川敷や疎林の保全が望ましい。

【引用文献】原田ら（1995）／樋口ら（1997）／箕輪ら（1999）／箕輪ら（2000）／Nakamura（1990）／Nakamura & Miyazawa（1997）

【写真】2006年6月10日。流山市南流山／中込 哲

（桑原和之・高木 武）



カッコウ

C ツツドリ カッコウ科

Cuculus saturatus Blyth, 1843

国：掲載なし
千：C-C-C

【種の特性】夏鳥。主食は昆虫類である。他の鳥類があまり食べない鱗翅類の幼虫（毛虫）を捕食する。山地の落葉広葉樹林で繁殖する。他の鳥類の巣に卵を産む、托卵を行う。ツツドリの主要宿主はセンダイムシクイやメボソムシクイである（樋口ら, 1997）。他の宿主としてヤブサメ、キビタキ、メジロ等が知られる。卵は白色で淡色の小斑が散在する。

【分布】シベリア南部からヒマラヤ、中国南部、マレー半島、スマトラ、日本等で繁殖する。冬期は南に渡る。温帯以北で繁殖する個体は、東南アジア、インド、オーストラリア等で越冬する。国内では夏鳥。山地の森林に飛来する。4月中旬から5月上旬に飛来する。

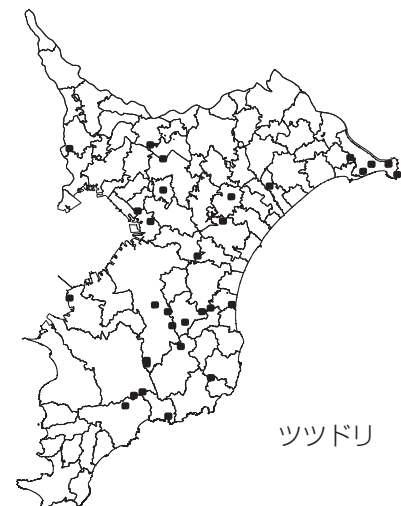
【県内の状況】夏鳥。個体数は少ない。繁殖地は南房総の山間部に限られる。元清澄山などで繁殖期に記録される（越川, 2010）。秋の渡りの時期、各地で少数が観察される（三沢ら, 2003）。

【保護対策】宿主が繁殖する山地の発達した落葉広葉樹林の保全が望ましい。荒廃した植林地や薪炭林の維持管理が望まれる。

【引用文献】樋口ら（1997）／越川（2010）／三沢ら（2003）

【写真】2009年9月23日。船橋市大神保町 県民の森／金子敏之

（桑原和之・高木 武）



ツツドリ

C ホトトギス カッコウ科

Cuculus polcocephalus Latham, 1790国：掲載なし
千：C-C-C

【種の特性】日本産ホトトギス類の中で最も小さい。主食は昆虫類である。他の鳥類があまり食べない鱗翅類の幼虫（毛虫）を捕食する。山地の林で繁殖する。他の鳥類の巣に卵を産む（托卵）。宿主は主にウグイスである。稀にセンダイムシクイやミソサザイに托卵する（樋口ら，1997）。卵はウグイスの卵より大きく、同色の赤茶色である。

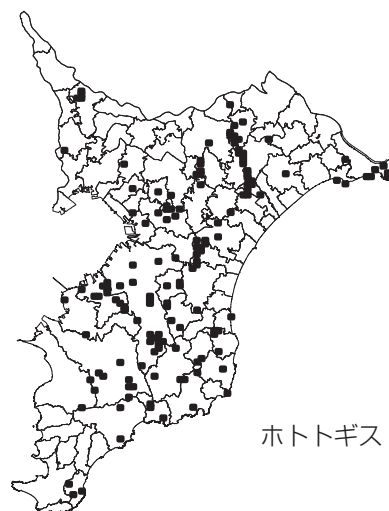
【分布】日本からロシア、中国、朝鮮半島にかけて繁殖する。冬期は、南に渡る。中国南部、ベトナム等の東南アジアで越冬する。越冬地の詳細は不明である。国内では夏鳥。九州以北の山地の林に渡来し繁殖する。北海道では少ない。

【県内の状況】夏鳥（綾・桑原，2000）。千葉県南部では、記録も少なくない（越川，2005；南房総動植物調査団，1990；袖ヶ浦市教育委員会，1999）。全県的な繁殖状況は不明である。近年、確実な繁殖記録は報告されていない。鳴き声の記録は少なくない。5-7月の記録は多く、8月以降は稀である。南房総の海岸部では、繁殖期に確認される（布留川，2008；奴賀ら，1998；奴賀ら，2003）。東京湾岸の海岸部では、春の渡りの時期に確認される旅鳥である（桑原・石川ら，1999；箕輪ら，1999）。千葉市緑区や若葉区では、ホトトギスの声が毎年5月頃記録される（桑原・木幡ら，1999）。個体数は多いとは言えない。都市部の市街地からは減少している（和仁，2001）。千葉市では重要保護生物（B）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課，2004）。

【保護対策】宿主が繁殖する山地の森林の保全が望ましい。荒廃した植林地や薪炭林の維持管理が望まれる。

【引用文献】綾・桑原（2000）／千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／布留川（2008）／樋口ら（1997）／桑原・木幡ら（1999）／桑原・石川ら（1999）／越川（2005）／南房総動植物調査団（1990）／箕輪ら（1999）／奴賀ら（1998）／奴賀ら（2003）／袖ヶ浦市教育委員会（1999）／和仁（2001）

【写真】2010年6月6日。四街道市 四街道市総合公園／和田信裕
（桑原和之）



ホトトギス

C トラフズク フクロウ科

Asio otus (Linnaeus, 1758)国：掲載なし
千：C-C-C

【種の特性】中型のフクロウ類。羽角が目立つ。樹林と草地、耕作地等が混在するような環境に生息する。主にネズミ類を捕食する。小型の鳥類や昆虫類も餌とする。樹洞や他のカラス類やタカ類等の鳥類の古巣を利用し、営巣する。越冬期、樹上に集団ねぐらを形成する。数十羽がねぐらをとる例も知られる。

【分布】ユーラシア大陸と北アメリカの温帯から亜寒帯で繁殖する。北方で繁殖する個体は、冬期、南に渡る。国内では本州中部以北で局所的に繁殖する。越冬期、本州中部以南で見られる。

【県内の状況】冬鳥。個体数は少ない。埋立地、耕作地、河川敷等に飛来する。東京湾岸の埋立地が広大な草地だった時期は、本種やコミミズクが多数越冬した（石川，1991；1993；桐原・桑原，2000）。千葉の幕張埋立地の防風林では、1990－1991年越冬期、トラフズクが20羽ほど越冬していた（米持千里私信）。その埋立地も現在はビル街となり、越冬地は消滅した。休耕田や放置され草地化している場所が、越冬地となっている可能性がある。繁殖期も見られることがあるが、詳細は不明である（塚田，1999）。千葉市では重要保護生物（B）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課，2004）。

【保護対策】耕作地、草地、河川敷の広範な環境の保全が望ましい。密猟や人による悪影響を回避するため、適切な情報管理が必要である。

【引用文献】千葉市環境局環境保全部環境保全推進課，2004）／石川（1991）／石川（1993）／桐原・桑原（2000）／塚田（1999）

【写真】1991年1月4日。習志野市芝園 京葉港埋立地／石川 勉
（桑原和之）



C カワセミ カワセミ科

Alcedo atthis (Linnaeus, 1758)

国：掲載なし
千：C-C-C

【種の特性】 山間部から平野部に広く生息する。河川、湖沼、塩性湿地、溪流、海岸、干潟等の湿地で採食する。小河川、沼沢地、河口域、用水路、ため池等でも見られる。水中に飛び込み魚類、甲殻類や水生昆虫等の小動物等を捕食する。崖や急斜面に直径6-9 cmの横穴を60 cm-1 m掘り、巣とする（樋口ら、1997）。5-7卵を産む（山階、1936）。抱卵期間は約18-19日で、雛は孵化後約23-25日で巣立つ。河川、用水路の改修、護岸工事により、採食地や営巣地が減少している。

国内では留鳥。国内では、亜種カワセミ*A.a.bengalensis*が繁殖する。全国に分布し、繁殖する。北日本の山地や北海道で繁殖する個体は、南に渡る。都市部では減少している（松田、1971）。

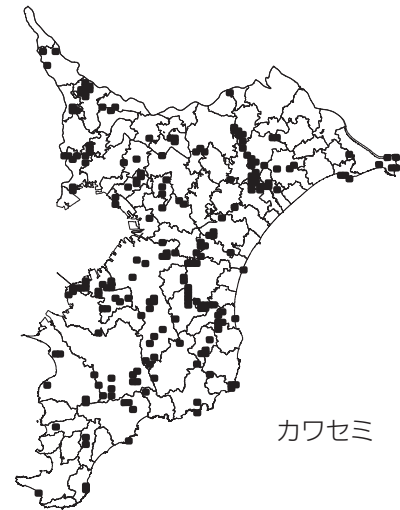
【県内の状況】 留鳥。全域に広く分布する。生息地では、ほとんどの地域で周年見られる。各地で普通に見られる。個体数は多くない。河川、用水路の改修、護岸工事により、採食地や営巣地が減少している。千葉市では要保護生物（C）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課、2004）。

【保護対策】 採食場所である湿地を保全し、良好に維持することが望ましい。生息地の回復を試みることも必要である。

【引用文献】 千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／樋口ら（1997）／松田（1971）／山階（1936）

【写真】 2011年2月9日。成田市大竹／海保富士雄

（桑原和之）



カワセミ

C ヒメアマツバメ アマツバメ科

Apus affinis (Gray, 1830)

国：掲載なし
千：D-C-C

【種の特性】 日本産アマツバメ類3種の中で最も小さい。ビルや漁港等の建造物に営巣する。コシアカツバメやイワツバメ等の巣を使い繁殖することもあり（樋口ら、1997）。飛びながら集めた羽毛や草の茎等を唾液を使い巣に張り付ける。日本産の他のアマツバメ類は、繁殖後に南方に渡るが、本種は繁殖地周辺で越冬する。

【分布】 中国南部、台湾、東南アジア、インド、アフリカ等、熱帯から亜熱帯地域に周年生息する。国内では1960年以前は、極稀に記録される種であった。1967年に静岡県で繁殖が確認された後、太平洋岸の各地で営巣が確認されるようになった。

【県内の状況】 内房と外房の漁港等で局地的に繁殖する（千葉県史料研究財団、2002）。繁殖地周辺では、主に夏期に見られる（奴賀ら、1998；奴賀ら、2003）。営巣地に近い南房総では、照葉樹林の丘陵地や漁港付近で見られる（布留川、2008；2009；越川、2005）。繁殖地以外では、春と秋の渡りの時期に稀に観察される（桑原・三沢ら、2006；桑原ら、1997；箕輪ら、2005）。

【保護対策】 ツバメ類と同様、糞の落下が嫌われ、建物の管理者に巣を落とされることがある。集団繁殖地に対する建物の所有者、管理者の理解が重要である。

【引用文献】 千葉県史料研究財団（2002）／布留川（2008）／布留川（2009）／樋口ら（1997）／桑原ら（1997）／桑原・三沢ら（2006）／越川（2005）／箕輪ら（2005）／奴賀ら（1998）／奴賀ら（2003）

【写真】 2008年7月16日。勝浦市 松部漁港／布留川 毅

（桑原和之・高木 武）



ヒメアマツバメ

C アオゲラ キツツキ科*Picus awokera* Temminck, 1835国：掲載なし
千：C-C-C

【種の特性】 中型のキツツキ類。低地、低山帯から亜高山帯下部の常緑広葉樹林、落葉広葉樹林、雑木林等に生息する。樹上で昆虫類やクモ類などの節足動物を採食する。アリ類もよく捕食する。小枝に止まり果実も採食する。地上に降り採食する事もある（樋口ら，1997）。木に穴をあけ、営巣する。枯木にも営巣する。

【分布】 日本の固有種。本州、四国、九州、屋久島、種子島、淡路島、小豆島などに分布する。ほとんどが留鳥である。長い距離の移動はしないが、平地に降り、越冬する個体もいる。

【県内の状況】 少ない。北総では冬鳥。北総では越冬期に、雑木林や樹林の多い公園などで観察される（野田野鳥同好会，1991）。北総では、アカゲラよりも観察頻度は少ない。流山市市野谷では、1995年以降越冬期に毎年数回観察されていたが、2001年以降は森の面積が半減し、周囲の開発が進んだことから確認されていない。1995年3月5日♂1羽、1996年11月9日1羽、1998年3月14日♂1羽、2000年1月8日声の確認1羽等の記録がある。南房総では繁殖期も見られる（南房総動植物調査団，1990）。千葉県内では繁殖は確認されていない。照葉樹林帯では、繁殖期に観察例がある（富谷，1999）。ただし、東京大学演習林周辺では近年記録されていない（東京大学演習林鳥類研究会，2009）。

【保護対策】 アオゲラが利用する雑木林や公園の保全が望ましい。公園等ではキツツキ類の営巣に適した幹の太い木や枯木、樹洞のある木も必要に応じ保存する必要がある。千葉県における生息状況が明らかではない。生息状況を精査する必要がある。

【引用文献】 千葉県史料研究財団（2002）／樋口ら（1997）／南房総動植物調査団（1990）／野田野鳥同好会（1991）／東京大学演習林鳥類研究会（2009）／富谷（1999）

【写真】 2006年12月10日。船橋市大神保町／金子敏之
（桑原和之・浅川裕之）

**C アカゲラ キツツキ科***Dendrocopos major* (Linnaeus, 1758)国：掲載なし
千：C-C-C

【種の特性】 中型のキツツキ類。低地、低山帯の雑木林、落葉広葉樹林、松林、混交林などに生息する。公園等でも見られる（山内ら，1997）。嘴で木をついたり、樹皮や葉から餌をついばんだりして、採食する。昆虫類やクモ類などの節足動物を主に採食する（樋口ら，1997）。木の実も採食する。巣穴は樹洞や枯木、芯に菌の入った生木などに掘り造る。人工物にも営巣することがある（村井・樋口，1991）。

【分布】 アイルランドを除くヨーロッパの全域、ユーラシアの森林およびアフリカ北縁の一部に広く分布する。国内では留鳥。北海道から本州まで分布する。ほとんどが留鳥である。冬は平地近くまで降りてくる個体もある。

【県内の状況】 冬鳥。越冬期である9月から4月頃に見られる。各地の雑木林や混交林、樹林の多い公園などでみられる。個体数は多くない。南総より北総地域での記録が多い（野田野鳥同好会，1991）。流山市市野谷では1992年以降毎年越冬している。1998年3月28日♂1羽、1998年11月30日♀1羽、1999年11月3日♀1羽、2000年1月8日♂1羽♀1羽、2001年10月23日♀1羽、2002年11月27日♀1羽、2003年10月8日♂1羽、2004年10月13日♀1羽、2006年12月6日♀1羽、2010年1月17日声の確認1羽などの記録がある。越冬期に雌雄で確認され、1999年には流山市で繁殖期に確認されている（時田ら，2001）。

【保護対策】 営巣可能な林や公園の保全が望ましい。公園等ではキツツキ類の営巣に適した幹の太い木や枯木、樹洞のある木も必要に応じ保存する必要がある。

【引用文献】 樋口ら（1997）／村井・樋口（1991）／野田野鳥同好会（1991）／時田ら（2001）／富谷（1999）／山内ら（1997）

【写真】 2007年4月12日。松戸市田中新田 東京都立八柱霊園／中込哲

（桑原和之・浅川裕之）



C ミソサザイ ミソサザイ科

Troglodytes troglodytes (Linnaeus, 1758)国：掲載なし
千：C-C-C

【種の特性】全長約10 cm。山地から高山帯にまで生息する。沢沿いの暗い林や岩・根などの起伏の多い環境で生活する。

【分布】ヨーロッパ・アフリカ北部、中近東からシベリア南東部・カムチャッカ半島、韓国、中国、台湾、および、北アメリカ西岸などに分布する。国内では留鳥。屋久島、種子島以北で繁殖する。南大東島の亜種ダイトウミソサザイは絶滅したとされる。

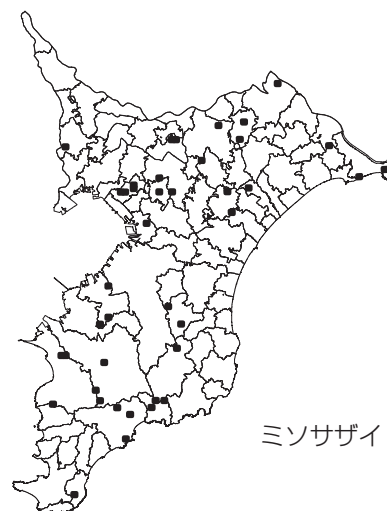
【県内の状況】留鳥。繁殖期は南房総で見られる（南房総動植物調査団、1990）。房総丘陵の渓谷沿い、河川の上流の深い林などに生息する（青木、1994）。繁殖の確実な報告はない。詳しい繁殖状況は報告されていない。越冬期、各地で見られる（千葉県環境部自然保護課、1986；千葉県環境部自然保護課、1994）。北総や東京湾岸でも見られる（青木ら、1992；小倉ら、1991）。個体数は減少傾向にある（桑原ら、1994）。

【保護対策】生息地である渓流沿いの森林の保全が望ましい。

【引用文献】青木（1994）／青木ら（1992）／千葉県環境部自然保護課（1986）／千葉県環境部自然保護課（1994）／桑原ら（1994）／南房総動植物調査団（1990）／小倉ら（1991）

【写真】2010年2月7日。船橋市大神保町／金子敏之

（桑原和之・青木正志）



ミソサザイ

C イワヒバリ イワヒバリ科

Prunella collaris (Scopoli, 1769)国：掲載なし
千：無-C-C

【種の特性】イワヒバリ科の種は旧北区に分布する（樋口ら、1997）。高山帯で繁殖する。冬期は温暖な地域に移動する。越冬期は山地の崖地や造成地等で採食する。

【分布】ヨーロッパ、中央アジア、極東地域に広く分布する。冬期には温暖な地域に渡る。山地で繁殖する個体の一部は、低地に移動し越冬する。国内では留鳥。高山で繁殖するが、冬期は見られない（山階、1936）。

【県内の状況】冬鳥。房総丘陵で記録される（富谷、1999）。高宕山等での観察例が残されている（千葉県、1976）。2004年12月24日に富津市内の崖で見られた（坂本文雄私信）。2005年1月20日に富津市内で地上を移動しながら採食している2羽を確認した（奴賀俊光、豊田英臣、豊田るみ子、箕輪義隆私信）。2005年2月21日に2羽（奴賀俊光私信）、28日に1羽（大木淳一私信）が富津市内で確認されている。このように12月-3月の越冬期に少数が確認されている。

【保護対策】採食地等の保全が望ましい。越冬期の人為的な妨害を避けるため、越冬地の情報の取り扱いには細心の注意が必要である。

【引用文献】千葉県（1976）／樋口ら（1997）／富谷（1999）／山階（1936）

【写真】2005年1月20日。富津市／箕輪義隆

（桑原和之）



イワヒバリ

C イソヒヨドリ ツグミ科

Monticola solitarius (Linnaeus, 1758)国：掲載なし
千：C-C-C

【種の特性】羽色が雌雄で著しく異なる。オスの上面は青色、下面は赤褐色で美しい。メスは地味な茶色である。オスは美しい声で囀る。岩礁海岸に生息する。都市のビル街にも見られることがある。岩場やテトラポッドの周辺でフナムシ等の小動物を採食する。海岸近くに生育するヒサカキ等の漿果も採食する。岩の割れ目やくぼみ等に営巣する。建物等の人工物にも営巣する（布留川，2008）。海外では内陸部の崖地に普通に見られる。日本における生息地はほぼ海岸に限定される。

【分布】旧北区、東洋区からアフリカに分布する。高緯度地方で繁殖する個体は、温暖な地域に渡り越冬する。国内では亜種イソヒヨドリ *M.s.philippensis* が繁殖する。亜種アオハライソヒヨドリ *M.s.pandoo* が稀に南西諸島で見られる。ほとんどの海岸では周年見られる。北海道等、北部で繁殖する個体は、冬期、南へ移動する。

【県内の状況】留鳥。全域の海岸に分布する。いすみ市、勝浦市、鴨川市等の外房の岩礁海岸では、普通に見られる（布留川，2009）。砂浜の続く九十九里浜では記録が少ない。内陸部でも目撃される（箕輪ら，2005）。1994年10月1日に流山市でオス成鳥、2009年10月23日に松戸市でオス成鳥等の観察例がある（戸田未発表）。船橋市の海岸部の工場地帯等でも確認されている（桑原ら，1994; 2000）。

【保護対策】海岸線、特に岩礁海岸における営巣地の保全が望ましい。オスは声も姿も美しいため、違法に捕獲されたり違法に飼育されることがあり、取り締まりが望まれる。

【引用文献】布留川（2008）／布留川（2009）／桑原ら（1994）／桑原ら（2000）／箕輪ら（2005）

【写真】2006年12月20日。千葉市美浜区豊砂 浜田川河口右岸／岡 典弘

（桑原和之・戸田光彦）



イソヒヨドリ

C ヤブサメ ウグイス科

Urosphena squameiceps (Swinhoe, 1863)国：掲載なし
千：C-C-C

【種の特性】「シシシシシ——」とだんだん速くなる高い声で囀る。よく茂った二次林やスギ林等の暗い森林で生活する。ササ類等の下層植生の多い場所で活動する。開けた場所に出ることはほとんどない。丘陵地から低山で繁殖する（樋口ら，1997）。

【分布】ウスリー地方、朝鮮半島等、日本海周辺等東アジアで繁殖する（Dement'ev & Gladkov, 1954）。台湾や東南アジアで越冬する。国内では夏鳥で、屋久島から北海道で繁殖する。南西諸島では少数が越冬している。

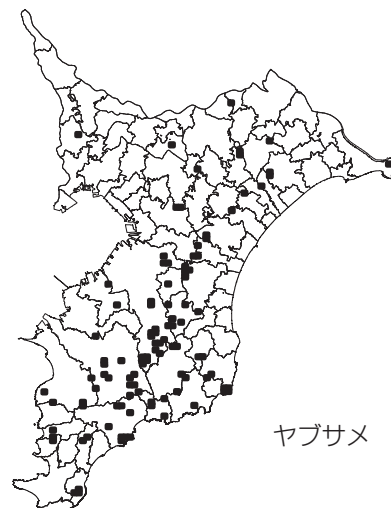
【県内の状況】夏鳥。南部を中心に飛来する。市原市以南の丘陵地で比較的多く記録されている（塚田，1999; 富谷，1999）。房総半島南部では広く繁殖している（南房総動植物調査団，1990）。繁殖期に元清澄山、梅ヶ瀬渓谷などで見られる（越川，2003; 2010）。北部や西部では、春と秋の渡りの時期に記録される（箕輪ら，2005）。千葉市中央区千葉県立中央博物館では、2010年4月23日に落鳥が拾得されている（大木淳一私信）。渡りの期間には市街地でも確認される。

【保護対策】繁殖地である樹林の保全が望ましい。特に自然林やスギの壮齢林の保全が重要である。斜面の土崖等に営巣する。地表近くに生息・繁殖するため、ノネコや他の哺乳類は本種の天敵となる。駆除あるいは増殖を抑えるなどの対策が必要である。

【引用文献】Dement'ev & Gladkov（1954）／樋口ら（1997）／越川（2003）／越川（2010）／南房総動植物調査団（1990）／箕輪ら（2005）／塚田（1999）／富谷（1999）

【写真】2008年6月15日。市原市石塚／加藤恵美子

（桑原和之・戸田光彦）



ヤブサメ

C センダイムシクイ ウグイス科

Phylloscopus coronatus (Temminck et Schlegel, 1847)

国：掲載なし
千：C-C-C

【種の特性】メボソムシクイやエゾムシクイに比べ、標高の低い地域で繁殖する（樋口ら，1997）。本州では標高約 1,000 m までの山地や丘陵地の落葉広葉樹林で繁殖する。北海道では、低地の森林で普通に繁殖する。

【分布】ウスリーから朝鮮半島にかけて繁殖する。冬期は南に渡る。東南アジアで越冬する。国内では夏鳥。九州以北で繁殖する。宮崎県で越冬記録がある。

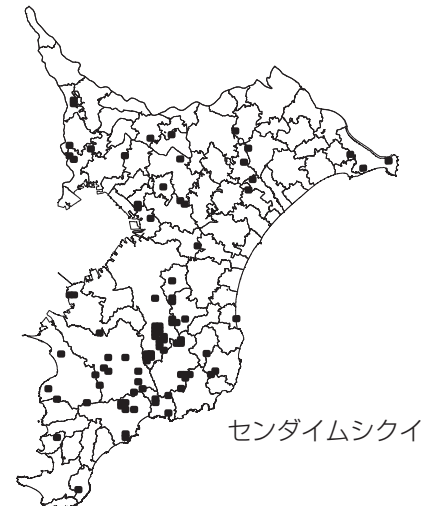
【県内の状況】夏鳥。繁殖している個体数は少ない。繁殖期に元清澄山、梅ヶ瀬渓谷などで見られる（越川，2003; 2010）。市原市以南の丘陵地や房総半島南部では、繁殖期を通して確認される（南房総動植物調査団，1990）。繁殖例の報告はない。春と秋の渡りの時期には、各地で少数が観察される（三沢ら，2003; 市立市川自然博物館，1993）。

【保護対策】繁殖地である樹林の保全が望ましい。特に房総丘陵の落葉広葉樹林の保全が望ましい。地上の窪み等に営巣する。地表近くで繁殖するため、ノネコや他の哺乳類は本種の天敵となる。駆除あるいは増殖を抑えるなどの対策が必要である。

【引用文献】樋口ら（1997）／越川（2003）／越川（2010）／南房総動植物調査団（1990）／三沢ら（2003）／市立市川自然博物館（1993）

【写真】2009年5月3日。船橋市大神保町／金子敏之

（桑原和之・戸田光彦）



センダイムシクイ

C ホオジロ ホオジロ科

Emberiza cioides Brandt, 1843

国：掲載なし
千：C-C-C

【種の特性】全長 17 cm。見通しのいい梢等で大きな良く通る声で囀る（山岸・明石，1981）。低木やヤブの散在する環境に生息する（樋口ら，1997）。林縁や低木林で繁殖する（山岸，1978）。集落周辺の疎林でも普通に繁殖する。広い草原や樹林内部では見られない。地上で主に草本類の種子を採食する。越冬期、大きな群れは形成せず、数羽の小群を作る。

【分布】シベリア南部からモンゴル、アムール、ウスリー地方、中国、朝鮮半島、日本に分布する（山階，1934）。国内では留鳥。主に種子島以北のほぼ全国に分布する。北方や山地で繁殖する個体は、低地や暖地に移動し、越冬する。

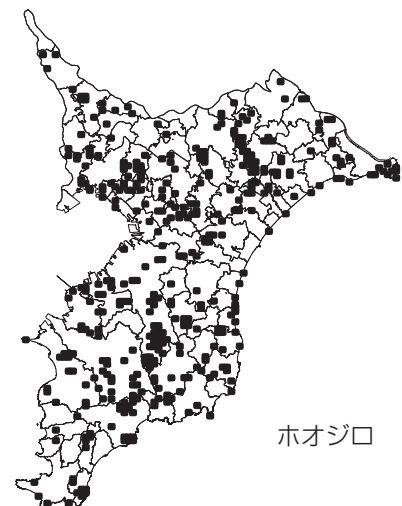
【県内の状況】留鳥。各地に広く分布し、繁殖する。冬期、個体数が増加する地域がある。農村、耕作地の宅地化、市街地化により生息地は減少している。千葉県南部では普通に繁殖する（南房総動植物調査団，1990）。印旛沼等湖沼の周辺でも繁殖する（箕輪ら，2005）。東京湾岸や九十九里地域で普通に見られていたが、個体数は減少した。飼養目的の密猟が行われることがある。千葉市では重要保護生物（B）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課，2004）。

【保護対策】里山の維持・保全が望ましい。違法捕獲の禁止の周知が必要である。

【引用文献】千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／樋口ら（1997）／南房総動植物調査団（1990）／箕輪ら（2005）／山岸（1978）／山岸・明石（1981）／山階（1934）

【写真】2010年4月19日。君津市豊英／加藤恵美子

（桑原和之）



ホオジロ

C ホオアカ ホオジロ科*Emberiza fucata* Pallas, 1776国：掲載なし
千：C-C-C

【種の特性】 全長 16 cm。ホオジロよりやや小さい。オスは、灌木林や草地で低木や草本にとまり、大きな良く通る声で囀る。囀りはホオジロに似る。夏羽の頭頂と後頸は灰色、頬は赤褐色である。黒い縦斑が胸に帯状に並ぶ。平地から山地の草地、草原で繁殖する（山階, 1934）。水田、畑、採草地、放牧地等の農耕地で見られる。

【分布】 モンゴル、バイカル地方、アムール、中国東部、朝鮮半島、日本で繁殖する。日本、台湾、中国南部、インドシナ半島等で越冬する（樋口ら, 1997）。国内では周年見られる。本州中部と九州では山地の草原、本州北部や北海道では平地の草原でも繁殖する。冬期、南に渡る。本州中部以南の温暖な地域で越冬する。

【県内の状況】 湿地や草地で繁殖する。市川市の北方調整池付近や印旛沼の草地で繁殖期に確認されている（箕輪ら, 2005; 市立市川自然博物館, 1993）。江戸川河川敷等でも繁殖期の記録がある。その他の地域では、越冬期、少数が見られる（桐原・桑原, 1998; 箕輪ら, 1999; 新浜倶楽部, 1988）。

【保護対策】 繁殖地および越冬地である草地や湿地の保全が望ましい。

【引用文献】 樋口ら（1997）／桐原・桑原（1998）／箕輪ら（1999）／箕輪ら（2005）／新浜倶楽部（1988）／市立市川自然博物館（1993）／山階（1934）

【写真】 2010年4月23日. 木更津市長須賀／加藤恵美子

（桑原和之）



ホオアカ

C ハギマシコ アトリ科*Leucosticte arctoa* (Pallas, 1811)国：掲載なし
千：無-C-C

【種の特性】 崖地や造成地等で採食する。

【分布】 旧北区の東部、極東地域から新北区の西部に分布する。冬期には南に渡る。山地で繁殖する個体の一部は、低地に移動し越冬する。国内では冬鳥。個体数は多くない。

【県内の状況】 冬鳥。銚子市屏風ヶ浦等の崖地、造成地で見られていた（桑原・三沢ら, 2006）。房総丘陵でも記録されていた（富谷, 1999）。観察数は減少した。1997年2月17日に太東崎下の造成地で約30羽が記録されている（露崎, 2004）。2005年1月20日に富津市内でオオバヤシャブシの実を採食する17羽の群れが確認されている（奴賀俊光、豊田英臣、豊田るみ子、箕輪義隆私信）。現在、稀に越冬期に見られるだけである。

【保護対策】 採食地等の保全が望ましい。

【引用文献】 桑原・三沢ら（2006）／露崎（2004）／富谷（1999）

【写真】 1978年1月11日. 銚子市見晴台／繁倉 崇

（桑原和之）



ハギマシコ

C カケス カラス科

Garrulus glandarius (Linnaeus, 1758)

国：掲載なし
千：C-C-C

【種の特性】平地から山地の森林に生息する。昆虫類、種子、果実等を採食する。秋にはドングリを地中に貯える。他の動物や鳥類の声や機械音等のまねをする。

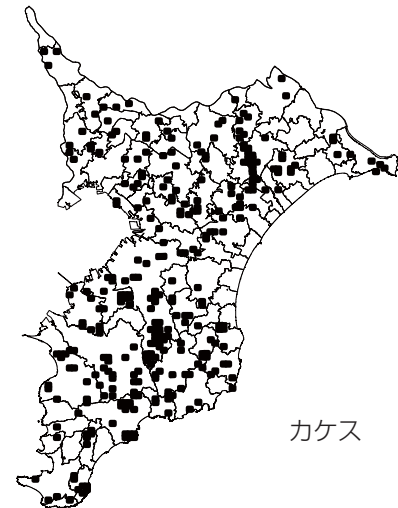
【分布】高山や砂漠地帯を除く、ユーラシア大陸の中・低緯度地方で広く繁殖する。国内では屋久島以北の北海道、本州、四国、九州に分布する。山地で繁殖する個体の一部は、低地に移動し越冬する。

【県内の状況】留鳥。南房総に少なくない（南房総動植物調査団, 1990; 富谷, 1999; 塚田, 1999）。北部では少なく、越冬期に見られる地域が多い（市立市川自然博物館, 1993; 鎌ヶ谷市郷土資料館, 1999）。渡りの時期は、平野部でも見られる（箕輪ら, 2005）。台地や山地の樹林で繁殖する。繁殖個体数は少ない。

【保護対策】照葉樹林や落葉広葉樹林等の保全が望ましい。

【引用文献】鎌ヶ谷市郷土資料館（1999）／箕輪ら（2005）／南房総動植物調査団（1990）／市立市川自然博物館（1993）／富谷（1999）／塚田（1999）

【写真】1996年4月5日。千葉市若葉区 泉自然公園／岡 典弘
（桑原和之・高木 武）



カケス

D カンムリカイツブリ カイツブリ科

Podiceps cristatus (Linnaeus, 1758)

国：掲載なし
千：D-D-D

【種の特性】日本産カイツブリ類の中では最も大きい。海上、内湾、干潟、砂浜等の海岸、河川、河口、湖沼等に飛来する。潜水して魚類、甲殻類等を捕食する。繁殖地では、湖沼の岸辺に水草を積み上げて浮巢を造る。2-6卵を産み、約21-28日で孵化する（樋口ら, 1996）。

【分布】ヨーロッパ、アジア、アフリカ南部、オーストラリア、ニュージーランド等で繁殖する。高緯度地方で繁殖する個体は、暖温帯へ渡る。国内では、主に冬鳥。北日本の湖沼、一部の地域で局所的に繁殖する。青森県下北半島の陸奥小川原湖沼群でだけ繁殖していた。青森県では、各地で繁殖し、特に津軽地方で増加している（青森県, 2010）。現在、石川県河北潟、滋賀県琵琶湖、長良川・淀川等でも繁殖している。

【県内の状況】冬鳥。カンムリカイツブリは内湾に多く、アカエリカイツブリは外海に多い（桑原, 2008a）。東京湾奥部では、個体数が多い（和仁ら, 2003）。習志野市茜浜から船橋市・市川市地先三番瀬、江戸川河口域、葛西臨海公園沖にかけの浅瀬では、1992年以降、2,000-4,000羽の大群が越冬する（桑原・和仁, 1994）。個体数の最大値は、葛西沖で1992年11月16日に記録された8,528羽である（桑原・和仁, 1994）。このような大群は、全国でも他に報告例がない。利根川水系の印旛沼等の水面でも越冬する（箕輪ら, 2005）。九十九里海岸でも見られる（奴賀ら, 2006）。太平洋側では夷隅川河口や銚子等、内陸の水域では山倉ダム・印旛沼・手賀沼等に少数が飛来し、越冬する。千葉市では要保護生物（C）に選定されている（千葉市環境局環境保全推進課, 2004）。

【保護対策】越冬地の環境を良好に維持することが望ましい。東京湾岸の干潟や浅瀬の現状維持が望ましい。ウインドサーフィンや小型船舶等のレジャーによる攪乱も多いため、本種の生息域への侵入防止等の規制も必要である。テグスや釣り針などによる被害も少なくない。漁網等に巻き込まれることも考えられるため、留意が必要である。油流出事故の被害を受ける種でもあるため、油汚染への対策が望まれる。廃棄物の適正処理や漁業従事者、釣り人への指導、啓発も必要である。

【引用文献】青森県（2010）／千葉市環境局環境保全推進課（2004）／樋口ら（1996）／桑原（2008a）／桑原・和仁（1994）／箕輪ら（2005）／奴賀ら（2006）／和仁ら（2003）

【写真】2006年3月23日。一宮町 一宮海岸／高島 斎二

（桑原和之）



カンムリカイツブリ

D カワウ ウ科*Phalacrocorax carbo* (Linnaeus, 1758)国：掲載なし
千：C-D-D

【種の特性】潜水して魚類等を捕食する。樹上で集団営巣する。繁殖地ではカワウが巣材として枝を折る他、糞の付着や糞による土壌の変質により、樹木が枯死する（石田ら、2000）。騒音や悪臭等から周辺住民の問題になる場合が多い。地域により増加している（環境省自然環境局生物多様性センター、2010）。農林水産業や生態系等の被害の発生要因となっているカワウは、2007年に狩猟対象種となった。

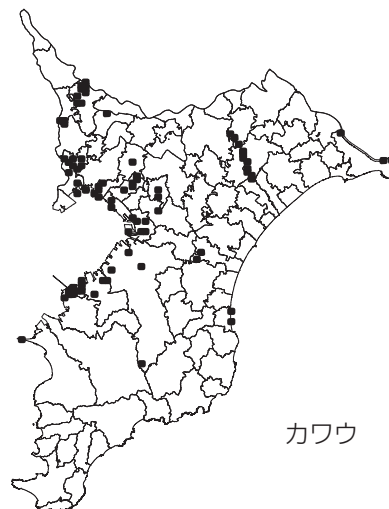
【分布】分布域は広範囲であるが、地域により亜種や独自の個体群が分布する（Vaurie, 1965）。亜種カワウ *P.c.hanedae* は、日本の本州、四国、九州でのみ繁殖する固有亜種である（日本鳥学会、1974）。北海道、南西諸島、サハリン、韓国、台湾などでも飛来が記録されている。本亜種は1950年以降急激に減少した。本亜種の最小推定個体数は30,000羽とされていた（Rose & Scott, 1994）。近年、最小推定個体数は50,000-60,000羽とされている（Delany & Scott, 2006）。

【県内の状況】留鳥。かつて千葉市大蔵寺に大きな繁殖地があった（菅谷、1952）。1935年から1972年まで千葉県の天然記念物に指定された。江戸時代から継続していた大蔵寺の繁殖地は、1960年代には約600羽と減少した（長谷川、1966）。1970年代に繁殖地は全て消滅した（福田、1985）。1990年代に繁殖地は新たに形成された。現在、市川市の行徳鳥獣保護区と小櫃川河口等で繁殖している（箕輪・田村ら、2000）。三番瀬等の遠浅の海域は重要な採食地で数千羽が採食する（桑原・箕輪・石毛、1999; 桑原・箕輪・田久保、1999）。小河川の河口域でも越冬する（桑原、1997b）。

【保護対策】採食地である干潟や浅瀬の現状維持が望ましい。

【引用文献】Delany & Scott (2006) / 福田 (1985) / 長谷川 (1966) / 石田ら (2000) / 環境省自然環境局生物多様性センター (2010) / 桑原 (1997b) / 桑原・箕輪・石毛 (1999) / 桑原・箕輪・田久保 (1999) / 箕輪・田村ら (2000) / 日本鳥学会 (1974) / Rose & Scott (1994) / 菅谷 (1952) / Vaurie (1965)

【写真】2009年6月10日。千葉市若葉区 泉自然公園／大島健夫
(桑原和之・佐藤達夫)



カワウ

D スズガモ カモ科*Aythya marila* (Linnaeus, 1758)国：掲載なし
千：無-D-D

【種の特性】干潟や砂浜、湖沼等の浅瀬、湿地、海上で採食する。越冬期、海上で数万から十数万羽の群れを形成することがある。潜水し、二枚貝や小型の甲殻類等の小動物を採食する。

【分布】旧北区、新北区の北部の広範囲な地域で繁殖する（Madge & Burn, 1989）。冬期には南に渡る。主に海岸で越冬する。国内では主に冬鳥。渡りの時期や越冬期に浅瀬、干潟、砂浜海岸等で見られる。国内では、増加傾向があると考えられている（環境庁自然環境局、2010）。

【県内の状況】千葉県では冬鳥。夏期にも少数が見られる。東京湾では数万羽を超す群れが越冬する（嶋田ら、1996）。九十九里浜では、クロガモ、ビロードキンクロとともに各地で見られる（桑原、2008b）。小河川の河口域でも越冬する（桑原、1997b）。キンクロハジロやホシハジロに比べ、海岸に近い水辺に分布する（嶋田・桑原、1994; 嶋田ら、1997）。東京湾岸では数万羽が見られていたが減少し、大きな群れが見られる湿地は少ない。千葉市では要保護生物（C）に選定されている（千葉市環境局環境保全全部環境保全推進課、2004）。

【保護対策】採食地である干潟や砂浜等の湿地の保全、越冬地である東京湾の干潟や浅瀬の現状維持が望ましい。二枚貝類等のベントスの生息可能な湿地を保全し、生息地の回復を試みることも必要である。浅瀬では生物の多様性に富む水域を復活させることが望ましい。狩猟対象種ではあるが、鉛散弾の規制、定期的渡来地では狩猟の規制などの配慮が必要である。また、越冬地の水面では、パラグライディング、ウインドサーフィンや小型船舶等の利用制限が望ましい。

【引用文献】千葉市環境局環境保全全部環境保全推進課 (2004) / 環境省自然環境局 (2010) / 桑原 (1997b) / 桑原 (2008b) / Madge & Burn (1989) / 嶋田・桑原 (1994) / 嶋田ら (1996) / 嶋田・桑原 (1997)

【写真】2010年3月21日。銚子市潮見町／菅 景成

(桑原和之)



スズガモ

D シノリガモ カモ科

Histrionicus histrionicus (Linnaeus, 1758)

国：掲載なし
千：D-D-D

【種の特性】 河川上流の渓流等で繁殖する。草むらや岩陰等に営巣する。繁殖期、河川の水生昆虫を採食する。越冬期、岩礁海岸の沿岸で甲殻類、貝類、ウニ等を捕食する。渡りの時期以外は、クロガモのようにあまり大きな群で行動しない。

【分布】 東アジア、北アメリカからグリーンランド、アイスランド等で繁殖する (Madge & Burn, 1989)。冬期、内陸の繁殖地から海岸に渡る。カムチャツカ、アリューシャン、北千島、アラスカからカナダの沿岸域で越冬する。国内では主に冬鳥。北海道および本州北部で少数が繁殖する (環境庁, 1981)。本州北部では青森県や宮城県での繁殖記録がある (佐藤・小湊, 1988)。主に本州北部の沿岸で越冬する。河川でも越冬するが、少ない。

【県内の状況】 冬鳥。越冬期、主に銚子市から外房の海岸で見られる (桑原・三沢ら, 2006)。岩礁海岸で越冬することが多い。砂浜海岸に設置された消波ブロック、波消ブロックや護岸用コンクリートブロック等の構造物近くでも採食する (三沢ら, 2005)。1980年代まで銚子市屏風浦等の海岸で百数十羽が見られていた。近年、観察される個体数は少ない。東京湾内では少ない (石黒・桑原・箕輪, 2000)。

【保護対策】 越冬地の保護が望ましい。海岸の護岸整備に伴う環境変化により個体数の減少が懸念される。海岸の護岸整備の方法等に、越冬地に対する十分な配慮が望ましい。

【引用文献】 石黒・桑原・箕輪 (2000) / 環境庁 (1981) / 桑原・三沢ら (2006) / Madge & Burn (1989) / 三沢ら (2005) / 佐藤・小湊 (1988)

【写真】 2005年1月21日。一宮町 一宮海岸 / 高島斎二

(桑原和之)



シノリガモ

D ウミアイサ カモ科

Mergus serrater Linnaeus, 1758

国：掲載なし
千：D-D-D

【種の特性】 海岸や湖沼、河川等に生息する。潜水して魚類を捕食する。

【分布】 ヨーロッパ、シベリア、北アメリカ北部等、広い範囲で繁殖する (Madge & Burn, 1989)。冬期は南に渡る。国内では、冬鳥。各地で見られるが少ない。主に海上に渡来する。

【県内の状況】 冬鳥。沿岸に飛来する (奴賀ら, 2003)。多くない。東京湾の浅海域では、普通に越冬する。特に三番瀬周辺で見られることが多い (千葉県, 2004a; b; 桑原・田中ら, 1994; 桑原・三沢ら, 2004; 嶋田, 1992; 1994)。

【保護対策】 非繁殖期における最大の脅威は刺し網、流し網などによる混獲である (竹田ら, 2001)。重油流出やレジンペレットなど海洋汚染による影響も受けやすい (大畑ら, 2000)。東京湾においては船舶の航行による生息域の攪乱も影響するであろう。東京湾内では浅海域の現状維持が重要である。魚類相の豊富な浅海域の保全が必要である。越冬地の水面では、パラグライディング、ウインドサーフィンや小型船舶等のレジャーによる攪乱も多いため、本種の生息域への侵入防止等の規制も必要である。

【引用文献】 千葉県 (2004a) / 千葉県 (2004b) / 桑原・田中ら (1994) / 桑原・三沢ら (2004) / Madge & Burn (1989) / 奴賀ら (2003) / 大畑ら (2000) / 嶋田 (1992) / 嶋田 (1994) / 竹田ら (2001)

【写真】 2010年1月13日。船橋市潮見町地先 三番瀬 / 中込 哲

(桑原和之)



ウミアイサ

D トビ タカ科*Milvus migrans* (Boddaert, 1783)国：掲載なし
千：C-C-D

【種の特性】ワシタカ類。最も身近な猛禽類と言える。「ピーヒョロロロ」とよく鳴く。海岸線から山地にまで分布する。海岸、漁港、養魚場、河口、ゴミ処理場等集まる（茨城県，1993）。市街地でも見られる。都市化が著しく進行すると減少する（笹川，1993）。長時間高空を旋回し餌を探す。動物の死骸を採食する。昆虫類・ヘビ類・魚類・ネズミ類等も捕食する。ゴミを漁ることもある。アカマツ・モミ等の樹上に小枝を積み上げ営巣する。大きな巣は、直径80-100cmにもなる。越冬期には集団鳩を形成する。数百羽の大群を作ることがある。

【分布】砂漠や北極圏を除くユーラシア、アフリカ、オーストラリア各大陸に広く分布する。高緯度地方で繁殖する個体は、熱帯アフリカや東南アジアに渡り越冬する。7亜種が知られている。国内では、亜種 *M.m. lineatus* が繁殖する。国内では留鳥。ほとんどの地域で周年みられる。北海道から九州で繁殖する。沖縄では稀に迷行例がある。

【県内の状況】留鳥。全県に広く分布する。中南部や外房では普通に見られる（千葉県環境部自然保護課，1986；1994）。東京湾岸から北西部では少なく、ほとんどの地域で繁殖も越冬もしていない旅鳥である（原田ら，1995；桑原・和仁ら，1994；桑原ら，1994；野田野鳥同好会，1991）。営巣地に適している林は急激に減少している。千葉市では重要保護生物（B）に選定されている（千葉市環境局環境保全全部環境保全推進課，2004）。

【保護対策】営巣地となる里山等、採食地となる海岸・河川敷・耕作地等の保全が望ましい。安易に餌付けを行うと一時的に個体数が増加することがある。人の食べ物を奪い取る際に傷をつけられるなどの被害が出ることがあるので注意が必要である（桑原，2006c）。

【引用文献】千葉県環境部自然保護課（1986）／千葉県環境部自然保護課（1994）／千葉市環境局環境保全全部環境保全推進課（2004）／原田ら（1995）／茨城県（1993）／桑原（2006c）／桑原・和仁ら（1994）／桑原ら（2006c）／桑原ら（1994）／野田野鳥同好会（1991）／笹川（1993）

【写真】2006年10月9日。勝浦市／白井妙生

（高木 武・桑原和之）

**D チョウゲンボウ ハヤブサ科***Falco tinnunculus* Linnaeus, 1758国：掲載なし
千：C-C-D

【種の特性】小型のハヤブサ類。河川敷、農耕地、埋立地等、開けた地域で採食する。ノネズミ類、小型の鳥類、バッタ類等の昆虫類、トカゲ類等を捕食する。山地や川岸の崖の横穴等に営巣する。1980年代頃からビルや鉄橋等の人工建造物でも繁殖するようになった（環境庁自然保護局・日本野鳥の会，1994）。工場の通風孔等を利用し、繁殖する（岐阜県健康福祉部自然環境森林課，2001）。ムクドリやねぐらやコアジサシの雛なども襲う（越川，2007；箕輪・桑原・清田ら，2000）。

【分布】砂漠地帯を除くユーラシアとアフリカ両大陸に広く分布する。北方で繁殖する個体は、南へ移動し越冬する。北海道、東北から中部地方にかけての本州で繁殖する。中部地方から東北地方の繁殖記録が多い（環境省自然環境局生物多様性センター，2010）。中国地方・四国・九州でも繁殖期に記録がある。非繁殖期は、全国的に見られる。

【県内の状況】1980年代までは冬鳥もしくは旅鳥であった。現在は留鳥。局地的に繁殖する。越冬期には各地で見られる。1990年代以降、人工建造物に営巣するようになった。繁殖地域は、我孫子市、松戸市等の河川敷の周辺である（環境庁自然保護局・日本野鳥の会，1994）。東京湾岸に面した千葉市、習志野市等の埋立地の工場等でも営巣する（桑原ら，1994；桐原・桑原，1998）。

【保護対策】河川敷、耕作地等の採食地の保全が望ましい。繁殖期の人為的な攪乱を避けるため、繁殖地の情報の取り扱いには細心の注意が必要である。

【引用文献】岐阜県健康福祉部自然環境森林課（2001）／環境庁自然保護局・日本野鳥の会（1994）／環境省自然環境局生物多様性センター（2010）／桐原・桑原（1998）／越川（2007）／桑原ら（1994）／箕輪・桑原・清田ら（2000）

【写真】1981年9月28日。習志野市 京葉港埋立地／石川 勉

（高木 武・桑原和之）



D ムナグロ チドリ科

Pluvialis fulva (Gmelin, 1789)

国：掲載なし
千：無－D－D

保護上重要な脊椎動物

哺乳類

鳥類

爬虫類
両生類

魚類

【種の特性】 中型のチドリ類。水田、河川、海岸、干潟などの湿地に飛来する。干潟、砂浜等の海岸では多くない。ゆっくり歩きながら小動物を探し、時々、立ち止まり、地面の小動物をつついて捕らえる。

【分布】 旧北区の東部のツンドラ地帯で繁殖する。(Hayman et al., 1986)。冬期には南に渡る。アフリカ、インド、中国南東部、東南アジアからオーストラリアで越冬する。南太平洋の島嶼でも越冬する。国内では主に旅鳥。南日本や小笠原諸島、南西諸島等では越冬する(樋口ら, 1996)。

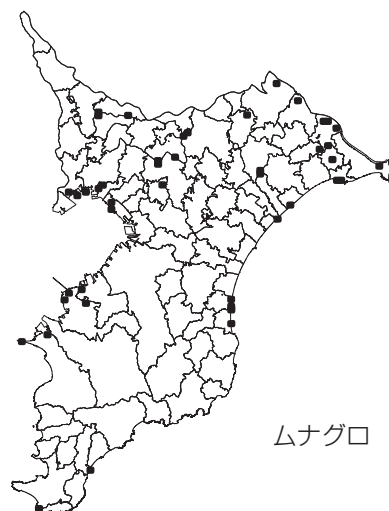
【県内の状況】 主に旅鳥。各地の湿地に主に渡りの時期に飛来する(桑原, 2009)。春の渡りの時期は個体数が多く、利根川周辺の水田や耕作地に飛来する(箕輪ら, 2005)。春の渡りの時期、九十九里平野の水田地帯に飛来する(奴賀ら, 2004)。河口域、干潟およびその周辺の湿地でも、普通に見られる(三沢ら, 2005)。越夏する個体もいる(齋藤・桑原, 1991)。少数が越冬するため、越冬期に見られることもある。東京湾岸や南房総で越冬していたが、越冬個体数は減少した。千葉県では要保護生物(C)に選定されている(千葉県環境局環境保全部環境保全推進課, 2004)。

【保護対策】 採食地である水田、草地等の湿地の保全が望ましい。越冬地としての河口域、干潟、水田等の湿地の保護が重要である。

【引用文献】 千葉県環境局環境保全部環境保全推進課(2004)／Hayman et al.(1986)／樋口ら(1996)／桑原(2009)／箕輪ら(2005)／三沢ら(2005)／奴賀ら(2004)／齋藤・桑原(1991)

【写真】 2004年4月4日。長生村／高島斎二

(桑原和之)



ムナグロ

D トウネン シギ科

Calidris ruficollis (Pallas, 1776)

国：掲載なし
千：無－C－D

【種の特性】 小型のシギ類。干潟、砂浜、水田、河川等の湿地で採食する。下を向きながら、地面をついばみ、小動物等を採食する(石川・桑原, 1984b)。

【分布】 旧北区の東部から極東地域のツンドラ地帯で繁殖する(Hayman et al., 1986)。冬期には南に渡る。主にビルマ、中国南東部、東南アジアからオーストラリアで越冬する。国内では旅鳥。北海道や本州では、主に渡りの時期に飛来する。南日本や南西諸島等では越冬する。越冬する個体は多くない。

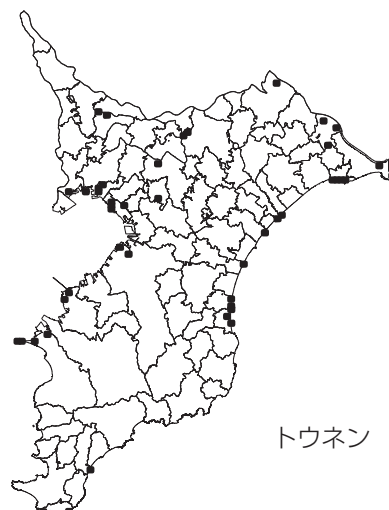
【県内の状況】 千葉県では旅鳥。渡りの時期に東京湾岸の干潟や九十九里海岸で普通に見られる(奴賀ら, 2006)。春の渡りの時期は4月から5月まで、秋の渡りの時期は7月から10月まで普通に見られる(桑原, 2010f)。一宮川河口域の干潟では多かった(三沢ら, 2005; 小川ら, 2004)。東京湾岸の一時的に形成された湿地でも記録されている(桐原・桑原, 1998)。稀に冬期に見られる。個体数は減少したため、現在、数百羽を超える記録は少なくなった。東京湾岸では埋立地の湿地で普通に見られていたが、生息地の消失により、減少が著しい。近年、千葉県では記録が少なくなり、重要保護生物(B)に選定されている(千葉県環境局環境保全部環境保全推進課, 2004)。

【保護対策】 採食地である干潟、浅瀬や砂浜等の湿地の保全が望ましい。採食地の環境を良好に維持することが望ましい。パラグライディング、ウインドサーフィンや小型船舶等のレジャーによる攪乱も多いため、本種の生息域への侵入防止等の規制も必要である。

【引用文献】 千葉県環境局環境保全部環境保全推進課(2004)／Hayman et al.(1986)／石川・桑原(1984b)／桐原・桑原(1998)／桑原(2010f)／三沢ら(2005)／奴賀ら(2006)／小川ら(2004)

【写真】 2004年7月23日。長生村 一宮川河口／高島斎二

(桑原和之)



トウネン

D ミユビシギ シギ科*Crocethia alba* (Pallas, 1764)国：掲載なし
千：無－D－D

【種の特性】主に砂浜海岸で越冬する。水田や内陸の湿地では稀である。二枚貝類や甲殻類等の小動物を採食する（Nuka et al., 2005）。

【分布】極地で繁殖する。冬期には南に渡る。広範囲な地域で越冬する。国内では局地的に見られる旅鳥。地域により冬鳥。砂浜海岸や干潟に多く、内陸の湿地では稀にしか記録されない。

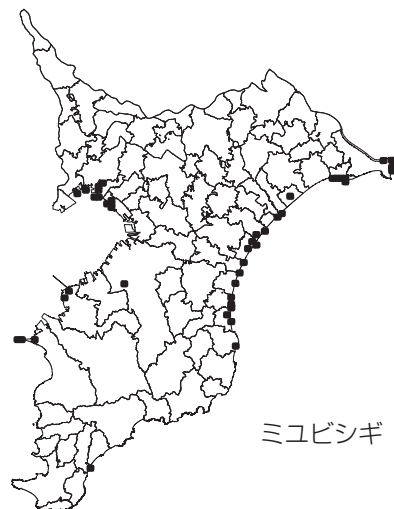
【県内の状況】旅鳥・冬鳥。九十九里浜で越冬する（奴賀ら, 2005）。渡りの時期、数千羽の群れを形成することがある。一宮川河口域の干潟では多い（三沢・桑原ら, 2005; 小川ら, 2004）。東京湾岸では、三番瀬、谷津干潟、幕張海岸、小櫃川河口、富津岬等で越冬する。東京湾岸では人工海浜でも見られる（和仁ら, 2003）。6-7月でも少数が観察される。満潮時に幕張メッセ大駐車場を利用し休息していたが、現在はほとんど利用されていない（桑原・田久保, 1997）。千葉県では要保護生物（C）に選定されている（千葉県環境局環境保全部環境保全推進課, 2004）。

【保護対策】冬鳥。東京湾内および九十九里、外房に残された砂浜の保全が望ましい。パラグライディング、ウインドサーフィンや小型船舶等のレジャーによる攪乱も多いため、本種の生息域への侵入防止等の規制も必要である。

【引用文献】千葉県環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／桑原・田久保（1997）／三沢・桑原ら（2005）／Nuka et al.（2005）／奴賀ら（2005）／小川ら（2004）／和仁ら（2003）

【写真】2010年2月8日。九十九里町片貝／小林大光。

（桑原和之）

**D アオアシシギ シギ科***Tringa nebularia* (Gunnerrus, 1767)国：掲載なし
千：無－D－D

【種の特性】干潟、河川、水田や埋立地等の湿地で採食する。

【分布】スカンジナビア、キルギス、モンゴルからロシア東部、カムチャツカ等で繁殖する。春の渡りの時期は、越冬地から繁殖地に渡り、秋の渡りの時期には繁殖地から越冬地に渡る。南ヨーロッパ、アフリカ、インド、中国南東部、東南アジア等で越冬する。国内では、主に旅鳥。多くない。渡りの時期や冬期に飛来する。南西諸島では越冬するが、個体数は少ない。

【県内の状況】旅鳥。千葉県でも東京湾岸の干潟、利根川流域や九十九里地域で見られていたが減少した。内陸の江戸川周辺水田等でも記録されている（新保・柳沢, 2002）。東京湾岸の一時的に形成された湿地でも記録されている（桐原・桑原, 1998）。干潟や蓮田等の採食地が消失した千葉県では要保護生物（C）に選定されている（千葉県環境局環境保全部環境保全推進課, 2004）。

【保護対策】採食地である干潟、浅瀬、河口域や水田等の湿地の保全が望ましい。狩猟期間中に撃たれることもあり、狩猟者への指導も必要である（箕輪・田村ら, 2000）。

【引用文献】千葉県環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／桐原・桑原（1998）／箕輪・田村ら（2000）／新保・柳沢（2002）

【写真】2010年11月12日。香取市附洲新田／羽賀秀樹

（桑原和之）



D クサシギ シギ科

Tringa ochropus Linnaeus, 1758

国：掲載なし
千：無-D-D

【種の特性】河川、水田や蓮田等の湿地で採食する。干潟等海岸では少ない。内陸の湿地で越冬する。

【分布】スカンジナビア、キルギス、モンゴルからロシア東部で繁殖する(Vaurie, 1965)。春の渡りの時期は、越冬地から繁殖地に渡り、秋の渡りの時期には繁殖地から越冬地に渡る。南ヨーロッパ、アフリカ、インド、中国南東部、東南アジア等で越冬する。国内では冬鳥もしくは旅鳥。全国的に見られる。渡りの時期や越冬期に飛来するが、大きな群れは見られない。

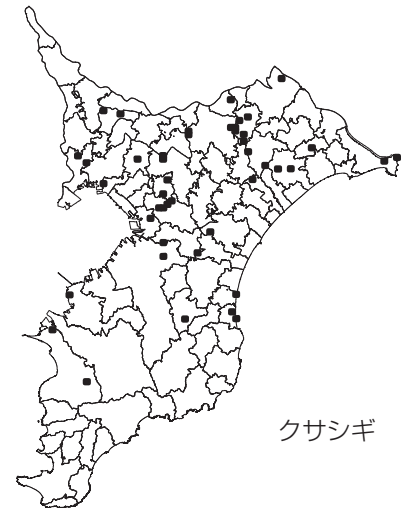
【県内の状況】冬鳥・旅鳥。個体数は少ない。利根川流域、東京湾岸の蓮田や九十九里地域の河川等の湿地で見られる。埋立地や調整池などでも見られる(桐原・桑原, 2000; 原田ら, 1995)。個体数は各地で減少した(原田, 1998; 2002)。千葉市では要保護生物(C)に選定されている(千葉市環境局環境保全部環境保全推進課, 2004)。

【保護対策】採食場所である河川等の湿地の保全が望ましい。レジャーによる河川の利用の制限も必要である。

【引用文献】千葉市環境局環境保全部環境保全推進課(2004)／桐原・桑原(1998)／桐原・桑原(2000)／原田(1998)／原田(2002)／原田ら(1995)／Vaurie(1965)

【写真】2008年9月15日。成田市野馬込／菅 景成

(桑原和之)



クサシギ

D ヒバリ ヒバリ科

Alauda arvensis Linnaeus, 1758

国：掲載なし
千：D-D-D

【種の特性】繁殖期にオスは、空高く飛びながら囀る。農耕地周辺や造成地、空地、海岸、河川敷等、丈の低い草がまばらに生えた草地に生息する。地上で昆虫類や草の種子等を採食する。路傍、畦道等の草本植物の根本等の地上に営巣する。渡りの時期には、数十羽の群を形成する。

【分布】ヨーロッパからカムチャツカ半島にかけてのユーラシア大陸に広く分布する。北方で繁殖する個体は、冬期、南へ渡る。国内では留鳥。北海道から九州で繁殖する。冬期、北日本や高地で繁殖する個体は、低地や暖地に移動し越冬する。

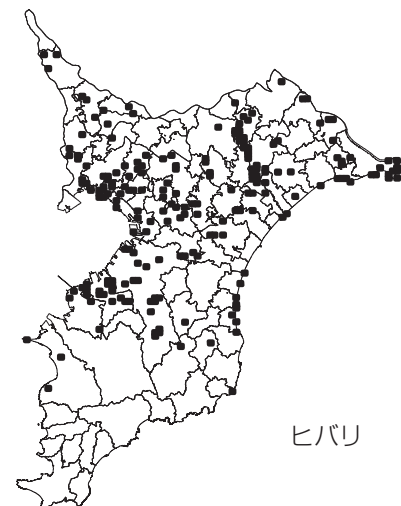
【県内の状況】留鳥。各地に広く分布する。千葉県南部では普通に繁殖する。空地や耕作放棄された農耕地がススキや低木に覆われると営巣できない。宅地化、市街地化により耕作地や空地が減少しているため、個体数は減少している(桑原, 1996)。埋立地や造成地にも生息するが、工事の終了と共に生息地は消失し、個体数は減少する(桐原・桑原, 1998; 2000)。東京湾岸の都市部や葛南地域では個体数の減少が著しい(桑原ら, 1994; 1996)。減少が著しい千葉市では重要保護生物(B)に選定されている(千葉市環境局環境保全部環境保全推進課, 2004)。河川敷や海岸では、人・車両の過度の立入りや護岸整備等により、地上営巣性の種の繁殖地が激減している。

【保護対策】耕作地や海岸・河川敷等の草地の保全が望ましい。繁殖場所確保のため埋立地・造成地・耕作放棄地の繁殖地の保全が望まれる。海岸・河川敷については、車両等の乗り入れ規制の徹底も必要である。

【引用文献】千葉市環境局環境保全部環境保全推進課(2004)／桐原・桑原(1998)／桐原・桑原(2000)／桑原(1996)／桑原ら(1994)／桑原ら(1996)

【写真】2009年5月20日。長生村／高島齋二

(桑原和之・高木 武)



ヒバリ

D ツバメ ツバメ科*Hirundo rustica* Linnaeus, 1758国：掲載なし
千：D-D-D

【種の特性】 人家や駅・商店等の人の住む建造物の軒下に営巣する。一夫一妻で繁殖する。年に1-2回繁殖する。古巣もよく利用する。稀に9月に営巣することがある。主に4-7月に産卵する。一腹卵数は3-7卵である。抱卵後、13-14日で孵化する。抱卵・抱雛は主にメスが行う。給餌は雌雄共に行う。雛には、主に昆虫を与える。市川市における巣の下に落ちたフンの分析結果では、鞘翅目・双翅目・膜翅目の計17種が検出された（早川・寺山, 1993）。雛は17-22日で巣立ち、離巣する。雛は独立すると湖沼、河川流域や河口のヨシ原に集団ねぐらを形成する。夏から秋に何万という大群になるねぐらも確認されている（山本ら, 1999）。

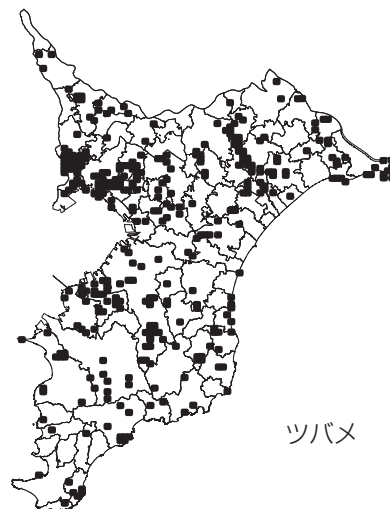
【分布】 北半球の温帯から亜寒帯で繁殖する（Turner & Rose, 1989）。冬期は南に渡る。熱帯地域で越冬する。国内では夏鳥。種子島以北の全国で繁殖する。北海道では主に道南に分布する。霞ヶ浦・浜名湖・九州では、越冬個体群が知られている。

【県内の状況】 夏鳥。県内全域で繁殖する。営巣に適した古い建物が多い街並みや人通りの絶えない商店街、畜産家や農家等での営巣数が多い。成田山新勝寺周辺では1992年に218巣／km²で営巣していた（唐沢, 1996）。印幡沼・富津岬等で越冬する個体が見られたが、近年は記録されていない。千葉市では要保護生物（C）に選定されている（千葉市環境局環境保全全部環境保全推進課, 2004）。

【保護対策】 人家・耕作地が混在するいわゆる里山の保全が有効である。ねぐらとなる湿地の保全が望ましい。都市部では営巣地である建物の所有者・管理者の理解と善意が重要である。

【引用文献】 千葉市環境局環境保全全部環境保全推進課（2004）／早川・寺山（1993）／唐沢（1996）／Turner & Rose（1989）／山本ら（1999）

【写真】 1999年6月20日。千葉市美浜区美浜／岡 典弘
（桑原和之・早川雅晴）



ツバメ

D イワツバメ ツバメ科*Delichon dasypus* (Linnaeus, 1758)国：掲載なし
千：D-D-D

【種の特性】 ツバメ類。ツバメより小さい。ツバメより尾羽が短く、くさび状である。腰が白色で、ツバメとは異なる。脚と趾は羽毛で覆われている。岩場や海岸の崖等で集団繁殖地を形成する。人工物である高架橋やビルに集団で営巣することもある。ツバメの巣と異なる椀形の巣を造る。1980年代頃から都市にも営巣するようになった。

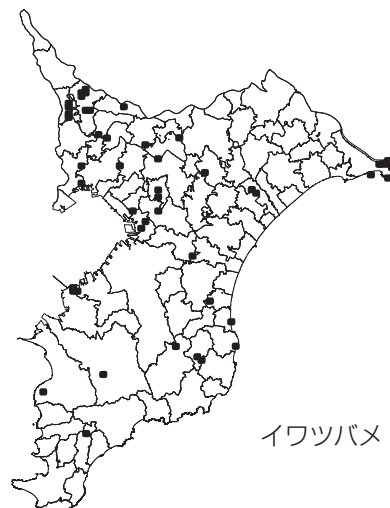
【分布】 ユーラシア大陸の温帯・亜寒帯で繁殖する。冬期は南に渡る。インド・東南アジア等で越冬する（Turner & Rose, 1989）。国内では夏鳥。九州以北で繁殖する。九州や四国では、越冬する個体が見られる。

【県内の状況】 夏鳥。繁殖地は局地的に分布する。1970年代後半まで繁殖記録はなかった。1980年に柏市のJR柏駅東口の高架下で営巣が確認された。その後、市川市・銚子市から千葉市などで繁殖地が確認されている（越川, 1992; 桑原・和仁ら, 1997）。営巣地は全て鉄筋コンクリート製の大きな建造物である（越川, 1992）。渡りの時期には、各地で見られる。千葉市では要保護生物（C）に選定されている（千葉市環境局環境保全全部環境保全推進課, 2004）。

【保護対策】 イワツバメは、高架橋やビルで、集団繁殖をする。集団繁殖地に対する建物の所有者・管理者の理解と善意が重要である。

【引用文献】 千葉市環境局環境保全全部環境保全推進課（2004）／桑原・和仁ら（1997）／越川（1992）／越川（1997）／Turner & Rose（1989）

【写真】 1999年6月25日。千葉市美浜区美浜／岡 典弘
（桑原和之・早川雅晴）



イワツバメ

D カヤクグリ イワヒバリ科

Prunella rubida (Temminck et Schlegel, 1844)

国：掲載なし
千：D-D-D

保護上重要な脊椎動物

哺乳類

鳥類

爬虫類
両生類

魚類

【種の特性】 全長がスズメほどの大きさ。亜高山帯上部の針葉樹林から、高山帯のハイマツ林で繁殖する（大泰司・中川，1988）。ハイマツ等の低木林で、昆虫類や種子を採食する。冬期は、標高の低い地域へ移動する。低山から丘陵の藪等で越冬する。

【分布】 日本と千島にだけ分布する。本州・四国に亜種 *P.r.rubida*、千島と北海道では亜種 *P.r.fervida* が分布するとされていた（日本鳥学会，1974）。越冬期、九州以北の低山地帯から丘陵で見られる。

【県内の状況】 冬鳥。主に南部地域、南房総で見られる（南房総動植物調査団，1990）。越冬期、局地的に分布する（千葉県史料研究財団，2002）。君津市等房総丘陵で越冬する（千葉県教育委員会，1999；千葉県教育委員会，2000）。1970年代以前は、手賀沼等下総地域でも確認されていたようであるが、近年の報告はない（千葉県，1976）。北部の野田市でも記録がある（野田野鳥同好会，1991）。観察例数は減少している。

【保護対策】 低山地帯から丘陵の生息環境の保全が望ましい。千葉県における生息状況が明らかでない。越冬状況および生息地の環境を精査する必要がある。

【引用文献】 千葉県（1976）／千葉県教育委員会（1999）／千葉県教育委員会（2000）／千葉県史料研究財団（2002）／南房総動植物調査団（1990）／日本鳥学会（1974）／野田野鳥同好会（1991）／大泰司・中川（1988）

【写真】 1994年1月23日。君津市郷台林道／田中義和

（桑原和之）



カヤクグリ

D コヨシキリ ウグイス科

Acrocephalus bistrigiceps Swinhoe, 1860

国：掲載なし
千：D-D-D

【種の特性】 同属のオオヨシキリより小さい。より乾燥した草原で繁殖する。オオヨシキリと同所的にみられる場合には、利用空間についてすみわけが見られる（香川，1989）。

【分布】 モンゴル、中国東北部、ウスリー、極東ロシア、朝鮮半島等で繁殖する。北東インド、東南アジア、北部スマトラで越冬する（Wells, 2007）。国内では夏鳥。北海道、本州、九州で繁殖する。北海道では、平地の草原で普通に繁殖する。本州と九州では主に高原で見られる。低地、海岸近くの湿地などでも見られる。

【県内の状況】 夏鳥。利根川沿いの佐原市、香取市、東庄町等の草地で少数が繁殖する。一宮町や東京湾岸の埋立地等でも記録がある（桐原・桑原，1998；2000）。渡りの時期は、各地の湿地で見られる（桑原・三沢ら，2006；箕輪ら，2005）千葉県では重要保護生物（B）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課，2004）。

【保護対策】 河川堤外地や河口の草地等の湿地の保全が望ましい。河川沿いの草原は、周期的な河川の氾濫・洪水によって攪乱されつつ維持されている。洪水がない状態で放置すると、徐々に木本植物が侵入し、河川敷は林に置き換わる。地域により刈り取り等の適度な攪乱を与えつつ、生息地を維持することが望ましい。

【引用文献】 千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／桐原・桑原（1998）／桐原・桑原（2000）／香川（1989）／桑原・三沢ら（2006）／箕輪ら（2005）／Wells（2007）

【写真】 2009年7月11日。東庄町 こじゅりん公園／和田敦子

（桑原和之・戸田光彦）



コヨシキリ

D オオヨシキリ ウグイス科*Acrocephalus arundinaceus* (Linnaeus, 1758)国：掲載なし
千：D-D-D

【種の特性】ヨシ原で大きな声で囀る。ヨシ原に生息する代表的な種である。普通、一夫多妻で繁殖する（羽田・寺西，1968）。

【分布】ユーラシアやアフリカ北西部で繁殖する。東南アジア、アフリカの熱帯域で越冬する。国内では夏鳥。九州以北のヨシ原で繁殖する。

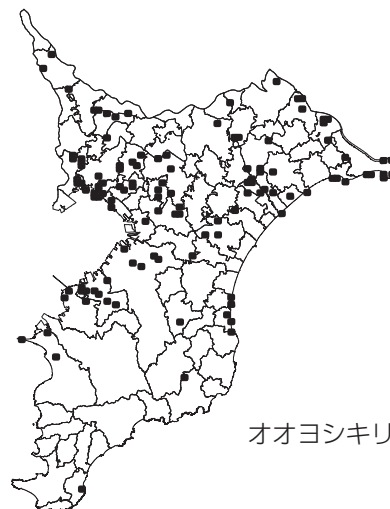
【県内の状況】夏鳥。各地のヨシ原に飛来する。北部の利根川水系の湿地に多い。利根川、江戸川、手賀沼、印旛沼等では普通に繁殖する（小野ら，1990）。東京湾に近接した市川市等の人口が多い地域にも多い（市立市川自然博物館，1993）。内陸部の小規模なヨシ原にも出現する（桑原ら，1994；原田ら，1995）。都市部の調整池などでも繁殖する（和仁，1992；和仁，1998）。大きな河川や湿地が多くない南部からの報告は少ない。ヨシ原や湿地の減少により、繁殖個体数は急速に減少している（鎌ヶ谷市郷土資料館，1999）。千葉市では要保護生物（C）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課，2004）。

【保護対策】河川・湖沼畔のヨシ原を残し、湿地を保全することが望ましい。積極的に生息地の回復を試みることも必要である。

【引用文献】千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／原田ら（1995）／羽田・寺西（1968）／鎌ヶ谷市郷土資料館（1999）／桑原ら（1994）／小野ら（1990）／市立市川自然博物館（1993）／和仁（1992）／和仁（1998）

【写真】2009年6月4日。睦沢町／高島斎二

（桑原和之・戸田光彦）



オオヨシキリ

D セッカ ウグイス科*Cisticola juncidis* (Rafinesque, 1810)国：掲載なし
千：D-D-D

【種の特性】丈の低い乾いた草地に生息する。一夫多妻制で繁殖する（母袋，1973）。繁殖期が長く、メスは生まれた年の秋に繁殖に参加することもある（上田，1986）。草地で繁殖する（山階，1934）。水田、畑、採草地、放牧地等の農耕地や河川敷で囀る姿が見られる。

【分布】熱帯域を中心にアフリカ大陸からユーラシア大陸南部、オーストラリア北部にかけて広く分布する。高緯度地方で繁殖する個体は、暖温帯から熱帯地域へ渡る。国内では留鳥。本州以南で繁殖する。寒冷地で繁殖する個体は、冬期、温暖な地域に移動する。

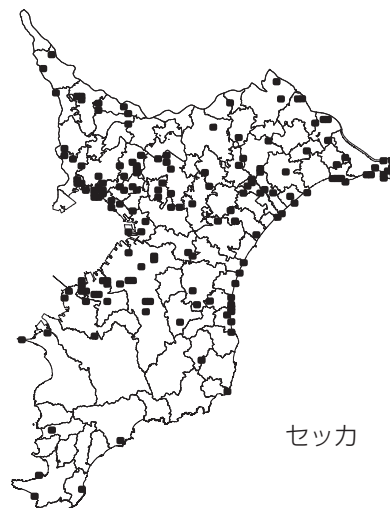
【県内の状況】留鳥。周年見られる。冬期の記録は少ない。各地に分布する。報告例は北部に多く、南部はあまり多くない。耕作放棄地や造成地等、人為的攪乱を強く受ける環境にも生息する。印旛沼等の湖沼およびその周辺域に多い（箕輪ら，2005）。草地等の減少が著しい千葉市では要保護生物（C）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課，2004）。

【保護対策】生息環境である草地の保全が望ましい。繁殖期間中の低茎草地の除草作業には特に注意が必要である。

【引用文献】千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／箕輪ら（2005）／母袋（1973）／上田（1986）／山階（1934）

【写真】2004年6月24日。長生村／高島斎二

（桑原和之・戸田光彦）



セッカ

D クロジ ホオジロ科

Emberiza variabilis Temminck, 1835

国：掲載なし
千：D-D-D

【種の特性】ホオジロ類の中では大きい。オスはほぼ全身が暗灰色、メスは褐色。暗い林内では目立たない。繁殖期は、4-7月。山地のササの茂った針葉樹林内で繁殖する（日本鳥類保護連盟, 1988）。冬期は、関東以西の丘陵地に移動する。下草の茂った暗いスギ林や常緑広葉樹林を好み、林床や藪などで種子をついばむ。

【分布】分布は局所的である。主に日本および周辺に分布する。本州中部以北から北海道の山地で繁殖する。冬期、暖地の丘陵地等へ移動する。国外では、カムチャッカ半島、サハリンのみで繁殖する。

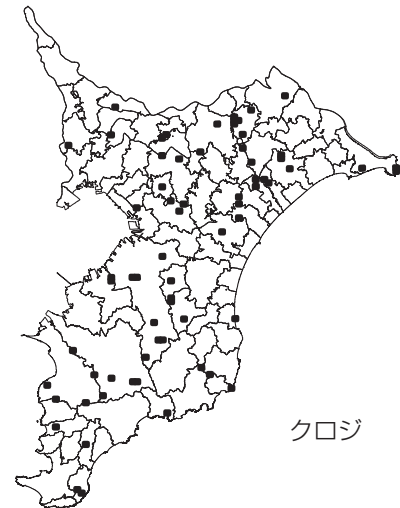
【県内の状況】冬鳥。局所的に分布する（千葉県環境部自然保護課, 1986; 1994）。主に越冬期、南房総の照葉樹やスギ林の林床で観察される（南房総動植物調査団, 1990; 奴賀ら, 2003）。君津市や市原市等の森林で見られる（青木, 1994; 千葉県教育委員会, 1999; 2000）。単独または、2-4羽で観察されることが多い。個体数は少ない。春季の渡りの時期には、北総の地域でも公園の林内などで観察されることがある。東京湾岸では稀である（青木ら, 1992; 小倉ら, 1991）。生息環境である森林の減少により、本種の生息数は減る傾向にある（原田ら, 1995; 桑原ら, 1994）。

【保護対策】越冬地である照葉樹林等の発達した森林の保全が望ましい。

【引用文献】青木（1994）／青木ら（1992）／千葉県環境部自然保護課（1986）／千葉県環境部自然保護課（1994）／千葉県教育委員会（1999）／千葉県教育委員会（2000）／原田ら（1995）／桑原ら（1994）／南房総動植物調査団（1990）／日本鳥類保護連盟（1988）／奴賀ら（2003）／小倉ら（1991）

【写真】2007年1月7日。市原市桜台／加藤恵美子

（桑原和之・青木正志）



クロジ

D オオジュリン ホオジロ科

Emberiza schoeniclus (Linnaeus, 1758)

国：掲載なし
千：無-D-D

【種の特性】「チュウーライン」と長めの延ばす声で鳴く（柳澤, 1973）。河川、湖沼、水田等の湿地の草地で採食する。

【分布】ヨーロッパから極東地域の湿地で繁殖する（日本鳥類保護連盟, 1988）。冬期は南に渡る。地中海沿岸、中東、中央アジア、中国南東部から東南アジアで越冬する。国内では夏鳥として北海道で繁殖する。冬期は南に渡る。国内各地で渡りの時期や越冬期に見られる。

【県内の状況】冬鳥・旅鳥。多くない。近年、個体数は減少した。東京湾岸では埋立地や造成地の草地で普通に見られ、印旛沼などでは普通に越冬する（箕輪ら, 2005）。利根川流域や九十九里地域などの湿地でも普通に見られていた。個体数は減少し、現在、越冬数は多くない。千葉市では要保護生物（C）に選定されている（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課, 2004）。

【保護対策】採食場所である湖沼、水田等の湿地の保全が必要である。

【引用文献】千葉市環境局環境保全部環境保全推進課（2004）／日本鳥類保護連盟（1988）／箕輪ら（2005）／柳澤（1973）

【写真】2006年4月5日。成田市北須賀／本田行男

（桑原和之）



オオジュリン

D イカル アトリ科

Eophona personata Temminck et Schlegel, 1848国：掲載なし
千：D-D-D

【種の特性】 主に山地の落葉広葉樹林に生息する（樋口ら，1997）。大きな嘴で植物の種子を割り食べる。繁殖期、数つがいのなわばりが隣接するルーズなコロニーを形成する。非繁殖期には、数羽から数十羽の群れで生活する。
【分布】 ユーラシア大陸極東部のみに分布する（Flint et al., 1987）。シベリア東部から中国東北部、日本で繁殖する。冬期には南に渡る。中国南部や日本で越冬する（日本鳥類保護連盟，1988）。国内では九州以北で繁殖する。北日本や高地で繁殖する個体は、越冬期には低地や暖地に移動する。東京都でも都市近郊で繁殖していた。

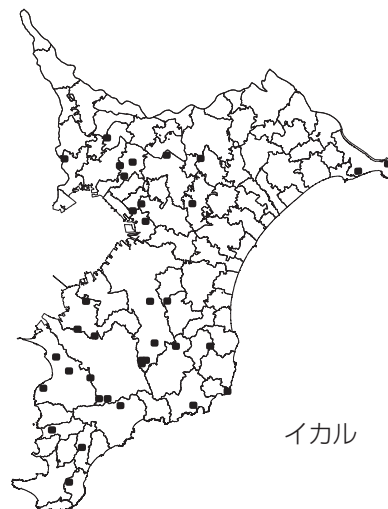
【県内の状況】 主に越冬期に丘陵地や山地で記録される。観察例は少ない（千葉県環境部自然保護課，1986; 1994）。生息状況は詳細に把握されていない。繁殖期の記録もあるが、確実な繁殖記録はない。市街地の公園などでは近縁のコイカルなども見られる（桑原，1990b）が、イカルは稀である。

【保護対策】 発達した樹林環境の保全が本種の保護に有効と考えられる。

【引用文献】 千葉県環境部自然保護課（1986）／千葉県環境部自然保護課（1994）／Flint et al.（1987）／桑原（1990b）／樋口ら（1997）／日本鳥類保護連盟（1988）

【写真】 2007年1月23日。市原市／加藤恵美子

（桑原和之・青木正志）



イカル

哺乳類

鳥類

爬虫類
両生類

魚類